
fenrir 魂の乱獲者を喰らう者達

ハボック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f e n r i r

魂の乱獲者を喰らう者達

【Nコード】

N 4 8 1 0 Q

【作者名】

ハボック

【あらすじ】

ここはポケモンだけが住む世界・・・だがここでもテロや殺人が起きる。

ある年の事件は平均的な数だった。それから月日が流れたその年、世界は大量虐殺事件が異常に多発した。

原因は人口密度が爆発するほど増えたと考えられていた。確かに人口密度はかなり増えていた。

だが、この大量虐殺事件に何かを嗅ぎつけたのか、ある便利屋がで

きた。

便利屋の名は f e n r i r 。

その f n r i r の事務長、ルカリオのソルと f e n r i r の部下と
様々な事件が繰り広げる長い戦いの物語が
今、始動する。

様子見作品なのでデキは悪いです。

ミッション

エザベルシティ。この街のエザベルホテルでテロ事件が発生・・・いや鎮圧されようとしていた。

エザベルホテル受付場。

「ああ？何だアイツ！」

「さあな？ハハハ！ただの痛てえ奴じゃねえの？」

テロリストの部下と思えるポケモンが笑って言った。しかし顔は引きつっていた。

彼らの目の前には一体のルカリオがいた。しかし、普通とは違った。まず身長が160以上とかなり

背が高い。次に赤黒いコートを着ているこれは普通とも思える・・・が背中には160センチ以上の

半月のような片刃のツーハンドソードを担いでいた。

ついでに言くと剣の腹の中央には赤く光る巨大な目のような石の塊が埋め込まれている。

そして両手には装甲車も打ち抜きそうな大口径の白と黒の拳銃を持っている。どう考えても異常としか思えない。

そのルカリオが真っ直ぐホテルに向かって来る。

「さあて、死んで貰うか。関係ないポケモンの魂を沢山喰ってったクソヤロウ共（笑）」

た。しかしこれが現実。

キリキザンは震える声で通信相手のルカリオに叫んだ。

「おまえはあ、お前は一体何者だああ！！！」

「オレか？オレは便利屋^{フェンリル} f e n r i r の事務長、ソルだ。」

「何？事務長だと！？」

「ああ、もう一度言うが念仏唱えとけ。んでもってオレに大人しく殺されるか自殺しろ。どの道、アンタ等に生きてでることはもう出来ないからな。」ブツ・・・

通信が切断された。キリキザンの周りの部下はキリキザンを見ていた。そして急にキリキザンを数人の部下が身動きがとれないように掴んだ。

「な、何をするんだ！」

キリキザンがワケわからないと顔をする

「アンタを引き渡せば俺たちは助かるかm」ダンダン！！ギイン！
ガン！バキン！ズギュ！ズバ！ダン！カンカン！ザシュ！ドス！ゴ
オオオオオオ！！ズバシュ！！！！ドサドサドサドサドサドサ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・カツカツカツ

ドアの近くから聞こえた戦闘の音。音が聞こえなくなってしばらくした後歩く足音が聞こえてきた。

そして
・
・
・

コンコン

[illegible]

来てしまった。
・
・
・
・
・
・
・
奴が。

ノック。それは彼らの終わりを意味する。

「小便是済んだか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えながら命乞いする準備はオーケー？」

ドアの奥から声が聞こえた。奴だ。あのルカリオの声だ。

そしてドアが開かれた。そこには……

便利屋 f e n r i r 一階 応接室

「え、何？報酬9割カット？」
ソルが棒読みで言う。

「そ、あなたホテル半壊させたでしょ。派手にやるなっていったでしょうが」

ホテルの料理長のユキメノコが言い返す。

「損傷があまりにもひどいから報酬を減らすことにしたのよ。9割。

」

「ヒドス・・・テラヒドス・・・ω・・・」

「それ事務長が言う言葉？（汗）」

f e n r i r の部下達が影からソルとユキメノコのやり取りを見ている。

「またやらかしたのか、事務長・・・」

右腕に銀の腕輪を付けているジュプトルが呆れた声で呟く。

「オイラ達が確認してこれで10回目だね・・・」
赤いバンダナを結んでいるグライオンも呆れて呟く。

ちなみに報酬金額は60万ポケだったが、ソルがいろいろやらかしたおかげで9割減らされて6万ポケが今回の報酬となってしまった。

（ちくしょう、これじゃあチョコレートサンデーがタップリ食べねえ。もう少し増やしてくれてもいいじゃねえかよ・・・）
ソルがしょんぼりした顔で心で愚痴を言った。

ユキメノコの方はというと・・・ため息をついていた。

ちなみにあのテロリストは一人残らず皆殺しにされていた。

これが便利屋 f e n r i r の主な仕事、日常である。

ミッション0（後書き）

作者「すばらしい・・・」

ソル「なにがだ？」

作者「じつは成り行きで書いたんだよこれ。」

ソル「・・・そんな思考で大丈夫か？。」

作者「大丈夫だ、問題ない。」

ソル「あ、つまるな、これは。ところで部下はいつ紹介するんだよ。」

作者「まあ近い内に紹介するよ。」

ソル「本当に大丈夫かよ。」

ミッション1：イリス村奪還作戦パート1：出勤（前書き）

前回はキャラ紹介できなかったからここで紹介します。

ソル「おい、いきなり奪還作戦つてきついだろ（疲れる意味で）。」

大丈夫だ、問題ない。

ジュプトル「前も言ったよな。その言葉。」

まあ、気にするな。あっそうそう、ミッション0にあったsとかzやmはパニックになって上手く話せてない状況に仕立てるために書きました。入力ミスじゃないですよ。

グライオン「それよりさっさと始めようよ。」

はいはい。それにしてもどさくさにまぎれて入って来るとは。

ミッション1：イリス村奪還作戦パート1：出勤

便利屋

f e n r i r 5階 事務長室

「zzzzzzzzzzzzzzzzzzzz」

ベッドで事務長のソルは寝ていた。以外にもいびきはしないみたいだ。

コンコン

ドアをノックする音が聞こえた。ソルはまだ寝ている。ちなみに時間はAM5：00である。しばらくまっても返事はこない。まだ寝ているみたいだ。

「やっぱりまだ寝てる。また僕が起こさないといけないのか。」

一匹のマグマラシがそう呟いて部屋に入ってきた。

「ソル、起きて。もう起きる時間だよ。」

「んん？ああ、もうこんな時間か。おはようエレン。」

マグマラシがソルの肩を揺さ振るとやっと起きた。

「おはよう、ソル。もうみんな食堂にいるよ。」

エレンと呼ばれたマグマラシが言い返す。気づいていると思うが、エレンは女性の名前。

つまりこのマグマラシは♀である。何故一人称が僕なのかは気にしてはいけない。

「ハイハイ、分かってるって。」

ソルが曖昧な返事で言うとソルはあの赤黒いコートを着た。コートの胸の部分にはすでに白と黒の大口径の拳銃が胸のホルスターに入っていた。

白い拳銃には whitdevil（白い悪魔）

黒い拳銃には blackangel（黒い天使）と金色の文字で書かれていた。

そして目のような形をした赤く光る巨大な石の塊を剣の腹に埋め込んだ半月のような片刃のツーハンドソードをコートの背中部分にある止め金に引っ掛けた。

柄の部分には赤色の文字でこう刻まれていた。 D?insleif

f（ダーインスレイブ）

装備を整えたあとソルとエレンは事務長室から出た。

食堂に行けば朝食と構成員たちが待っていた。といもつても、事務長含めて5人しか構成員はいない。

「相変わらずガラガラだな、この食堂。なあ？事務長。」

右腕に銀の腕輪をつけているジユプトルがソルに向けて言った。

「へたれな構成員なんていらねえしな。ククク・・・ここには異常な奴しかいないのはわかってるだろ？エグバード。」

「まあな。」

エグバードと言われたジユプトルと会話している時に首に赤いバンダナを結んだグライオンが割り込んできた。

「え、てことはオイラも異常なの？」

「当たり前だ。試験の時に「200人以上の敵がいても戦えるか？」とオレが言ってお前は「戦える！」といったんだからな、ベリアル。」

「うっ。た、確かに。」

ベリアルと言われたグライオンが言葉を詰まらせる。

「異常でなければここにはいられないだろ？ソル。」

ソル達の手前のテーブルにいる青いジャケットを着たもう一人のル

カリオが言う。

「ああ、そうだ。アマテラス。お前の口クでもない過去のようにな。」
「・・・その話はやめてくれ。」

アマテラスと言われたルカリオは少し顔を歪めると同時に顔を赤くする。何故かエレンも少し顔が赤かった。

「おや、顔が赤いぞ御二人さん？」

エグバードがからかうように笑って言う。

「え、何々？」

「ベリアル、お前わかんねえのか？」

ベリアルが理解できずにいたところをソルに鈍感だとも言ってしまうように若干馬鹿にして言った。

エグバードが更に追及するように発言する。

「つまりだな、このバカップルは過去にピーでピーなことw」
「ああもう！その話はやめろー！！！」

アマテラスが大声をあげて発言を中止させる。

「み、みんなそれよりも早く朝食食べよ？」

エレンが少し慌てて言う。

「ちえっこれからが面白いのってのになあ。」

エグバードが頭をガックリ下げて呟いた。ベリアルはまだ分からずにいた。
それから構成員と事務長の5名だけで朝食を食べた。念のためにいうがf e n r i rには事務長と構成員全員含めて5名しかいない。なんと寂しい人数だ。

A M 7 : 5 0

便利屋f e n r i r 1階 応接室

f e n r i rのメンバーは何しているかというところ……

「悪いな、ロイヤルストレートフラッシュだ。」
「だー！くっそ、又負けた！！」
「畜生！全然読めねえ！」
「コールしなくてよかった……」
「お前等コールしすぎだ。」

ポーカーをしていた。ロイヤルストレートフラッシュを出したのはアマテラスだった。負けたのはベリアルとソル。勝負から降りていたのはエレンとエグバード。

ポーカーをやってギヤーギヤー言ってる内にドアが開く音がした。

「ここですか？大量殺害者に関係していることなら何でも引き受けるという便利屋は。」

一体のボスゴドラが尋ねて来た。

「ああ、そうだ。大量殺害者に関係していることならテロリストだろうが強盗集団だろうが宗教集団だろうがなんでも引き受ける便利屋fenrirだ。ちなみに対象外だが護衛や見張りもオーケーだ。」

ソルがその問いに答える。

「そうですか。あ、申し遅れました。私はイリス村の村長のブライアンです。」

ブライアンと名乗ったボスゴドラが頭を下げる。
今までポーカーをしていたみんなが口を止めて聞いていた。

「で、用件は？」

ソルが尋ねる。

「私の村を盗賊団から奪還して欲しいのです。」

ブライアンが怒りに震えた声で頼み込んだ。
ソルは気にしないで質問をした。

「盗賊団の規模は？ざっとどれくらいだ？」

「400人近くはいました。」

「盗賊団の団体名は？」

「確かスレイプニルと言っていました。」

「スレイプニル？ああ、あの大盗賊団か。」

スレイプニル・・・「滑走するもの」と意味だ。他にも8本脚の軍馬という意味もある。

ここでは世界でも名の知れている盗賊団だ。

「ふ、なるほど。奴らは今度はアンタの村に来て略奪しに来たってわけか。」

「はい。どうか奴らを追っ払う・・・いえ、跡形の残らない程に消し
てくれませんか？」

ブライアンが拳を震わせて頼んだ。

「・・・いいぜ。消してきてやるよ。ただし条件がある。」

「・・・何ですか？」

ブライアンが真剣な顔で聞く。

「まず一つ。アンタの村だ。オレたちfenrirは一人でも力が
あまりにも強大だ。そのため高い確率で村を壊滅に追い込む可能性

が高い。それでもいいか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええ、構いません。もう村はほとんど壊れていますから。」

「それともう一つ。報酬だ。一応聞くがどれ位だ？」

「100万ポケです。」

「よし、十分だ。最後に一つ。この依頼書に署名を書いてくれ。」

「・・・・分かりました。」

ブライアンは依頼書に署名した。

そしてソルが開戦を宣言するように言った。

「さて、お前たち聞いてたな？これからイリス村に行つてスレイプニルを抹消する。規模は400人程度。とりあえず ベリアル、アマテラス、お前等来い。」

ソルがベリアルとアマテラスを呼んだ。

「分かった！」 シャキーン！

ベリアルが手のハサミを鳴らして承諾した。

「了解・・・・」 チャキ

アマテラスが黒い鞘と黒い日本刀を持って静かな声で承諾した。

ソルが残り二人に言う。

「残り二人はfenrirで待つてろ。」

「はいよ。」

「うん。」

エレンとエグバードも承諾した。
準備は整った。後は目的地に移動するだけ。

「よし、便利屋フェンリル始動だ！目前ターゲットが完全沈黙するまで徹底的に叩け！作戦はサーチアンドデストロイ！見つけたら即排除だ！！！！」

そして3人はfenrirから出てイリス村へ行った。

ブライアンは不安だった。本当にたった3人で消せるのだろうか。

「あーあ、可愛そうにスレイプニル。3人も言ったら2分以内に終わるな。」

「！！！！؟؟？」

エグバードの言った言葉に驚きが隠せなかった。

（400人近くの大盗賊団が二分以内に壊滅だと？バカな！！！！）

この後ブライアンは知ることになる。

反則地味な戦力の差を。

ミッション1：イリス村奪還作戦パート2：襲撃（前書き）

前回は誤字ひどかったな。

ソル「そうだな。なんでああなったんだ？」

いや時間が迫ってからチェックせずに投稿しちゃったんだよ。

ソル「余裕もってやれよ（失笑）」

まあいいや。それではどうぞ。

ミッション1：イリス村奪還作戦パート2：襲撃

PM2：30

イリス村 村長の家 一階

「いい葉巻吸ってんなあ、この村の村長。この村はすぎるんだよ。」

ラムパルドが葉巻を吸いながら村に愚痴を漏らす。

「この村は小さい割りに資源の質がいいからな。」

ギャロップがラムパルドに答えた。

短い雑談を交わしている最中に最悪の襲撃が来た。

ドガ

ン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

大きな爆発音と地震が起きた。

「な、何だ!?!」

ラムパルドが慌てた。

「落ち着け。ただの襲撃だ。叩き潰せば……………な、何だこれは!!!!!!!!!!」

ギャロップが外の様子を見て声を荒げた。
村の中央に巨大なクレーターが出来ていた。そしてその中心にソルがいた。
今の一撃でスレイプニルの部下9割が無残な姿になって横たわっていた。
時間は遡ること五分前。

イリス村 上空1万メー

トル PM 2:25

「なあ、ホントにここからダイブするのか？」

「ああ、ここだ。ベリアル。」

ソルはベリアルの背中に乗っていた。そしてここからダイブするらしい。

普通、こんな高さからダイブしたら骨が折れるというレベルでは済まされない。だがこいつ等は普通ではない。ハッキリ言うと化け物だ。

「じゃ、いつてくるぜ。」

そう言ってイリス村に向かってダイブした。
落ちる最中にダインスレイブを背中から抜いてビリヤードのキューを持つようにして村の中央に突っ込んだ。その時ダインスレイブからは赤黒い炎が出ていた。

PM 2:29 イリス村の門にアマテラスは来ていた。

「おい、ここに何の用だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何だコイツ？さっきから黙ってやがって。」

ガバイトとマタドガスがアマテラスに問い詰める。アマテラスは黙ったままだ。

「おい聞こえてんのk」 シーン！

「な、」

「隙丸出しだ、間抜け共。」

アマテラスはいつの間にか居合い斬りを行っていた。しかも日本刀はすでに収まっていた。2匹はそのまま倒れた。

「さて、行くぞ。黒竜。」

日本刀の名を言うとアマテラスはその場で数十回居合い斬りを行った。そしてその斬撃は広範囲に広がった。

ヒィン・・・・・・・・

h?

何か鋭利な物を通った音がした。しかし部下達が気がついた時には遅かった。いつの間にか部下達はバラバラに砕け散っていた。これと同時にあの爆発音が鳴り響いた。

ドガ

ン
!
!
!
!
!
!
!
!
!
!

そして現在に至る。

黒い炎が当たっていた所は跡かも無く砕け散っていた。広がった距

離は半径200メートル。村長の家を除く半径内にあった全てが破壊された。

村長の家にあったスレイプニルの部下数十名とラムパルドとギャロツプだけが取り残された。

みな、呆然としていた。さっきの一撃で目の前にある全てが消し飛ばされたからだ。

「なんでだ？なんでこうなったんだ？」

「知るかよ、オレなんてじじい一人殺しただけだぞ？」

部下達がザワザワ話し合っていると彼らの後ろから声がした。

「アンタ等がスレイプニルに入って殺しをしたからだ。」 シャキイン！

スレイプニルの全員が後ろを振り向くと手のハサミを鳴らしているベリアルがいた。

「ひ、」 ジャキン！！

部下の1匹が右手のハサミによって首を跳ね飛ばされた。ハサミギロチンだ。

同時に左手のハサミで破壊光線を放った。

ド
ン！！！！！！！！

村長の家が今の一撃で崩壊した。

食らっていなかったのはギャロツプだけで他の全員は一人残らず破壊光線の餌食になった。

ギャロップはとっさの判断で外に出たが待っていたのは死の知らせだった。

「何所へ行こうというのかね（笑）。」

!

ソルがダーインスレイブを肩にのせて待っていた。隣りにはアマテラスもいる。

続けてアマテラスがこう言った。

「どんな気分だ？散々暴れてこうなった気分は。」

「う、うあああああああああああああああああああ

追い詰められたギャロップは後ろに振り返って逃げ出した。しかしソルが逃がす訳がなかった。シャドークロウを応用して自分独自で編み出した闇の五本指の手を瞬時に作り出した。そして胸のホルスターに閉まってあった大口径の拳銃の一つブラックエンジェルを取り出してギャロップの頭部目掛けてトリガーを引いた！

ダンダンダン！！！！

ズザアアアアアアア・
・
・
・
・
・

•

ギャロップは頭部に3発銃弾を食らってこの世を去った。

室

P M 7 : 0 0

便利屋 f e n r i r

一階 応接

ブライアンは啞然としていた。ベリアルから渡された写真を見て腰を抜かしていた。

「こ、これは一体。」

アマテラスが申し訳なさそうに言った。

「アンタの村。悪い、暴れすぎた。」

書類の整理をしていたエレンが見に来た。

「また派手にやったね。ソル、アマテラス、ベリアル。」

「あーさすがにやり過ぎたかな。」

ベリアルも申し訳なさそうに言う。

ちなみにソルはというと……………

「サンデー♪サンデー♪チョコットサンデー♪」
……………変な歌を歌っていた。

「ソルー。前の依頼で壊した喫茶店の修理費こっちに来たぞー（笑）」

エグバードが紙切れをヒラヒラさせて笑って言った。心ではこう言っている。「アーヤベ、マジウケル！（爆笑）」

「へ？」

それからソルがギャーギャー騒いだがみんなは気にしていなかった。いつもの事みたいだ。

「で、では報酬を払います。」

ブライアンが報酬100万ポケ払うとよろしながら便利屋fennrirから出た。

しかし、前の依頼で壊した喫茶店の修理費のせいで今回の報酬が殆ど無くなってしまった。

そしてソルがfennrirの室内で思いっきりで叫んだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお………オレ
のチョコレートサンデ
……………」

この叫びで今日の日は幕を閉じた。

ミッション1：イリス村奪還作戦パート2：襲撃（後書き）

ソル「何だよこれ・・・」

ギャグで閉めようと思ったところだった。

アマテラス「なんという」

まあそう言っていないで次回予告頼むよ。

アマテラス「了解。」

次回予告

30

アマテラス「オレとエグバードとエレンはカービスシティへ向かった。その依頼の内容ではカービス高速道路で大量の死体が見つかったらしい。原因を探るべくオレ達はカービスシティへ向かった。

次回 f e n r i

r 魂の乱獲者を喰らう者達

ミッション2：カービス

高速道路大量殺人事件。」

p
s

更新遅れるかもしれません。

ミッション2：カービス高速道路大量殺人事件パート1：ダブル出勤（前書き）

前書き？ないよ？

ソル「じゃ、書くな。それと聞きたいことがある。」

なんだ？

ソル「なんで今回オレじゃなくてアマテラスなんだ？」

それはこれからわかるよ。

ミッション2：カービス高速道路大量殺人事件パート1：ダブル出勤

????????????

「どおしてもここから去ってしまうのか？ソル？」

神父の服を着たゾロアークが机に座っている目の前のルカリオに言った。ソルみたいだ。だが、体全体が赤黒い。

「ああ、こんな所にいたら腐る。それに悪魔はここにはいてはいけないだろうが。」

「知らんな。この孤児院には何者だろうが関係ない。普通のポケモンだろうが、神だろうが、悪魔だろうがな。」

内容のよく理解できない会話をしている。

ソルが机に置いてあったダインスレイブを持った。

「止めても無駄だ。オレはここから出て、魂を貪っている悪魔とポケモン共を狩る。」

「はあ、全くこの親知らずめ。」

「生憎、親はいないんでな。（笑）」

「親ならここにいるぞ？」

「何所にだ。まさか「オレです。」とでも言うきか？」

「正解。」

「……………くだらねえ……………」

3 : 0 0

便利屋 f e n r i r 5階 事務長室 A M

「チツやな夢を見ちまった。」

舌打ちをして不機嫌な顔で目が覚めた。時計を見るともつと不機嫌になった。

「おいおい、起きるには早いぞこの時間。けど寝るとまたあれを見そうだな。」

あの夢を見ると寝れなくなるらしい。おまけにばつちり目が覚めていた。これでは寝ようにも寝れない。

仕方ないためソルは何時もより先に食堂に行って時間を過ごした。

時間をいろいろスルー。

便利屋 f e n r i r 1

階 応接室 A M 9 : 0 0

カアン！

「オレの勝ちだな。」

「チツまたかよ！」

ソルとエグバードはビリヤードで勝負していた。ソルはまた負けていた。

「お前力入れすぎ。何発玉外してるんだよ。」

「ふん！やるなら撃ち込んでぶった切るほうがオレは好きだからな。」

「

エグバードとソルが会話している時にアマテラスとベリアルとエレンはテレビで天空の〇〇ピュタを見ていた。

「見る、人がゴミの様だ！！ハッハッハ！」

「凄い名言放つな。コイツ。」

「なんでこんなの思いついたんだ？」

「さすが〇ス力だね。」

三人がそれぞれ感想を言っていた。
そんな時に仕事の依頼が来る。

「ここですか。便利屋 f e n r i r は。」

黒いコートを着たサングラスをした二ヨロボンが入ってきた。

「ああそつだ。大量殺害者に関係していることならテロリストだろうが強盗集団だろうが宗教集団だろうがなんでも引き受ける便利屋 *f e n r i r* だ。ちなみに対象外だが護衛や見張りもオーケーだ。」

ソルが前回と同じように答えた。

「私はカービスシティのカービス高速道路管理局の者です。今日ここには、仕事の依頼で来ました。内容は高速道路で大量の死体が発見されたのです。警察にも連絡したのですが、調査に行った調査員が全員死体となって発見されたのです。これを考慮して危険度が高いと認識。そこで実力に定評のあるあなた方に頼みに来ました。」
「調査員が行って全員死亡か。何かあるな。よし分かった。承諾しよう。エグバード、アマテラス、エレン。お前達で行って来い。」
「了解」

ソルが三人を指名して三人とも声を揃えた。

エグバードはブッシュナイフに似た暗殺用自作ナイフ、コヨーテを腰の真後ろにあるナイフの鞘に差した。

ベルトには緑色の鎖の偽装した鞭、ヨルムンガンドがある。

アマテラスは前と同様、黒竜を手を持った。

エレンは首にただの白いスカーフを首に巻いた。

アマテラスが号令をかけた。

「よし、カービスシティへ行くぞ。」

「はいよ。」

「うん。」

三人はカービスシティへ向かった。

「さて、私も行きますか。報酬は先に払っておきます。60万ポケです。」

ニヨロボンが先に報酬を払った。

「いいのか？」

「貴方方はこれまでやってきた依頼を全て成功させています。だったら今回も成功させてくれるはずです。」

「まあ、そうだけだな。」

「ではこれで。」

ニヨロボンはfenrirから出た。それから残った二人は書類の整理をしようと思ったが本日二人目の依頼者がやって来た。

だがこの依頼の話はミッション3で。

ミッション2：カーピス高速道路大量殺人事件パート1：ダブル出勤（後書き）

ソル「短いな。」

まあいいじゃん。

ソル「いいもんかよ。」

終わり良ければ全て良しなんです。
次回三人には暴れて貰います。

「ば、バカじゃねえの！？お嬢ちゃん達が解決するだって？アツハツハツハ！！」

「おい、コイツ今すぐヨルムンガンドで叩いて良いか？」

ズルズキンの爆笑に腹が立ったのかエグバードがヨルムンガンドに手を伸ばした。

アマテラスがそれを制する。

「やめろ。やるなら「アイツ等」にやれ。」

アマテラスが言った「アイツ等」とはサービスエリアの入り口付近にいるポケモンの集団だ。200匹近くいる。

だがそのポケモンの集団は何かが違った。

体全体が灰色と赤色で染まっている。エレンが大声で暴走族に言った。

「貴方達！できるだけ後ろに下がって！！」

「へ？」

アマテラスとエグバードはそのポケモンの集団に突っ込んでいた。

「出たな、悪魔化したポケモン共！」

「な、何？悪魔化？？！！」

アマテラスの発言に？を浮かべる暴走族。

この悪魔化というのは記録に記載しておこう。

「ハララララララララ！！！！！！！！！！」

「あびggghfjjgghdhhjjgghふおggghggd.....」

「イヤアアああ嗚呼ああいいいいいい！！！！！！！！！！」

そのポケモンの集団が奇声を上げながらアマテラスとエグバードに攻撃を仕掛けた！

「居合い斬り上級ノ巻 紅葉吹雪！」

アマテラスが黒竜で30回居合い斬りを繰り返すと赤い斬撃がポケモンの集団を切り刻んだ。

赤い斬撃が当たったポケモン達はバラバラに吹き飛んだ。

「オラオラオラオラアア！」

エグバードは電光石火を使ってコヨーテでポケモン達の首や急所を切っていた。エレンが戦闘に参加して来た。

「火炎放射！」

エレンが火炎放射を繰り返すと広範囲に炎が広がった。だがこの火炎放射は殆どのポケモンの集団を飲み込んだ。並の火炎放射じゃない。もはや噴火レベルである。それでもまだ倒れていない奴がいた。エグバードとアマテラスはその場から離れていた為当たらなかった。

「ヨルムンガンド！！」

エグバードがヨルムンガンドを掴んで力を込めた。すると鎖が一気に50メートル位に伸びた。そして残っているポケモン達をヨルムンガンドを振り回して一匹残らず吹き飛ばした！

「ふう。殲滅完了。」

エグバードが一息ついて呟いた。この間、僅か20秒。
20秒で200匹近くのポケモンの集団が一掃された。
暴走族はその場で啞然としていた。たった3人の少年少女に200
匹近くのポケモンの集団を30秒もたたずに殲滅されたのだ。

「さあ、帰るぞ。帰って報告しなければな。」

アマテラスが二人に呼びかける。エグバードはカメラで証拠となる
写真を撮っていた。

「はいよ。」

「うん。」

3人はその場を後にした。暴走族を残して。

ミッション2：カービス高速道路殺人事件パート2：バトルinハイウェイ（後

アマテラス「終わるの早いな。」

エグバード「これ手抜きだろ。」

エレン「手抜きだね。」

うるせえ！風邪ひいてんだよ！

エグバード「その割には何で投稿してるんだ？この時間で。」

エレン「おかしいよ？どう考えても。」

アマテラス「どという訳だ、これは？」

いやね、ただ寝てるのは退屈なんですね。勉強しつつ小説を書いてたんだよ。

エグバード「つまりズル休みだな。」

カキカキ ↑ 原稿にエグバード抹消と書いている。

エグバード「あ、テメエ！」

ハハハ！見ろ、エグバードがゴミのようだ！！！！ハッハッハ！！！！
（黒笑い）

エグバード「ヨルムンガンド！！」 ベシ！

ワーカメ！！ ↑ 断末魔。

アマテラス&エレン「次回予告どうぞ。」

次回予告

ソル「全く。最近ロクなことがない。

昔の夢は見る。報酬は減る。賭けに負けまくる。オマケにチョコレートサンデーも食えない。こんな時は銃での撃ち抜いてストレス発散といきてえな。そこに悪魔がいたら言うこと無しなんだがな。

次回 f e n r i r 魂の乱獲者
を喰らう者達

ミッション3：護衛と汚い大人の世界

綺麗な奴は何所にいる？」

早くも6話か。

ベリアル「順調だね。」

ソル「これは期待できそうだな。話はどこまで考えてある？」

少なくともミッション30位かな？

ベリアル「多！何その数！？」

ふふふ、小説家は高い空想能力がないと出来ないと思ってるからな。

（笑）

ソル「そろそろ始めようぜ。」

ハイよ。それではどうぞ。ゼーーーーーット！……！

ベリアル&ソル「何故」「ゼーーーーーット！……！」「！……！」

????????????????

ツカツカと足音を立てながら神父の服を着たゾロアークがミカエル孤児院と書かれた孤児院の門を無理矢理蹴り開けた。

ガアン！！子供達「あー悪魔が入ってきた！みんな追い出せえ！！」
子供達「おー！」

「黙れ！！！！クソガキ共！！！！」

ゾロアークが怒鳴った。孤児院の子供達は迫力に押されて黙った。
そのままゾロアークはミカエル孤児院のドアを蹴り開けた。

バアン！「アンデルセン神父！！！！」

ゾロアークが怒鳴ったアンデルセン神父とは目の前にいる神父の服を着たジユカインだ。

「おや、どうしたのですかな？ウラヌス神父。」

このゾロアークはウラヌスというらしい。

「どうしたもこうもあるか！！またお前のとこの子供がオレの孤児院の子供に暴力を振るったようだな！！しかもナイフや爪で深く切られたとこまであったぞ！！！！」

「おやあ、別に悪魔にそれぐらいしても死にはしないでしょう。」

ウラヌスはこの言葉に頭がキレた。一冊の本から2本の銃剣を手にとった。

「てめえ、少し反省しろ！！！！！！！！（激怒）」

銃剣を構えてアンデルセンに突撃した。

同時刻 ある公園では・・・

「やめてえ！もう刺さないで！アアアアア！！」

「うるさい！この悪魔！！」

一匹のピカチュウが複数のポケモンの子供から暴行を受けていた。その子供達は首に白色のペンダントを着けている。一方、一匹のピカチュウは首に黒いペンダントを着けていた。

「痛いよ！やめて！もうやめて！！」

「黙れ！この汚れた屑が！」

「お、おい！さすがにやりすぎだろ！」

ピカチュウの中心にはもう血の池ができていた。白いペンダントを着けているワンリキーが止めさせようとするがみんな夢中になって暴行を加えているため聞いていない。

「おい、その辺にしておけ。」

声のする方向には体全体赤黒い色をしたリオルが立っていた。ソル

だ。

「なんだあ？お前？コイツの仲間かあ？」

一匹のヒコザルがピカチュウを指差した。

「そんな所だな。」

ソルが曖昧に返事をする。

「そおか。ならお前もコイツのようになれ！！」

ヒコザルがひっかくを繰り返した！そしてひっかくがソルの頭を貫いた！頭から血が勢いよくでた。

「うわあああ！やりすぎだ！！」

子供達は目の前の光景を目にして叫んだ。だが・・・

「何だあ？その魂のこもってねえ一撃は？（狂気笑い）」

「え？（汗）」

「舐めてんのか、てめえ！！！！（狂気笑い）」 ドバキ！！

殴る音と同時に骨の折れる音がした。

「ぎゃ 嗚呼 f d s f j k s f ほ f g ほ g l d s g h の g！！！？？」

ヒコザルが腕を押さえながら飛び跳ねて悲鳴を上げた。腕はありえない方向にグネグネになっていた。

「さあ、次はどいつがコイツみたいになりたい？（狂気笑い）」
「うわああああ！！逃げろおおおおおお！！！！！！！！！！」

子供達はヒコザルを連れてソルから逃げた。
ピカチュウとソルだけが取り残された。

「う、うう・・・」

「何で攻撃しなかった？やられるだけだぞ？」

ソルがピカチュウに問い詰める。

「だ、だってやだよ。僕達がアイツ等を殴るとすぐに傷つかせるから。そんなのやだよ。」

「ふん。世の中抵抗しないと余計にやられるぞ。」

ソルがピカチュウを肩に担いだ。

「お前はバカだ。綺麗ばかり言ってる。」

「で、でもそれでも・・・」 ドス！

「うー！」

「弁論は孤児院で聞く。それまで黙ってる。」

ピカチュウにボディブローをいれるとソルはあの孤児院へ行った。
ウラヌスがいるカラッド孤児院へ・・・

旅客機　アーヴィング　　　　A M 4 : 3 8　　　　ヴァンク
ル　　（地球でいうイギリス）

「おい。ソル、起きろ。着いたぞ。」
「ん？」

ベリアルが体を揺さ振ってソルを起こした。また昔の夢を見ていたようだ。

「ああ。」
「早くしなさいよ。このノロマ。（本当に大丈夫なの？この護衛人・
・・）」

ソルの隣には1人のエルフーンの少女がいた。
ベリアルとソルと少女は何故この国にいるかというと依頼人という
名の情報屋からの依頼からだ。
時間は遡ること一日前。

便利屋 f e n r i r　1階　応接室
A M 1 0 : 0 0

「やあ、ソル君。仕事持って来たよお？」
「げっ、マッドハルト・・・」

マッドハルトと呼ばれたヨノワールが入ってきた。ベリアルも嫌そ
うな顔をしている。

マッドハルトは f e n r i r にいつも無茶に近い仕事を押し付けて

いる。例えばテロを鎮圧してこいとか
国外へ行って殺人者を消してこいなどである。
ベリアルがウンザリして言った。

ベリアル「また国外へ行けとでも言うきか？」

マッドハルト「イエエス!!」

ソル「ナツシング！ふざけんじゃねえ！！！」

マッドハルト「でも君達の仕事でしょ？これ？」

ベリアル「限度があるわ！一週間に1回必ず国外に行かせやがって！！！」

ソル「大体これのせいで金減ってたぞ！！？？」

マッドハルト「大丈夫でしょう。ハッハッハ!!!」

[illegible]

f e n r i r に2人の声が響く。

f e n r i r は確かに護衛や見張りなどの仕事も引き受ける大量殺害事件なら何でも引き受ける便利屋だ。だが場所は指定されてないのいい事に情報屋のマッドハルトはハードな仕事を f e n r i r に押し付けていた。

ソルは舌打ちをしながら要件を聞くことにした。

「で、今回の仕事は？（イライラ）」

「実は先日ヴァンクルの大富豪のラジス家の当主が亡くなつてな？ 遺言によりアンブリスのヒューズ孤児院に隠し子が判明したんだ。ちなみにその隠し子は今外にいる。おい、いい加減入つて来い。」

1人のエルフーンの少女が入ってきた。

「この子が次期当主のマレア＝ラジスだ。」

「なんなのこの頼りなさそうな2人。こんなのが私の護衛人？」

この言葉にソルがぶちギレた。

「おい、お嬢ちゃん。1回頭に風穴空けられてえか？（黒笑い）」

ソルがホワイトデビルで頭を撃ち抜こうとする。

ベリアル「やめろ！！依頼人殺してどうする！！」

マッドハルト「……まあいいか。まあそれで、一週間以内に生存が確認された場合マレアに遺産を託すと書いてあったんだ。で、隠し子がそこに行くんだから護衛は必要と思つてな？ここに來たつてわけだ。実力に定評がある *f e n r i r* にな。」

ソル「何でその程度でオレのとこに來るんだ？他の奴でも十分だろ？」

「それが十分じゃないんだよ。今ヴァンクルじゃ遺産争いが凄いだ。その中に悪魔も確認されてな？普通の機関じゃ駄目だと思つたんだよ。」

ベリアル「はあ、面倒くさ。」

マッドハルト「つつ訳で引き受けてくれるな？」

ベリアル&ソル「ハイハイ……」

こうして今に至る。

ここからソルとベリアルとのミッションが始まった。

ミッション3：護衛と汚い大人の世界 綺麗な奴は何所にいる？パート2：バ

2月23日ストーリー編集。

ヴァンク

ル 首都 ビンソリア AM5:00

ソル達はタクシーに乗って移動していた。

「予定じゃ明日のPM6:00ピッタリに着くな。」

ソルが手帳を見て計算していた。

ベリアルも横から見ていてこう言った。

「問題はそれまで何が来るかだな。」

ベリアルの言う通りなにが来るか分からない。情報によると悪魔もいるらしいのだ。

半端な気持ちで行くとやられる。

「え？ちょ、何あれ！？」

「何だよ。んん？」

マレアが指指した方向にはビルがコツチに向かって倒れてきたのだ。

「うわわわわわ！！！！！」

運転手が慌てる。

「ベリアル！」

「ああ、分かってる！」

マレア「アンタ無茶苦茶よ!!」

運転手「貴方達何やらかしたんですか!!」

ソル「そこのお嬢ちゃんの護衛だ!文句あるか!!?」

ベリアル「言い争ってる場合か!!こんな早く来るなんておかしいだろ!!??」

ソル「ターミナルに着いた時につけられてたんだよ、俺達は!!」

こんなことを言ってる内に次の目的地に着いた。

ヴァンクル ミリアス駅 P

M2:00

「料金4万ポケです・・・(もう二度と来ないでほしい。)」

運転手がゲッソリして言う。

「はいよ。」

ソルが運賃代を払うとソル達は改札口に移動した。

そのころラジス家の大邸宅では・・・

「何とかならねえのか、兄貴?アンタの言葉で説得できねえか?」

一体のサイドンが兄貴と呼んだサザンドラに言った。

「どうにもならんさ。その手紙が本当なら明日のPM6:00以内に来ると書いてあるんだ。

もし、来たらもう何も出来ないよ。」

サザンドラが諦めると言わんばかりに言い返した。顔が少しニヤついていたが……

「く、くそう。何か手はあるはずだ。」

サイドンは腕を組んで考えていた。どうすれば遺産を渡さずに済むかを……子供達からみればまさに、大人の汚い世界である。

それから一日が過ぎた。
PM 4:50

ヴァンクル 列車 バツキ

「もうすぐだな。」

ソルが寝っ転がりながら呟いた。ベリアルもそれに答えた。

「そうだな。ここまで来るのすげえ大変だったけど……………」

マレアもクタクタになっていた。

「何でこういう目に遭うのよ……………」

ソル達はここまで来るのに凄く疲れていた。なんせ昨日と同じ目にあったのだ。

そこに1人の乗客が近ずいてきた。

「ここ、座ってもいいですか？」

彼らの目の前には若いサラリーマンのマニョーラがいた。ベリアルが質問する。

「何言ってるんだ？他の席ガラガラじゃないか。」

他の席は確かにガラガラだった。しかしベリアルという言葉を見殺してマレアの隣に座った。

「ど、どうぞ。」

戸惑いながらマレアが言った。

「失敬。ご迷惑をかけましたか？」

ソルが続けて警告をした。

「迷惑はしねえが命の保障はできねえぞ？」

「え？」

ソルはすでにブラックエンジェルを手にとっていた。そして天井から突然針が出てきたがソルがマニューラの脳天に刺さる前にブラックエンジェルを天井に向けてトリガーを引いた！

ダンダンダンダン！！！！

「ギョオオオオオ！！」

天井から叫び声が発せられた。マニューラは突然のことにビクッとしてその席から急いで去った。

「安心できねえなあ・・・」

ベリアルが「はあ」っとため息をついた。

それから時間が過ぎて

ヴァンクル

ラジス家大邸宅 2階 応接室 P M 6 : 0 0

コーン 6時を告げる鐘がなった。

「タイムアップか・・・」

「やったぜ、兄貴！これで遺産はオレ達のモノだ！」

サイドンが手紙を破ろうとしたがノックが響いたので破るのを中止した。

ドアが開かれたその先にはあの3人が立っていた。

ソル「あーあ5秒遅れちまったよ。ま、期限内だからいいか。」

ベリアル「あー疲れた。帰らせてえ。」

マレア「や、やっと着いた。」

3人が前にいる2人に近づいた。

「ほれ、連れて来たぞ。マレアを。」

「ち、畜生！このタイミングできやがった！」

サイドンが悪態をつく。サザンドラはというとクククと笑っていた。

サザンドラ「残念ですが、無効ですよ。彼女にもうその資格はあり

ません。ここで消しますから・・・」

「あ、兄貴!？」

サイドンが驚いて後ずさった。

「どうせそうだろうと思った(狂気笑い)」

ソルが口を裂かせながら言った。

「遺産は全て私のモノだ・・・誰にも渡さんぞおおおおおお
おお!！」

「ハアアアアアアアアアア!!!!!!!(狂気笑い)」 ドゴ
オオオオオオ!！」

ソルが隙を見せずにダインスレイブで突いた。サザンドラはその
まま壁を突っ切って吹っ飛ぶ。

「ぐはあああ!！」

サザンドラの体には突きで貫かれた後があった。

「お前達、やれ!！」

「ひゃあああああっほっつっつっつっつっつ!！」

「iiiiiiはあああああ!！」

サザンドラが歯をカチンと鳴らすと悪魔化したポケモン達が現れた。

ベリアル「やっぱりこれか、最後。」

ソル「そんなこと言ってる場合か?」

ベリアル「場合じゃねえな。んじゃ、これ食らうとけ。」

ベリアルが能力を開放した。手のハサミが一気に巨大化した。

「破壊光線改め、トリプルデスカノン!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!

ベリアルが口、両手のハサミから極太の破壊光線を放った。目の前にいた悪魔は殆ど消し飛んだ。

「はああああああああああい
い！
」

ソル「遅えええよ！」　ズバ！！
「いああああああ！！！！」　「f d s f s g っ げ r っ が g s g s g ！！！！」

カチャ
ダンダン！！！！

ソルがどんどん悪魔達を片付けていく。

「じれったいなあ。インフェルノクライム!!」

ソルがダインスレイブで切り上げを行うと黒い斬撃が悪魔全てを飲み込んだ。

悪魔はもう一体もいなかった。

「さて、死んでもらうか。サザンドラ。（狂気笑い）」

「くくおおおおお!!!」
ダンダンダン!!!

ソルはサザンドラを射殺した後ベリアルに言った。

「f e n r i rに戻るぞ。」

「おう。」

ソルとベリアルはその場を後にした。

マレアは呆然としていた。たった今起こった目の前の光景を目にして………

便利屋f e n r i r 1階 応接

室 P M 9 : 0 0

ソル「あー疲れた。ただいま。」

ベリアル「ただいまあー」

「……おかえりー」「……」

ソルとベリアルが帰ってくると4人が迎えてくれた。ん？4人？エグバードとエレンとアマテラス。
4人目はアイツだ………

エグバード「いやーお疲れさん。また行かされたらしいな。（笑）」

エレン「お疲れ様。」

マッドハルト「よく今回も成功させたな！素晴らしい！！ブラボー

!!!
L

[illegible]

(激怒) ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

L

チャンチャン♪

ミッション3：護衛と汚い大人の世界 綺麗な奴は何所にいる？パート2：バイ

ソル「最悪の終わり方だ……」

なんで思いついたんだろうか。オレ……………

ベリアル「知るかよ……………」

まあ、次回予告どうぞ。

次回予告

エグバード「オレの過去？知らないな。

自分でも分からないんだ。覚えてるのは傭兵にいただけということだ。さて、まあ今回の話だが簡単にいうとテロ鎮圧だ。あのくそつたれめ。仕方なくオレとソルで行ったらテロはすでに何者に鎮圧されていた。原因を探るべくオレ達はビルの地下へ行った。そこにいたのは……………

次回

f e n r i r 魂の乱獲者を喰

らう者達

ミッション4：荒れ狂いクレイジーパーティー

」

ミッション4：荒れ狂いクレイジーパーティーパート1：乱暴神父（前書き）

前回オリジナル技が二つ一気にでたな。

ソル「オレのオリジナル技インフェルノクライムか。」

実際ロッククライムのロックをインフェルノに変えたただけだ。

ソル「ようは手抜きか。」

さーせん・・・

ベリアル「オイラのがトリプルデスカノンか。」

意味をそのままにすると三つの死のカノン砲だ。推定威力は町一つ分消す威力と範囲だ。

ベリアル「チートじゃねえか。じゃあソルはどれだけ強いんだよ。」

まあこれからも暴れてもらうから（黒笑い）

ソル「はいよ。それじゃどうぞ。（タイトル・・・まさかアイツ？）

」

ミッション4：荒れ狂いクレイジーパーティーパート1：乱暴神父

アンブリス カラッド孤児院 3階 院長室 ????

?????

「またドンパチしたのか、ウラヌス？」

赤黒いリオルのソルがウラヌスに言った。

「うるせえ。」

ウラヌスの顔や体には切り傷が沢山あった。アンデルセンと殺し合いに近い大喧嘩をしたらしいが結果負けたらしい。

「くそ！何だつてあんな糞野郎がこの世にいるんだ！！」

「生きようとする奴がいる限りいなくならねえよ。それともそいつ等全員殺すか？」

「それは御免だ。殺人鬼とやることが変わらねえよ。」

「なら今は足掻くしかない。我慢しろ。それが平和ボケしてるお前のガキ共に護身術でもつかせろ。」

「・・・・・・明日からそうしよう。」

「それがいい。今守ってくれる奴なんていないからな。仲間の力も必要だが自分にも力がないと意味はない。」

集団で強くても一人の時、弱いとクス同然だからな。」

ソルは言い終えるとその場から去った。

M 8 : 3 3

ざわ・・・ざわ・・・

「ガトツ・ゼロスタイル!!」 ドゴオ!!
「ギャーーーーーー!!!!!!」

応接室の机で寝ていたソルがマッドハルトのシャドーパンチを腹にもろに当たって叫んだ。さっきまでのシリアスはこの男のせいでぶち壊しである。

このKY野郎め・・・・・・・・・・（黒）

「マッドハルトオオオオオオオオオオ!!!!!!」（怒）

「あーやっとききたかあ♪おはよう!ソル君!!」

マッドハルトはサンバダンスをして踊っていた。見ているとかなりムカツク。

「てめえそこにいろ!今すぐ純銀製の14ミリ改造マグナム弾をその頭にぶち込んでやる!!!!!!」（怒）

「いやあ怖いなあ。そんなの撃たれたら即死じゃないかあ。ハッハッハ!!!!」（大笑い）

「即死しろ!!!!!!」（呪怒）

ソルがブチ切れていたが f e n r i r のみんなは無視してテレビを観ていた。今回見るのは機動〇〇Zガ〇ダムである。

○ロッコ 「ゼ、Zが…どうしたんだ？（Zが死んだ者の魂を吸い取りパワーアップしている）私の知らない武器が内蔵されているのか？」

○ミーユ 「分かるまい！戦争を遊びにしている○ロッコに、この俺の身体を通して出る力が！」

○ロッコ 「身体を通して出る力」？そんなものが、モビルスーツを倒せるものか！」

4人がテレビを観ているがソルとマッドハルトは仕事の話をしていた。

「まあ今回の仕事だがな？このマガリットシティでテロが発生したんだ。で、そのテロリストが今も暴れてるからちよつと黙らせて来いって訳だ。」

「おい、報酬はちゃんとあるんだろうな？」

「もちろんさあ」

「むかつく。おい、エグバード。お前来い。」

「んん？何だ？」

「仕事だ。」

「へいへい・・・」

エグバードが面倒臭そうに言う。

そして2人はf e n r i rから出て目的地へ向かった。

そのころマガリットシティでは……………

死体が幾つも転がっていた。

「ククク、オレ達は最強だ。これほどにも力があるなんて。」

「もはや我々を止めることは誰にもできないな。」

2人の男の声がした。クククと言ったのはハスブレロ。我々といったのはサマヨールだ。

「お前達が最強？ハハハ！笑わせる！！！」

笑い声の主は神父の服を着たゾロアークだ。

「何だ、お前は？」

ハスブレロが問い詰めた。

「オレか？ただの孤児院の乱暴な神父だよ。」

そう言つて一冊の本を取り出して本のページの中から2本の銃剣を取り出した。

「我が斬るは道を外した哀れな子羊。我が刃は神に祝福を受けし刃。我は神の代行者。

神に代わり審判を下すもの。」 ギャリン！！

ゾロアークが銃剣をクロスさせて火花を散らせた。

「ま、まずい。逃げるぞ！」

サマヨールが焦る。

「何言つてるんだ。楽勝だろ、一人ぐらい。」

「・・・！！私は逃げるぞ！！！」

「あ、おい！」

サマヨールはそのまま逃げた。

「あーあ。お前も逃げればよかったのに。」

「ああ？」 ドシュ！

「・・・え？」

いつの間にか首に銃剣が刺さっていた。ゾロアークは2本銃剣を持つたままだというのに。

そして容赦なくゾロアークの2本の銃剣に首と胴体をバラバラにされた！

スパパパパンン！！

「悪魔としちやあ3流どころか4流だな。」

ゾロアークはサマヨールを追いかけて行った。

ミッション4：荒れ狂いクレイジーパーティーパート1：乱暴神父（後書き）

ソル「おい、まさかとは思うが……」

そう。次回アイツと再会だ！

ソル「……もう会わないと思ったんだがな。」

エグバード「どうした？嬉しくなさそうだな。」

ソル「いや、だって面倒だから。」

それでも会うときはあるんです！それではパート2お楽しみに！

ソル「はあああああ……」

ミッション4：荒れ狂いクレイジーパーティーパート2：剣の舞と銃弾の雨と

42

マガリットシティ 中心部 PM2：

「うわ、何だこりゃ？」

エグバードが目の前の方の光景を見て嫌な顔をした。

「これは悪魔が暴れた後だな。しかも意識が保てる例外の方だ。」

ソルが足元や周りを見ながら言った。そこで孤児院の前に若い神父のゾロアークと赤黒いリオルと孤児院の子供達の姿が写った写真を見つけた。

「・・・こんなの持つ奴はアイツ以外にいなえな。」

「どうした？」

「何でもねえ。それよりあのビルの地下に行くぞ。外に死体が沢山転がってるわりに生きてる奴の波導が固まってやがる。」

ソルはその写真をコートのポケットに閉まってそのビルの地下にエグバードと一緒に行った。

マガリットシティ モノクロスビル 地下1階 在庫保

「くそう！何だコイツは！？絶対ただの神父じゃねえ！！」

「鈍い。やっぱり所詮は下級の悪魔。魔帝より目に見えて実力に差があるな。それにオレに指一本触れることできてないし。オレに勝てない様じゃ最強はただの飾りだな。」

そのゾロアークは余裕で悪魔と化したポケモン達を弄んでいた。噴火レベルの火炎放射を吐かれても銃剣で軽くなぎ払う上にも軽々と自分の爪で切り裂く。しまいには最高レベルの技を一斉に放たれても銃剣を手放して

地面に爪を刺すと強力な衝撃波を出して全ての技を打ち消した。

「さて、そろそろ片付けてもいいよな？」

ゾロアークは一冊の本のページをばらばらに散らせるとそのページは全て銃剣になった。テロリストの悪魔達は恐怖に身を包まれていた。と、そこであの2人が乱入してきた。

ソル「ちよつと待ちな。そいつ等はオレ達の獲物だ。神父様？（はあーやっぱりな。）」

エグバード「勝手な手出しをされるとこっちが困るんだよ。」

ゾロアーク「えー。て、ソル！？」

ソル「何間抜けな顔してんだよ。ウラヌス。（コイツ全然変わってねえ・・・）」

エグバード「へ？知り合い？」

ソル「オレが孤児院にいた時世話になった神父、もとい養父（親父）だ。」

エグバード「あーなるほど。」

悪魔達は訳が分からずにいたがチャンスと思って攻撃を仕掛けようとしたが3人はすぐに気づいてそれぞれ攻撃した。

ダンダン！！ヒュンヒュン　ザクザク！ブン　ドゴオ！

3人は背中を合わせて武器を構えた。

警告　ここからはスーパ―乱闘タイムです。文章による詳しい説明がありません。ご了承ください。

悪魔テロリスト「お前等、そいつ等を殺れーーーー！！」　ゴ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！　大技を乱射。

エグバード「ヨルムンガンド！！」　ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンンン！！　地下の壁と悪魔を破壊。

ソル「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！！！！！！！！」
「ダダダ！！！！！！！！！！！！！！！！」
2
丁拳銃乱射。

ウラヌス「踊れ踊れええええええ！！！！」　ヒュバ！！　ザザザザザザグググ！！！！！！　宙を浮かんでた銃剣が悪魔達に刺さる。

悪魔テロリスト「怯むなあ！！突っ込めえ！！」
ドガアアアアア
アアアアア！！！！ 大技を一斉に連発。

エグバード「オレに勝てるかああ!？」 ドン! ズバズバズバズバズバ!!!!!! 電光石火で突進。 コヨーテで切り裂きまくる。

ソル「デストロイスティンガー！！！！！！（狂気笑い）」ドガアアアアアアン！！！！黒い炎をおびたダーインスレイブで強力な突きを行う。前方の悪魔をバラバラにして吹き飛ばすと同時に壁が突きの斬撃で貫通。

「ウラヌス、オラオラオラオラオラオラオラ！！！！！」

[illegible]

速を使って悪魔全員を銃剣で叩き斬る。

[illegible]

完全沈黙

スーパー乱闘タイム終了。

ソル「口ほどにもねえな。」

ウラヌス「くだらねえ魂じゃ力は引き出せないからな。ただのポケモンも魂が強けりゃ悪魔にも勝る。それが魔帝相手でもな。」

エグバード「なあ、それより神父様よう。一つ聞きたいことがあるんだが・・・」

ウラヌス「ウラヌスって言うてくれよ？何だ？」

エグバード「ガキのソルってどういう奴だった？」

ウラヌス「クソ可愛い奴だったよ。残忍だったけどな。」

ソル「おい。」

ウラヌス「何だソル？まだ甘えたいのか？」

ソル「そうじゃねえ！アホ神父！！それにオレがいつお前に甘えた！！て、それよりも何でここにいるんだ？（イライラ）」

雑談をしながらもソルはウラヌスにここにいる経緯を聞いた。何故ここにいるかを。

ウラヌスはこう答えた。

「オレは私設対悪魔討伐隊ジュウユーズという所の副司令官をしているんだ。で今日はこの悪魔の殲滅に来たところでお前達に会ったってことだ。」

ソルはそれを聞いた後ウラヌスに質問した。

「ちなみにいうが孤児院はどうした。」

「カラッド孤児院か？大丈夫だ。まだあるよ。あいつらにはこのこと言っていないんだけどな。」

「ふう、よかったあ。」

「ん？心配するなんて珍しいな。ソル。」

「どうだっていいだろ？そんなこと。」

エグバードが周りを見て二人に言った。

「なあそれより早くここ出たほうが良くないか？崩れてきてるぞ。」

エグバードの言う通り壁が崩れてきていた。ウラヌスが焦った。

「ちよ、先に言えよ！」 ガラガラガラ！！
「あ、やばいなこりや。」

出口の階段は崩れて出れなくなった。

ソル「やっぱりこうなったか。」

「ウラヌス、また暴れすぎたか。」

エグバード「最後はいつもこうなんだよな。」

「ウラヌス、お前達もかよ。」

ソル「そういうお前もか。ホント変わってねえなあ。」

そうやって3人は天井に向けて攻撃をした。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！

モノクロスビル
PM2:53に崩壊。

「ウラヌス「あーあれどう説明しよう。最高司令官に。」

ソル「オレはしーらね。」

「エグバード、まあ街は殆ど崩壊してるから別にいいよな。」

ソル「そうだな。じゃあなウラヌス。雑魚みたく死ぬんじゃねえぞ。

「
ウラヌス「死なねえよ。簡単には。」
ソル「て、ああそうだ！ウラヌスこれ！」
ウラヌス「あ、オレの写真！」
ソル「落ちてたぞ。」
ウラヌス「ああ悪いな。じゃあな。」

3人はそれだけ言うつと街を後にした。

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 P M 1 0 : 3 5

部屋には奴とアイツがいた。

マッドハルト「おかえりー！2人ともー！昔の親父の再会はどうだったー！？」
ウラヌス「どうもーお邪魔してまーす。」
ソル「てめえ！なにのこのこ来てんだよ！」
ウラヌス「いや、ちよつと f e n r i r がどういふところか観てこう
と思つてな？それでここにいてるつて訳だ。」
ベリアル「戦つてみたけど凄い強いよ。この人。」
アマテラス「見てたが相当の実力者だな。お前の神父。」
エレン「でもいい人だよ？ウラヌスさん。」
エグバード「いろいろぶつ飛んでるけどな。」

マッドハルト「人望厚いすなあウラヌスは。」

ソル「オレにとっちゃ迷惑だな。」

ウラヌス「そりゃねえよ。ああ、そうそう。近い内にカラッド孤児院に来てくれ。お前の知ってる幼馴染はまだそこにいるぞ。」

ソル「・・・そうだな。近い内に行こう。」

ウラヌス「まあそれはそれまでとして。エレンちゃん。君、彼氏いるだろ？」

ウラヌスがここで衝撃の話題をだす。この後この話でアマテラスが弄られたのは言うまでもない。

今日はここまで・・・・・・・・・・・・・・・・

ミッション4：荒れ狂いクレイジーパーティーパート2：剣の舞と銃弾の雨と

アマテラス「……………（顔真つ赤＋半泣き）」

まるで女の子みたいだな。今のお前。

アマテラス「叩き斬ってやる！！」

ちょ、タンマ！ ザクー！

ワーーーサビ！！↑断末魔

アマテラス「……………次回予告どうぞ。」

次回予告

エレン「今日はミッションなしの休暇。久しぶりの休暇なんだから何かしたいなあ。みんなこういう日はテレビを観たりゲームをしたりするけどたまには遠くにも出かけてみたいなあ。それで僕の意見でイガハラのお祭りに行くことにしたんだ。そこに何がなにあるかは判らないけどね。ふふ。」

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰らう

者達

ミッション5：フェンリル イン イガハラフェス

ティバル」

PS 場合によっては恋愛モノになるかもしれません。バトルがいって人は感想で言ってください。

ずづづづいですが協力お願いします。

ミッション5：フェンリル イン イガハラフェスティバルパート1：ダイナミ

今回はソルの過去じゃなくてアマテラスの過去に行ってみたいと思います。

アマテラス「オレの過去か・・・あまりいい思い出がないな。」

ある意味君が一番辛いかもね。

アマテラス「だが折れてたまるか。オレは昔とは違う。」

そうだな。まあこれ以上辛気臭い話はなしにしよう。ではどうぞ。

ミッション5：フェンリル イン イガハラフェスティバルパート1：ダイナミ

便利屋 f e n r i r 4階 構成員自室 A M 3：

30

エレンはすでに目覚めていた。

「今日は定休日か。」

そう。今日は定休日。こういう日はみんな寝ていたりゲームをしていたりする。つまりゴロゴロしている。

しかしエレンはその流れに飽きてきていた。そしてエレンはこの日ある計画を立てていた。それは国外への旅行で、そこのお祭りに行くことである。この日のためにエレンはいろいろ準備していた。

いつもは白いスカーフを首に巻いているが今日はある服装に変えた。その後エレンは朝食を作るために食堂に向かった。

便利屋 f e n r i r 2階 食堂 A M 4：30

アマテラスもすでに起きていたが今日は早めに食堂に向かっていた。しかし顔はまだ眠そうだ。

食堂の扉の前まで来て欠伸をした。

「眠い。朝食を取ったらもう一度寝よう。」

そう言って食堂の扉を開けた。食堂のテーブルにはすでに朝食が5人分あった。今日のメニューは白米と味噌汁に漬物、そして焼き魚にフルーツの盛り合わせ。健康にとっても良いメニューだ。ちなみにフルーツの方は蜜柑と林檎である。

だがアマテラスはこのメニューを見て懐かしさを感じていた。

（何だか久しぶりに見るな。この献立・・・）

アマテラスは昔の過去に少し浸かった。

イガハラ 首都 キリミコ 紫陽花孤児院（いつでも寺）
AM 6:00

「「「頂きまーす。」」」

子供達は手を合わせて揃えて言った。その中に1人だけ「頂きます」を言っていない子供がいた。何所にでもいる普通のリオルだ。このリオルが昔のアマテラスである。だが今に比べると目つきが鋭くて無気力な感じだ。

「おい、アマテラス！お前頂きますを言えよ！」

1匹のコンパンがアマテラスに言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうでもいいだろ・・・・・・・・」

「言い訳ないだろ！お前朝食いらねえのか！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、知らない。」

アマテラスはその場から去ろうとしたが後ろに誰かから掴まれた。

「ちゃんと食ってけ。このバカ。」

アマテラスを掴んだのはエンブオーだ。

「いないって言ってるだろ。夏風なつかぜ師匠。」

夏風と呼ばれたエンブオーが無理矢理アマテラスの席にアマテラスを座らせた。

「黙れ、ガキ。ちゃんと食材に感謝しろ。わし達はこれらの命を頂いてるんだ。食材に感謝しない様じゃ人殺しと一緒だ。」

アマテラスはこの言葉にイラっときたが仕方なく頂きますを言って朝食を食べ始めた。献立は白米に味噌汁と漬物、焼き魚と最後に蜜柑と林檎だ。

アマテラスはこの時さっきの夏風の言葉が心でもう一度再生された。

（食材に感謝しない様じゃ人殺しと一緒だ。）

アマテラスはこの言葉を思って焼き魚を食べた。焼き魚特有の味が口の中に広がった。だがその途端、アマテラスは突然泣き出した。

「うっ、うっう・・・」

「お、おい！どうした！？」

隣にいたコンパンが驚いて聞いた。アマテラスはこれまで一度も泣かなかったのだ。そのアマテラスが今焼き魚を食べて泣いているの

だ。それも大粒の涙を流して。
夏風がその様子を見てこう言った。

「やっと理解したか。お前は今まで味や食えるということを何も感じずにいた。つまり今理解したお前は今まで無関心でいたんだ。食えるということにな。」

この言葉を聞いてアマテラスは深くこの言葉を魂に刻んだ。この後アマテラスは泣きながらも朝食を食べていった。その涙はしばらく経っても止まらなかった。

そして現在に至る。

「……………この言葉、忘れてませんよ。夏風師匠。」

アマテラスが焼き魚を見ながら言った。

「何を忘れてないんだ？アマテラス。」

「べ、ベリアル！いつの間に！？」

「いや、オイラさっきから後ろにいたんだが。」

どうやら昔のことを思い出してボーっとしていたらしい。

「それで、さっき言ってた言葉は何だ？」

「……ベリアル。お前は食べる時何を思っている？」

「食べる時？ありがたみを思っただけだ。」

「そうか。オレがさっき言ってたのはそのことだ。」

「まあ食べる物があるから生きてられるからな。無かったらみんなにも会えなかったしね。」

話している内に厨房からエレンが出てきた。ある服装をして。

「2人とも来てるね。おはよう、ベリアル、アマテラス。」

「ああ、おはよう……！？」

「んん？」

アマテラスはエレンの服装を見て言葉を失った。ベリアルは少し疑問に思った。

今のエレンの服装は日本のお祭りに見かける華やかな色をした浴衣を着ていた。以外と似合っている。

アマテラスはそれを見た瞬間顔が真っ赤になっていた。

ベリアル「アマテラス、顔赤いぞ。」

アマテラス「な、何で浴衣なんて着てるんだ！」

エレン「ふふ、ちょっと似合ってるでしょ？これに着替えたのには訳があるんだけどね。」

アマテラス「な、何だ？その訳って？」

ベリアル「気になる。」

エレン「それはみんなが来てから。」

それからアマテラス達はエグバードとソルが来るのを待った。その間アマテラスはまだ顔が赤かった。

しばらくしてソルとエグバードが来た。ソルはエレンを観て「おゝ結構いいじゃん。」と言った。

エグバードは「デートしない？」と言ったがアマテラスに黒竜を振り回されて追い掛け回された。

それから全員テーブルについて朝食を食べながらエレンの今回の目的を聞いた。ここまでしてきたことをみれば思いつくことはただ一つだ。そしてエレンが口を開いた。

「みんなでイガハラのお祭りに行こう。」

ここから彼らのいつもとは変わったミッションに行くことになった。続きはパート2で。

ミッション5：フェンリル イン イガハラフェスティバルパート1：ダイナミ

さあ今回はドキドキのお祭りだあ！

アマテラス「恋愛モノは勘弁して欲しい。」

エグバード「いいぞ！もっとやれ！！」

アマテラス「貴様生きて帰れると思うな！！」 ブンブン！↑黒竜
を振り回す音。

エグバード「無駄無駄あああ」

ベリアル「恋愛って何だ？」

ソル「鈍感め……」

エレン「次回が楽しみ♪」

まあごちゃごちゃなつたけど今回はここで終了！（ホントどうしようかな。なにも無しにしようかな……）

アマテラス「紅葉吹雪！！！」 スパン！↑作者が切られる音。

ひ、ひらめ……！！↑断末魔

全然ドキドキじゃねえな。

ソル「結局やめたか。」

いや、書いてたらこうなった。

アマテラス「ふう・・・」

安心するのは速いぞアマテラス。

アマテラス「何？」

君今回凄く泣いて貰うから。

アマテラス「何だと!？」

ではどうぞ。

ミッション5：フェンリル イン イガハラフェスティバルパート2：楽しい？

アンブリス 国際ターミナル 飛行場 イガハラ行き 飛

行機内 AM11:07

ソル「zzzzzzzz」

エグバード「寝てるし。」

アマテラス「zzzzzzzz」

ベリアル「こつちも寝てるよ。」

エレン「寝るの遅かったからだね。」

ソル達はすでに飛行機内にいた。数時間前にエレンの意見によりイガハラへ旅行に行くことになった。ちなみに費用はこれまで達成してきた報酬からきている。最近は金が掛からずに済んでいたため財布は膨らんでいるのだ。

何も無いと思っていたソル達だがここで思わぬ邪魔が入った。

「全員手を上げろー！！」

飛行機ジャックが起きた。乗客が騒いでいるがソル達は騒がないどころか無関心だった。

エグバード「くだらねー。こういうことする奴まだいたのか。」

エレン「はああ・・・」

ベリアル「めんどくさ。」

ソル「テメエらしい度胸してんなあ！寝てる奴起こすなんてよう！！（黒怒）」

アマテラス「刑務所に入ってる！（怒）」 ドカ！バキ！ゴンドス！

飛行機ジャック「ぎゃああああああああ！！」

飛行機ジャックをした奴らは運悪くソル達のいるところに来てしまったためソルとアマテラスに数秒で鎮圧された。その後奴らは警察に送られた。顔には殴られた跡がくつきりと残っていた。

ソル「zzzzzzzzzz」

アマテラス「zzzzzzzzzz」

ベリアル「寝るの速！」

エグバード「コイツ等寝ながら殴ったんじゃない？」

エレン「それはないと思う。」

その後飛行機は飛行機ジャックがすぐに鎮圧されたため問題なく運行了したそうだ。

????????????????

「悪魔の状態はどうだった？」

「今回は段階前でした、ゼウス様。」

ウラヌスが目の前にいるゼウスと呼んだミュウツーに報告をしていた。

「そうか。しかしこのままではまずいな。もし奴らが完全な悪魔になったら大混乱どころでは済まされないぞ。急いで魔界のゲートを特定しなければ・・・」

「なら搜索範囲を広めればいいんじゃないんすか？」

一体のカメックスがゼウスに言った。

「そんな簡単に行ける訳ないだろ。プリンスト。」

ウラヌスがプリンストと呼んだカメックスに言った。

そしてウラヌスがゼウスにあることを言った。

ウラヌス「ゼウス様。オレの提案ですが便利屋を雇ってみてはどうでしょうか。」

ゼウス「便利屋だと？金で動く傭兵じみた奴らなど使えるのか？」
ウラヌス「そう思うでしょう？ですがオレは知ってます。この世で

間違いなく世界最強と言える便利屋を。」

ゼウス「……信用できるのか？」

ウラヌス「できます。その中にかの有名な魔帝もいます。」

ゼウス「魔帝だと？まさかお前がいつも言ってるあのルカリオか？」

ウラヌス「はい。ですがその部下も桁外れの戦力を持っています。

戦いには必要不可欠な存在です。言わなくても勝手に行くでしょうけど。」

ゼウス「……その便利屋の名は？」

ウラヌス「便利屋の名は……フェンリルです。」

プリンス「……こりゃ面白いことになりそうだ……悪

魔と大戦争か。心が躍る！！」

イガハラ 首都 キリミコ 紫陽花町 P

M
6
:
3
0

「うおー！すげえな！こんな賑やかな所初めて来たぞ！」

ソルは祭りの光景を見て興奮していた。エグバードやベリアル、エレンもはしゃいでいる。

エグバード「すげえ！店がすげえ在りやがる！！」

ベリアル「この水飴ってやつめちやくちや美味い！美味すぎる！！」

エレン「やっぱりきてよかった♪」

そういえばアマテラスがいない。アマテラスはというと……

イガハラ 首都 キリミコ 紫陽花町 紫陽花孤児院

P M 6 : 3 1

「・・・・・・・・久しぶりだな。ここに来るのは。」

アマテラスは紫陽花孤児院の前にいた。今のアマテラスは侍が着ているような服装に着替えている。

しかし黒竜は帯に差していた。アマテラスは中に入ろうとするが内心躊躇っていた。自分は数年間ここから離れていたのだ。突然帰ってきたらみんな驚くだろう。それにもう1つあった。

アマテラスは泣きそうになっていた。自分の育ったこの孤児院に来て泣いてる姿など見せたく無かったのだ。

アマテラスはこの数年間で強くなったと思っっているのだ。強くなったのだから泣いてはいけなと思うているのだ。

だがアマテラスはもう耐えられなかった。アマテラスは紫陽花孤児院の前で泣き崩れた。

「畜生、情けない！何で泣いてるんだオレは！ここから数年離れていただけなのに！それだけなのに何で泣いてるんだ！！」

孤児院の中から子供達が覗いていた。

「師匠。外で誰かが泣いてます。」

「ああ？誰だ？」

奥からエンブオーが来た。

「んん？アイツは・・・」

「師匠知ってるんですか？」

子供達がそのエンブオーに聞いた。

「ああ、お前達が後から来たから分からないだろうがな。アイツは二年前にここからいなくなった奴だ。」

エンブオーが話していると一匹のモルフォンが来た。

「師匠！アイツって！！」

「ああ、お前が行ってやれ。花迅。（かじん）」

「はい！」

花迅と呼ばれたモルフォンが外で泣き崩れているアマテラスのところに急いで行った。

「う、うう・・・」

「アマテラス！！」

「・・・・・・花迅？」

アマテラスが声の方向を向くと一匹のモルフォンがいた。

「アマテラス！！お前今まで何所行つてたんだよ！！！」

「花迅・・・花迅ーーーー！！！！！」

アマテラスは花迅に泣きついた。

「うわ！何でそんなに泣くんだよ！オレが悪いみたいじゃねえか！！」

「会いたかった！今までずっと会いたかった！！」

アマテラスは花迅に泣きついたまま離れなかった。よっぽど会いたかったようだ。

アマテラスはここでこう思っていた。

（オレって泣きやすい奴だったんだな。女みたいで恥ずかしいよ。今だってすごい泣いてるんだから。）

そのままアマテラスは泣き続けていた。花迅はアマテラスが完全に泣き止むまで側にいることにした。

エンブオーが外からその様子を見ていた。

「全く。ちつとは強くなったと思ったたら逆に女々しくなってるじゃねえか。まだまだお前は弱いな。」

「夏風師匠。泣いてますよ？」

「泣いてねえ。ただの水だ。」

「でも目から出てますよ。」

「うるせえ。」

夏風と呼ばれたエンブオーは子供達からいろいろ言われた後外に向かった。

それからアマテラスは夏風を見て余計に泣き出した。寂しさはいく

ら強くなっても耐えられなかったようだ。

一方ソル達は・・・・・・・・

アマテラスが泣いてる時に祭りに夢中だった。

ソル「よし！もう一発！」

エグバード「外すんじゃないぞ。」

ベリアル「いけいけえ！」

エレン「あと一発だよ！」

ソルは射的をしていた。六発中五発景品を撃ち落としている。あと一発は当たりの的に向けていた。狙いを定めて引き金を引いた！

パン！　コトン・・・

ソル「おっしゃー！当たったー！」

ベリアル「やったな、ソル！！」

エグバード「ナイスショット！」

エレン「大当たり獲得だね！」

店長「そんなばかな〜！？」

大当たりはソニー製のPSOだった。

「オレが離れてる間随分とお祭りを楽しんでるな。」

アマテラスがやっと戻って来た。涙はもう止まっていた。

ソル「何所行ってたんだ？随分長かったな。」

エグバード「何をしてたんだ？」

ベリアル「ただの用じゃなかったみたいけど。」

エレン「どうしてたの？」

アマテラス「ああ、ちよつとな・・・」

それでみんなはなんとなく察したのか追及するのをやめた。

ソル「よし、アマテラスも来たし、みんなで祭りを楽しむぞー！
！」

4人「おーーーーー！」

その後5人は祭りを楽しむことにした。その時エレンはアマテラスに寄り添ってきた。

「ちょ、エレン！（顔真っ赤）」

「ふふ、今日ぐらいいいよね？」

「え、あ、ああ。まあ。」

そして2人は祭りを最後まで一緒になって楽しんだ。

ミッション5 完

ミッション5：フェンリル イン イガハラフェスティバルパート2：楽しい？

この回は今までで微妙だったな。

アマテラス「その微妙な回でオレを泣かすな。」

まあいいじゃん。それより次回からそろそろ原爆を投入しようと思ってるんだがどう思う？

ソル「早くないか？せめてミッション12か15くらいの方が良くないか？」

あーやつぱりまだ早いかな。もう少し先送りかな？

エグバード「あんまり速いとクソ作品乙だからな。」

カキカキ↑原稿にエグバード抹消と書いている。

エグバード「テメエ！またか！！」

君のアホ面には心底うんざりさせられる。

ベリアル「うーんハサミの調子が悪いなあ。」 シャキン シャキン

エグバード「キラーン。」 ドン！

ベリアル「え！？」 ジャキン！！

ヒデブーーーーー！！↑断末魔

エレン「……………次回予告どうぞ。」

次回予告

ベリアル「え、オイラの過去？うーんそれ言われてもなあ。オイラも覚えてないんだよ。まあいいか。

またマッドハルトの依頼でオイラとエレンとアマテラスはどの経済水域にも属していない無人島に行くことになったんだ。

そこにたどり着いた人達が全員無残な死体になっていたらしいんだ。何があつたのかオイラ達はその無人島にいくことになった。何も無ければいいが………

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰らう者達

ミッション6：無人島での乱闘」

ミッション6：無人島での乱闘パート1：無人島に移動（前書き）

悪いが前書きはないんだ。

ソル「またか。でまたオレ無しかよ。」

部下も出さなきゃ駄目でしょうが。

ソル「まあ仕方ないか。（タイトルが気になる。）」

じゃ レッツGO TO HELL!!

ミッション6：無人島での乱闘パート1：無人島に移動

????????????????

その男は戦場にいた。

その男は駆け抜けていた。

ナイフを手に持ち鎖をベルトに着けてその男は戦場を駆け抜けていた。

「死ねえ！死ねえ！」

新兵が横で死んだ敵兵を何回も槍で刺してたが気にしなかった。ここは戦場。弱い者が負け、強い者が勝つ。その戦場で男は駆け抜けていた。その男は部隊長らしきガブリアスに何かを報告した。

「リガリス。ウチの部隊みんなくたばってるぞ。」

「おいおい、ヘタレだなあ。じゃあ生き残ってるのオレとテメエだけかあ？エグバード？」

「まあ、そうなるな。」

この男の正体はエグバードのようだ。顔つきは変化していない。性格は前から変わってないようだ。

リガリスと呼ばれたガブリアスは頭を抱えて言った。

「じゃあ今日でブラックリビンゲッドは解散だな。」

「そうだな。家族がみんな死んじまった。」

エグバードはさっきは楽観的に言ったが今は少し悲しそうだ。

「アイツ等とまだ酒を飲みたかったよ。」

「オレもアイツ等とまだロックを奏でたかったよ。」

「・・・・・・どうする？」

「仲間の葬儀はアイツ等の抹殺にしよう。OK？」

「ヤー。」↑了解という意味。

2人は戦場へ突撃した。仲間の葬儀のために・・・・・・

便利屋 f e n r i r 4階 構成員自室

A M 4 : 3 0

「あの時から1年も経ったか。随分と時間が過ぎたもんだ。」

エグバードはまだ朝日が出てない外の風景を見ていた。

「もう戦争はしなかったかと思ったが近い内に別の戦争が起こりそうだな。」

エグバードは装備を整えて食堂に向かった。

同時刻

ジュウユーズ

?階 指揮官室

「ち、悪魔がどんどん増えている。何所だ、何所に魔界のゲートがある!?!」

ゼウスは焦っていた。外の人達は事件が増えているというだけだと思っているが実際はf e n r i rや今ここにいるジュウユーズなどの活動により最小限に抑えている為である。だがそれもそろそろ危なくなってきた。

「クソ!こんな時波導を感じ取れる奴がいれば!...いや、いてもだめだ。あれは波導で感じ取れるではなかった。クソ!このまま終われるか!!!」

ゼウスは魔界という所のゲートの特定を急いで始めた。彼らの戦いはもう始まっていた。

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 A M 9 : 5 1

「そうだ。いつものピザ。ベーコン&ブラックペッパーだ。大至急持ってきて来い。」

ソルはピザの注文をしていた。どうも腹が空いているようである。

エグバード「あー腹減った。」

ベリアル「オイラも腹減った。」

アマテラス「腹減るの早いぞ。」

エレン「もう少し朝食の量増やす?」

こう言ってる内に奴の影・・・・・・・・・・

「やーみんなあー仕事持ってきたよー!!」

ベリアル ソル エグバード「テメエ!!このタイミングで来やがって!!」

がっかりの象徴とも言えるマッドハルトが来た。コイツのせいでピザは無しだ。

マッドハルト「今日の仕事は無人島の調査だ！」

ソル「おい、調査は受付ねえぞ。」

マッドハルト「それが大量殺害関連でも？」

ソル「・・・で内容は？」

マッドハルト「どの国の経済水域にも属してない無人島は知ってるかい？」

ソル「ああ、知ってるよ。名前も無いらしいな。」

マッドハルト「そう。そこで大量の死体が見つかったとのこと。尋常な数じゃないからここに来たってことさ。」

ソル「ち、めんどくせえ。エレン、アマテラス、ベリアル。お前達で行って来い。」

3人「了解。」

3人はすぐにその無人島に向かった。

ソル「さてと、オレはピザを食うか。」

エグバード「まだ来ないぞ。」

マッドハルト「時間掛かりますねえ。」

2人「てか何時までいるんだよ。」

ここで2人目の依頼人が来た。だがソイツは見た事のない奴だった。

名も無き無人島

P M 1 : 3 5

「着いたな。」

アマテラスがボートから降りて言った。

エレン「すでに死んでる人がいるね・・・」

ベリアル「最近多いなあ。」

アマテラス「だが今のオレ達はこうすることしか出来ない。行くぞ。」

3人は無人島の奥へ向かった。

ミッション6：無人島での乱闘パート1：無人島に移動（後書き）

ソル「短か！」

時間無かつたんだよ！！

エグバード「もう少し頑張ってくれよ。」

・・・・・・今日はこれで簡便して・・・・・・

ミッション6：無人島での乱闘パート2：デスカーニバル&召集（前書き）

ソル「おい、ミッション20くらいでこれが完結ってマジなのか？」

・・・・・・予定だと。

アマテラス「終わるの早いぞ！」

他の作品も出そうかと思つて。

ベリアル「いやいや、それもいいけどだからってこれ早く終わらせないでよ！」

エグバード「このペースでいったら1ヶ月くらいで終わるだろ！」

うるせえ！分かつてるよ！だから今第二部考えてるんだよ！！他の作品と一緒に！

エレン「大丈夫なの？ストーリーの方は。」

一応すでに脳で構築してる。話の基盤となるものをね。後はそれをどう編集するかだよ。

ソル「この先が心配だ。」

とりあえず今はこれを進めよう。ミッション6パート2スタート。

ミッション6：無人島での乱闘パート2：デスカーニバル&召集

名も無き無人島 P M 2：11

「奥まで来たが何も無いな。」

アマテラス達は無人島の奥まで来たが何もなかった。悪魔も一体もいなかった。

アマテラス「だが妙だ。何かおかしい。」

ベリアル「何が？」

アマテラス「オレ達はまるで虚像を見せられてるような感じがするんだ。」

エレン「……ねえ、それって……」

アマテラス「やってみる。」

アマテラスはルカリオ特有の波導の力を使った。ルカリオは身の周りの波導を感じ取ることができるのだ。

そしてエレンとアマテラスの考えは見事に的中した。

アマテラス「！やっぱりそうか！オレ達は催眠術に掛かってる！！」

ベリアル「な、何だって！？」

エレン「どうすればいい！？」

アマテラス「目覚めることに意識を集中するんだ！！」

3人は意識を集中させると足元が崩れるような感覚がした。次目を開けた時に見たのは大量の悪魔の群れだ。

3人はすぐに目を覚まして攻撃態勢に入った。

アマテラス「体勢が悪いな。ベリアル、頼む！」

ベリアル「了解！破壊光線！」　ドーーーーー！！！！

アマテラス「エレンはサポートをしてくれ！」

エレン「了解！」

アマテラス「オレは敵の真ん中に突っ込む！」

アマテラスは悪魔の群れの中に突撃した。

物陰でその様子を見物している者がいた。

「兄貴、アイツ等チームワークとれてる上に滅茶苦茶に強いじゃん。ホントに殺せるのか？」

物陰で様子を見ていたテツカニンが隣にいるストライクにいった。

「問題ない。」

二匹は様子を見て機会を待つことにした。

一方3人は乱闘中。

「セイ！」

アマテラスは素早い身のこなしで攻撃を避けたと同時に悪魔を数人黒竜の斬撃で斬りつけていた。

「久しぶりに僕も能力を使うか。」

エレンも能力を開放させた。

「イフリート発動。」

能力を開放させた瞬間、エレンの周りから赤い炎が出てきた。エレンが手を動かすと赤い炎も動きだした。

「ヴォルケイノランス！」

エレンの頭上に炎で形成した巨大な槍が出現した。それを悪魔にめがけて手を振った。炎の槍は悪魔のいる地点に着弾すると爆発を起こして炎を広げた！

ドガアアアアアアアン！！

当たった悪魔達は炎に焼かれて倒れた。

「トリプルデスカノン！！」

ベリアルは屋敷で見たあの三つの破壊光線を放って悪魔達を消し飛ばした。

周りにいた悪魔の群れは一分足らずに殲滅された。

アマテラスの方も片付いて戻ろうとしたがアマテラスが急に立ち止まった。

「何時までもそこにいないで出て来たらどうだ？」

スパン！ 誰もいない物陰に居合い斬りを放った。

「ち、ばれてたか。」

「くそう！ぶつ倒れりゃあいいのによう！！」

物陰から二匹のポケモンが出てきた。

エレン「やつぱりいたんだね。」

ベリアル「違和感が凄くあったしな。」

アマテラス「お前達は何者だ。」

アマテラス達は目の前にいる二匹に言った。それにテッカニンが答えた。

「オレ達かあ？オレ達はただの兄弟だけとお？」

「お前は喋るな。」

ストライクがテッカニンの発言を中止させてストライクが変わりにいった。

「f e n r i rの皆さん始めまして。私達は少し名の知れた殺人鬼、ジャック兄弟です。私がストライクのルーベン、こっちのテッカニンがヘイズです。」

アマテラス「ご丁重にどうも。それで？オレ達は何の用だ。」

その場に殺気が集まり始めた。f e n r i rは大量殺害に関係している事件を解決するのが仕事だ。殺人鬼も例外ではない。彼ら genuinely 殺人鬼だったらアマテラス達は処理しなければならない。殺人鬼も悪魔になるからだ。

ヘイズ「オレ達の目的はテメエらをぶつ殺すことだ。それだけ。」
ルーベン「黙れ、ヘイズ。もう少し話がしたい。……それで

貴方達はどれだけ事件を解決したのですか？」

アマテラス「話はそこまでだ。お前達の波導は生かしてはいけ
ないものと判った。ここで斬る。」

ルーベン「残念だ。」

そう言つて f e n r i r と殺人鬼の戦いが幕を上げた。

ヘイズ「影分身！」

アマテラス「そんなの効くか！秘剣、燕返し！」

ヘイズ「何！？」

ヘイズは燕返しをモロに受けて地に着いたがもう一度飛び上がった。

ヘイズ「くそつたれ！刀で燕返しなんて卑怯だぞ！！」

エレン「貴方が言うことじゃないでしょ！」ズガ！

ヘイズ「ぐえええ！！ほ、炎の槍だと？」

エレンの不意打ちに対処しきれずにエレンの炎の槍に貫かれて倒れた。

ルーベン「ち、役立たずが。」

ベリアル「余所見してる場合か？ハサミギロチン！！」

ルーベン「シザークロス！！」ギイン！！

ベリアル「破壊光線！！」

ルーベン「ち！」ドーーーーー！！

ルーベン「ん？アイツがいない……」

ルーベンは避けてる最中に周りを見た。エレンは少し離れた所にいてベリアルは目の前にいる。アマテラスだけがいなかった。しかも気配も感じ取れない。だが次には……

アマテラス「紫陽花流姿隠し、闇隠れ。」

ルーベン「しまっ」

アマテラス「居合い斬り初級の壱 燕一閃！」 ヒイン・・・・・・・・

ルーベンは居合い斬りが直撃すると胴体を斬られてそのまま倒れた。

アマテラス「今回の殺害事件の原因はコイツ等だな。」

エレン「何がしくてこんなことしたんだろう。」

ベリアル「何かの恨みか？」

アマテラス「どちらにしろ今のオレ達ではそれは判らない。証拠の写真を撮ったら帰還するぞ。」

エレン＆ベリアル「了解。」

アマテラス達は証拠の写真を撮ったあとf e n r i rに帰還した。

P M 6 : 0 4

便利屋 f e n r i r 1 階 応接室

部屋にはソルとエグバードとウラヌス、そして見た事の無いポケモンがいた。

アマテラス「ソル、その人は？」

ソル「ああ、コイツ？ミュウツーだよ。」

ミュウツー「だからゼウスだと言ってるだろ。」

ウラヌス「それはいいからさっさと本題に行きましょうよ。全員集まったんだし。」

エレン「本題？」

ベリアル「な、何だ？」

エグバード「あーそれなんだがな。オレ達がコイツ等に協力しろって話だ。」

アマテラス「どういうことだ？」

ゼウス「それは私から話す。」

ここからfenrirの長い戦いが始まった。そして災厄の齒車が
少しずつ動きだした。

t o b e c o n t i n u e d

ミッション6：無人島での乱闘パート2：デスカーニバル&召集（後書き）

さあ始まって来たぞう！物語の目玉！！

ソル「次回大丈夫か？」

・・・た、多分・・・

エグバード「・・・ホントに大丈夫かよ。」

まあ今はやるしかない。次回予告頼むよ。

ソル「了解。」

次回予告

ソル「ウラヌスの野郎、面倒なことを知らせて来やがった。魔界のゲートが何所かで開いてるって話だ。規模が小さいからまだいいがでかくなったら終わりだな。最高司令官からも協力を頼まれたから断る訳にはいかなかった。近い内にでかいドンパチが起こるな。

次回 f e n r i r 魂の乱獲者

を喰らう者達

ミッション7：ジュウユーズの依頼」

ミッション7：ジュワユーズの依頼：鐘は鳴る（前書き）

ミッション7：ジュワユーズの依頼：鐘は鳴る

さあ、物語の後半に来たぞう！

ソル「早いつて。」

エグバード「これ一年続くのか？」

ベリアル「何か心配。」

エレン「ストーリー続くのかな？」

アマテラス「これだと続かないな。」

「……………お前等言いただけ言いやがって。仕方ないけどこの辺で始めるぞ。」

ミッション7スタート！

今回は都合によりパートが分けられません。

ミッション7：ジュウユーズの依頼：鐘は鳴る

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 P M 6 :

05

「さて、やっと揃ったし、そろそろ目的を言っか。」

ウラヌスがその場にいる全員に言った。

ゼウス「では、私から話そう。今回ここに来たのは魔界に繋がるゲートの探索、及びゲートの破壊だ。」
ソル「魔界のゲート……」

魔界

誰が信じるだろう？誰が見たのだろう？それらが一切判らない架空の世界。

ここでは悪魔などが生まれ怪物が生まれる世界。この世の裏側と言ってもいいだろう。そしてその世界への入り口が在るということ。それはあまりにも信じられないことだ。

エグバード「おいおいマジかよ。」

ウラヌス「嘘ではないぞ。これまでお前達が解決してきた大量殺害事件が物語ってるだろう。どう考えても尋常じゃない数つてことが。」

アマテラス「実際、この世界にいないような者が数多くいたからな。」

ベリアル「これからどうすればいいんだろうか。」

エレン「それはこれから判ることでしょう？」

ゼウス「その通りだ。我々は現在どの国の地域も探しているが未だに見つかっていない。それどころか悪魔の数が増えていく一方だ。何者かが悪魔を呼んでると見て間違いないだろう。」

ソル「そこでオレ達の出番という訳か。」

ウラヌス「そう。f e n r i rには悪魔を呼ぶ奴らの排除とゲートの探索をして欲しいんだ。」

アマテラス「無理難題だな。悪魔を呼ぶ奴をどうやって探索すればいいんだ？それにゲートの探索もだ。」

アマテラスの言う通り、そのまま闇雲に探しても目的のモノは見つからない。何かしらの手がかりが必要だ。

ゼウス「お前の言う通り、そのまま闇雲に探しても見つからないだ。魔界のゲートの見つけ方はあるにはあるのだが……」

ソル「それは何だ？」

ゼウス「これだ。」

ソル「ん？何だこの石。」

ソルはゼウスの持っている石を見た。形状は花のような形をしていて全体が蒼く透き通って見える。

ゼウス「これは魔界のゲートが出している波導を感知するための石だ。近くに魔界のゲートがあればその石が反応するようになっていく。」

ソル「確証はあるのか？」

ゼウス「実験段階だからな。確証はない。」

エグバード「はあ、結局オレ達で探すしかないのか。」

ベリアル「ぐずぐずしてられないけどね。」

ウラヌス「それでも試す価値はあるだろう？」

アマテラス「やるしかないか。」

エレン「そうだね。そういえば悪魔を呼び出す奴らはどうやって見つけるの？」

次の課題、悪魔を呼び出す者達の探索。これは最初は面倒なことだ
と思っっている f e n r i r だったが・・・

ウラヌス「それなら心配ない。アマテラスとソルはルカリオだから
波導が使えるな。連中が悪魔を呼び出す時に一定の変化がある波導
をソイツの魂がキャッチして保存されるんだ。悪魔を呼び出す簡易式の
ゲートならソイツの契約が必要だから契約＝特殊波導のキャッチ。
こういうことだ。」

エグバード「ようは契約した奴からは一定の変化がある波導を持っ
ているってことか。」

ウラヌス「そういうこと。」

エレン「大変なことになってきたね。」

アマテラス「悪魔を呼び出す奴がいてそれに加えて魔界のゲートの出現
か。これは放っておいたら世界が終わるな。」

ゼウス「それを防ぐ為にここに協力を頼みに来た。大量殺害にも関
係していることだ。承諾してくれるか？」

ゼウスがソルに承諾を求めた。だがソルは・・・

ソル「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ウラヌス「・・・・・・・・ソル？」

ソルは黙ったままだ。だが次の瞬間。

エグバード「明日からか。．．．再び戦場へか．．．．．
大変になるなあ。」

ソル「ククク、明日は何かがあるか楽しみだ。」

ゼウス「よし、今日はもうこれで解散だ。明日また会おう。」

ソル「おう、明日だな。」

ゼウスとウラヌスは挨拶を交わすと外に出て行った。

ソル「さあ、明日から暴れるぞ。お前等。」

4人「了解！」

ソル「ふう。さて、飯を食うか！明日に備えて！！」

ソル達は明日に備えて夕食を食べた。

そしてその日の夜．．．．．

?????????????????
??

「ククク、悪魔の力がみなぎってくる。もつとだ。もつと！！」

その男のが不気味は声で言った。

f e n r i rのかつて無い戦いが今始動した・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ミッション7：ジュウユーズの依頼：鐘は鳴る（後書き）

ソル「短いなあ。」

また時間が無かったんだよ。

エレン「無茶しすぎじゃない？」

でもやり続けないとサボっちゃうんだよ。

アマテラス「はあ。」

まあ次回予告頼んだよ。

次回予告

アマテラス「ジュウユーズとの意見が一致してオレ達はミッションを共同で行うことになった。施設を見た後、ソルとオレ、ウラヌスは早速最初のミッションに行くことになった。このミッションでは何が待ち受けるか………」

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰ら

う者達

ミッション8：遺跡に潜む者」

ミッション8：遺跡に潜む者：ジュワユーズへようこそ（前書き）

さあ！やってきたぞ！！本番戦の突入だ！！

ソル「テンション上げるのはいいがちよつと理由を聞こうか。」

え、何の？

ソル「昨日更新しなかっただろ。」

・・・・・・・・・・レツツロック！！

ソル「スルーすんな！！」

ミッション8：遺跡に潜む者：ジュワユーズへようこそ

????????????????

その蠍は空を滑走した。

その蠍は地上を破壊し尽くした。

その蠍は疲れていた。この戦場に……………

「第一部隊は撤退！第二部隊は追ってくる敵を迎撃しろ！」

ベレー帽を頭に被ってるバンギラスが部隊に指令を送っていた。そこで先ほどの蠍がバンギラスのところに来た。

「バルハンブラ隊長！第一部隊が壊滅しかけてる！」

「何！？ベリアル！第一部隊を援護をして退路をつくれ！」

「了解！」

その蠍はベリアルと判った。バルハンブラと言ったバンギラスに指令を受けてベリアルは第一部隊の援護に向かった。

一方第一部隊は……………

「お前達！援護が来るまで堪えろ！！」

部隊長らしきハッサムが兵士達に言った。

「そうは言われてもオレ達第一部隊はもう7人しかいませんよ！助けに来るんですか！？」

「も、もう駄目だ！」

「諦めんじゃねえ！ほら援護来たぞ！！！」

そのハッサムが空を見るとベリアルが地上の敵兵に破壊光線を打ちながら第一部隊の所に着地した。

「他の退路はもう無い！強行突破で退路をつくるぞ！！！」

「了解！偵察隊の隊長さん！ほらお前等さっさと行くぞ！まだ死んだ訳じゃねえんだぞ！！！」

「へ？りよ、了解！！！」

ベリアルと第一部隊はそのまま強行突破を実行した。その後第一部隊は無事助かったがベリアルは重症を負って生存不明になった。これ以降は謎である。

便利屋 f e n r i r 1階 応接室

A M 6 : 1 5

エグバード「おい、ベリアル。起きろ。」

ベリアル「んん？」

ベリアルはソファで居眠りをしていた。昨日はよく寝れなかったようだ。

ソル「珍しいな、ベリアルが居眠りするなんてな。お前って居眠りできなかったんじゃないのか？」

ベリアル「んーそのはずなんだけどなあ。どうも眠かったみたいだ。」

エグバード「まあ眠かったなら仕方ねえな。」

ベリアルは目を擦って起き上がった。アマテラスとエレンはそれぞれ装備を確認していた。

「そろそろウラヌスが来るころだな。」

ソルが時計を見て言った。少し時間が経った後ウラヌスが入ってきた。

「よし、全員準備出来てるな。じゃあこれからジュウユーズへ行くためのゲートを開通させるからちよつと待ってる。」

ウラヌスが聖書のような本を広げるとページが舞って円をつくと円の中心に魔方陣が出てきた。

ソル「お前何時から魔法使いになったんだ？」

ウラヌス「神父をなめるなよ？最近の神父はこれぐらい出来ない子供は守れないからな。」

アマテラス「そうゆうことにそれ必要か？」

エレン「殆ど実行使だね。」

ソル「その実行使が今は必要なのさ。」

ウラヌス「さて、出来たぞ。ゲートが。」

ゲートは白い光を出している魔方阵から出来ていた。ゲートに入る前にウラヌスから銀色のブローチを渡された。

エグバード「何だこれ？このゲートの通行許可証か？」

ウラヌス「ご名答。これが無いとこのゲートには入れない。」

エレン「敵に奪われたりしてゲートに入れたらどうするの？」

ウラヌス「その心配も無い。最初に手に触れた奴だけにしか効果は発揮しない。持ち主以外が持つても何も起こらないからな。」

ソル「けどお前の手で既に持ち主決まってるじゃねえか。」

ウラヌス「オレはもう持つてるからな。反応はしねえよ。」

ベリアル「ハイテクだ……」

それだけ言い終わるとウラヌスがゲートの前に行った。そして最後の確認をした。

ウラヌス「くどいけどもう準備は出来てるな？主武装は？副武装は？全部揃ってるか？」

ソル「どうだ？お前達。」

アマテラス「準備万端だ。」

エグバード「同じく。」

エレン「こつちも」

ベリアル「オレもだ。」

全員の確認が終わるとソル達はゲートの中に入っていった。その瞬間ソル達の姿は消えた。

ロンドイス（地球でいうローマ）　ビナスト14番
通り

私設対悪魔討伐隊ジュウユーズ　1階　大広間　A
M 6：18

ソル達はゲートを通って1階の大広間にいた。辺りの造りは大聖堂の内部のような感じだがそれは造りだけであって壁などは黒や紫に赤など禍々しくて重い感じた。

ソルは凄い嬉しそうな顔をしていた。ウラヌスがソル達の前に来て歓迎の挨拶をした。

ウラヌス「さて、到着だ。ようこそジュウユーズへ……」

エグバード「なあちよつと聞いていいか？」

ウラヌス「何だ？」

エグバード「何でこんな重苦しい色してんだ？ジュウユーズって言葉の反対じゃねえかよこれ。」

ウラヌス「ああ、それはゼウス様が「真っ白など大嫌いだ！！あんな傲慢で偽善な色は油虫や百足や蜘蛛が湧く所にでも捨てる！！！」

！！（激怒）」て言ってたからな（汗）」

エレン「……………よっぽど嫌なことがあったんだね。」

それ以上追求するのをやめてソル達は内部を見回ることにした。通

路の途中で何人かのポケモンに出会ったがみんな年はソル達と同じような年だ。年長者はあまりいなかった。その後食堂へ行った。

3階 食堂

「人いるなあここ。」

ソルが食堂の全体を見て言った。f e n r i rの食堂は5人しかない為ガラガラだったがここは人材が多いのかポケモンが溢れていた。

そこにウラヌスとあまり年に差が無さそうなカメックスがこっちに来了。

「おーウラヌス。そこにいるガキンチョがf e n r i rの奴らか？」
「プリンスト、その言葉は控える。」

このカメックスはプリンストのようだ。ちなみにソルは口を裂かせながらコートに入ってるホワイトデビルに手を掛けていた。

ウラヌス「こらこらこらこら！ここで殺し合いするな！！」

プリンスト「ほう、面白いじゃねえか。オレに勝てるか？」

ソル「よおし！テメエぶつ殺す！！（黒笑い）」

アマテラス「待て待て待て待て！！」

アマテラスが羽交い絞めして抑える。プリンストはケラケラ笑っていたがウラヌスにフルパワーで殴られて回転しながら吹っ飛んだ。

ウラヌス「たく、毎回挑発しやがって。あのカメックスはプリンストっていう。これからの仕事仲間だ。」

ソル「ムカツク野郎だ。」

アマテラス「……………次行こう。」

プリンストを無視してソル達は司令官室に向かった。プリンストはというと……………

「野郎、後でしばく。」

ご飯塗れになっていた。

6階 司令官室 AM 6:20

「やっと来たか。遅いぞ。」

「どうもすいません。ちょっと邪魔が入ったんで時間が掛かりました。」

ゼウスが少しイライラしながら言うところ、ウラヌスは申し訳なさそうに言った。

ソル「さて、もう前に挨拶もしたんだしいきなり今日のミッション聞いてもいいよな？」

ゼウス「そうだな。あまり長く話すのは好きじゃない。何より面倒だ。」

そう言うところ、ゼウスが今日のミッションを伝えることにした。

ゼウス「今日のミッションは遺跡の調査だ。」

ソル「遺跡の調査？」

ゼウス「そうだ。ウラヌス、説明をしてやれ。」

ウラヌス「了解。（ホント面倒くさがりやだなあ）ここから40キ

口離れた地点に遺跡があるんだ。オレがミッションをやってる時に見つけたんだが、その周辺に悪魔がやけに多かったんだ。1人でも十分やれたが調査するには1人じゃ足りないと思ったから一端帰還したんだ。それで人を集めようと思ったんだがここには実力がまだ未熟な奴が多いからな。それで今回 fenrir に協力してもらおうと思ったんだ。悪魔に関しちや経験が多いからな。あそこは外の様子からすると内部にはかなり悪魔がいると見て間違いないな。」

ソル「なるほどな。つまり簡易式のゲートがある可能性が高いってことか。」

ゼウス「その通り。それで今回は誰が参加する？」

ソル「じゃあオレが行こう。」

アマテラス「オレも行くか。」

ソルとアマテラスが今回のミッションに参加することにした。

ウラヌス「じゃあオレが案内するでしょう。」

3人は残りの全員に「行ってくる」と言うと目的地の遺跡へ向かった。

残りの3人は何時も通りに fenrir の活動を行うことにした。ゼウスはまた魔界のゲートの特定に取り掛かった。

謎の遺跡

A M 7 : 5 0

「ギヤアギヤッギヤッギヤ!」

「ぎゅぎゅk」rgれ!」

遺跡の前にはすでに悪魔の群れができていた。

ソル「おいおいすでにいるじゃねえか!」

ウラヌス「しかも増えてやがる!」

アマテラス「言っていないでさっさと片付けるぞ!」

3人は悪魔の群れに突撃した。

ミッション8：遺跡に潜む者：ジュワユーズへようこそ（後書き）

今回はソルの恐るべき能力の開放だ！

ソル「どんなのだ？」

この台本を見てみたまえ。

ソル「ほう、いいのかこれ使って？（狂気笑い）」

こんぐらいインパクトがないとつまらないっしょ？

ソル「まあそうだな。」

では、次回を待て。

ミッション8：遺跡に潜む者：ソルの最狂の能力（前書き）

ウチの父ちゃんベンベルグ系巻いてポン♪

エグバード「何訳のわからないこと言ってるんだ。」

いやーちよつとこの言葉にはまってねえ、この言葉の詳細は浜山ペ
ンタゴンて漫画のものだ。

エグバード「あーそうかい。ところで今回過去の中で一番やばいら
しいな。」

そうなんだよねえ。今回は発狂性が滅茶苦茶あります。心臓に悪い
と思うから見るときは注意してください。

リアル系が続々と出ます。

エグバード「あれは吐き気を覚えたな。（うぷ・・・まだ吐き気が・
・・・）」

じゃあこれから読もうとしてる人十分に注意してください。ではス
タート。

ミッション8：遺跡に潜む者：ソルの最狂の能力

謎の遺跡の前にいた悪魔はソルとアマテラスとウラヌスが片付けた。現在は前回と同じ時刻である。

ソル「見るからに怪しいなあ。」

アマテラス「何が起こるか分からないから慎重に行こう。」

ウラヌス「こういうところには訳の分からない仕掛けがわんさかあるからな。」

3人は遺跡の門を開けて内部に入った。そこで最初に見たのはやはり悪魔の群れである。

ソル「ま、お約束だな。」

アマテラス「この数は尋常じゃないな。」

ウラヌス「さつさと終わらせるぞ！」

「ギユが画が画が画が画が画が画が！」

悪魔の群れがソル達に急接近した。

ソル「固まって来るなんてバカな奴らだな。波導弾！！」

ソルがルカリオの定番ともいえる波導弾を放った。悪魔の群れの中に当たると大爆発を起こした。

ドガアアアアアアアアアアン！！ 悪魔は四方八方に飛ばされた。

ソル「……………これもはや波導弾じゃあねえな。威力的に考えて。波導砲か？」

アマテラス「力の込めすぎで波導弾が暴発してるな。」
ウラヌス「一発で終わらせるとはさすが魔帝。技の威力も桁違いだな。」

波導弾一発で終わらせると3人はちょうど前にある螺旋階段を降りていった。

螺旋階段を降りていくと明らかに怪しい広間についた。壁の所々に巨大な大砲があつてオマケに壁にある装置からレーザーのようなオレンジ色の光線が通路を規則正しく縦横に動いている。これは怪しい以外にいいようがない。

ソル「なーんか見たことあるな。この造り。」

ウラヌス「あの光線に当たったら間違ひなくボウーっとなるな。」

アマテラス「ソル、破壊するなよ？」

ソルは装置を壊そうとブラックエンジェルに手を掛けていたがアマテラスに止められた。

ソル「何で？」

アマテラス「装置を壊してこの遺跡が爆破されたらどうするんだ？」

ソル「大丈夫だって。」

そう言つてソルは装置を撃った。その瞬間………

ドッカーーーーーーッ！！！！

遺跡が爆破された。 シーズン1完

ソル「!!??」

どうやら夢だったようだ（汗）
そしてソルはブラックエンジェルに手を掛けていたがさっきの夢が
気になるので撃つのをやめた。

ウラヌス「よし、避けながら行くぞ。」

ソル「お、おう。（何なんだ？さっきのは？）」
アマテラス（ソルは一体何を見たんだ？）

3人は面倒だがレーザーを避けながら遺跡の奥へ向かった。避ける
途中に大砲が飛んできたが3人が持っている武器に弾かれて大砲の
意味は無かった。難なく試練を避けた3人であった。

しばらく進むとまた広間があった。今回は普通に悪魔が湧いている
だけだった。

ソル「よし暴れるか。」

ウラヌス「行くぞ。」

アマテラス「分かってる。」

悪魔達が遠距離技を連発してきたがウラスの回りに浮いていた銃剣によってかき消された。チャンスとばかりにソルが先ほど放った波導弾で悪魔を蹴散らした後、アマテラスが居合い斬りで一体も残さずに倒した。

ソル「口ほどにもねえな。異世界の奴ならコイツ等を楽勝で倒せるな。」

ウラス「言っておくがオレは普通のポケモンだぞ。」

アマテラス「オレも普通のポケモンだ。」

ソル「魂がしっかりしてりゃあ強いからな。しっかりしてねえ奴は悪魔になっても能力は上がらねえよ。」

ソル達はまた奥へ行った。

祭壇には1つの魔方陣と一体のバシャーモがいた。そしてこちらに気づいたのかゆっくり振り返った。

「おや？これはこれはf e n r i rの事務長と部下にジュウユーズの方ではありませんか。始めまして、私はクライドと申します。」

クライドと言ったバシャーモがお辞儀をした。ソル達はゆっくりクライドのところに近づいた。

ソル「知ってるってか？」

クライド「ええ、知ってますとも。裏ではそれはもう噂が凄い飛び交ってましたからねえ。」

ウラヌス「簡易式のゲートがあるってことはお前が開通させたんだな。」

クライド「ええ、その通りですよ。ウラヌス神父。しかし今の私の目的は貴方ではないですね。後ろにいるアマテラスにも用はないですから少しいなくなつて貰いましょう。」

クライドが壁にあったスイッチを押すとウラヌスとアマテラスの足場が崩れ落ちた。

アマテラス「な！？」

ウラヌス「テ、テメエエエエエエー！」

2人はそのまま穴へ落ちていった。

クライド「心配は要りませんよ。この下は悪魔がわんさかいるだけですからね。」

ソル「ああ、そうかい。なら安心だ。」

ソルはここでクライドの目的を聞くことにした。

ソル「それで？お前の目的は？」

クライド「貴方を超えること、つまり貴方を殺すことです。」

ソル「ヒュー」言うねえ。それだけ自信があるってか？」

クライド「ええ。私にとって貴方は憧れでした。敵を一切の容赦も無く倒して駆け抜ける姿は荒々しくも美しい。私は貴方のことを尊敬してました。」

ソル「一切の容赦無く倒すねえ・・・確かにオレは敵に一切容赦しない。だがそれは悪魔だからだ。アイツ等は普通に戻りたくてももう戻れない。中には好きでなった訳じゃない奴もいる。アイツ等の魂を守ることができるのはすぐに倒すことだ。そのことに躊躇ってはいけない。ソイツの魂の尊厳を汚すからだ。」

ソルが前半笑っていたが後半は鋭い表情で強調するように言った。

クライド「ふふふ・・・優しい方ですね。ですが良いのですか？そんなに甘くて。」

ソル「クク、魂に尊厳がないならソイツはすぐにぶった切るだけだ。無論、お前もな。」

クライド「ふふふ、では私を倒すというのですか？」

ソル「倒すんじゃない。消すだ。」

ソルはそう言ってクライドの近くに一瞬で移動した。左手にはいつの間にかホワイトデビルが握られている。だがクライドにも右手に古臭い拳銃が握られていた。どちらも銃口の先は頭に向けられている。

クライド「悪魔の貴方は永遠に生きると聞きますがそれも今日で終わりですね。」

ソル「ククク、永遠なんて無いからな。」

クライド「その通り。貴方はここで死ぬのだからなああ!!」

2人は同時のタイミングでトリガーを引いた!

ダアン!! パアン! ドサドサ・・・

そして同時のタイミングで倒れた。頭は両者打ち抜かれていた。しかし・・・・・・・・・・・・・・・・

ソル「ク、ククク、クッククック・・・」

クライド「ふ、ふふふ、ふふふふ・・・」

2人は口が裂けるように笑っていた。ソルがゆっくりホワイトデビルを向けるがクライドが拳銃をもう1つ取り出して先に反撃した!

カチャ パアンパアン!! ドシュドシュ

ソル「ぐお！クツクツクツク・・・」

ガチャ ダアンダアン！ キュイン！カン！カアン！

ソルが撃った弾はクライドには当たらずに壁に当たって跳弾した。
クライドはその跳弾も目に見えない速さで避けていた。

クライド「今までのインスタントとは違う！私は貴様を超える存在となるのだ！！」

クライドにはソルに対して尊敬の心はもう無かった。今はただ倒すために殺そうとしている。

ソル「ハッハッハッハ！！オレを超えるってか？超えてみる！！！」

（笑）」

クライドは手を休めずにソルに拳銃を撃っていた。ソルの方は避けずにそのまま弾丸が直撃して血を撒き散らしていたが気にせずにはホワイトデビルを乱射していた。

一方アマテラスとウラヌスは・・・・・・・・・・

ウラヌス「ホント口ほどにもねえな。」

アマテラス「弱かったな。」

すでに悪魔を殲滅していた。辺りは悪魔の死体でいっぱいになって

いた。その数ざつと600体だ。

アマテラスは上の方を向いた。今は波導を感じ取っているようだ。アマテラスは呆れるように見ていた。

アマテラス「ソルの奴弄んでるな。」

ウラヌス「どうなってる？」

アマテラス「ソルは一步も動かないで拳銃をあのバシャーモに撃っている。動かないせいで弾丸が連続でヒットしてるな。バシャーモのクライドは弾丸を避けながら拳銃を撃っている。」

ウラヌス「あーあ可哀想に。ありや悲惨な最期を遂げるな。」

ウラヌスは哀れむように言った。ソルの方はというと……………

クライドは拳銃を何十発とソルに当てていたが一向に倒れる気配がない。クライドは少しめんどくさく思っていた。

「弾を避けようとしてもしない。不死身かアイツは？いや、そんなことはない！」

パンパンパン！ ドシュドシュ！

「ダメージは奴のほうが多いはずだ。勝てる、私は勝てる！あのソルに！！」

クライドはここで攻撃をやめた。ソルにイラつくようなことを言うてやろうと思ったのだ。だがここできたは……………

ソル「クク、楽しい。メチャクチャ楽しい。こんなに楽しいのは久々だ……お前の名は何だった……（狂気笑い）」

今のソルは目を赤く光らせて狂ったように口を裂かせて笑っていた。クライドはこれに恐怖で体を震わせた。

クライド「ク、クライドだ……」

ソル「クライド、お前をオレの敵と認識する。」

そう言つてソルは両手を前に水平に突き出した。

ソル「魔力レベル1開放。目の敵が完全沈黙まで能力を開放する。」

クライド「な、何を気だ、んな!？」

警告!!警告!!ここから先はかなり過激な表現や気持ち悪いがあります!!帰りたい人はすぐにお戻りください!!

クライドの周りには無数の巨大な目が浮かんでいて睨んでいた。ソルからは全身から黒い靄のようなものが出てきていた。

ソル「では始めよう。本当の悪魔の・・闘争というものを！！！！（狂気笑い）」

ソルの体から2体の全身が赤黒いグラエナがソルの血を撒き散らしながら出てきて猛スピードでクライドに接近した！

クライド「う、うあああ!!」

「がおおおお！！」
ガチン！

クライドは足元をつつかり見てしまった。足元には……

ゴキブリや百足に蜘蛛が何千万匹と溢れていた！！

クライド「うアアアああつふえw fじえw下wgじえwkげが！
！！！！！！！！！！う、ウワああああああadww
wwwrrrfへt h h！！！！！！！！！！
！！！（発狂状態）」

クライドは全速力で出口への階段に向かったがもう一匹の赤黒いグ
ラエナの口からソルのブラックエンジェルを握った右手が出てきて
クライドの足を目掛けてトリガーを引いた！

ダアン！！！！！ ドグジュ！！

クライド「ぐあああああああ！！！！！！」

ブラックエンジェルの弾丸がクライドの足が吹っ飛ばされた。そして追撃とばかりにもう一発片方の足に発砲して吹っ飛ばした。クライドの周りにはゴキブリや百足に蜘蛛でいっぱいだった。

クライド「おおおお前は一体・何なんだあ！！！！（パニック状態）」

ソル「さあどうした？まだ足が2本ちぎれたただけだぞ。かかってこい。使い魔達を出せ！！体を変化させる！足を再構築して立ち上がれ！！銃を拾って反撃しろ！！ さあ、お楽しみはこれからだ！！ハリーイイイ（早く）クククク、ハリー！ハリー！！ハリー！！ハリー！！ハリー！！ハリー！！！！！！！！！！（狂気黒笑い）」

ソルはもはやソルとは呼べないものに変貌していた。

クライド「ば、化け物めえ！！」

ソル「！！！！！！！！！！」

ソルは顔を驚かせた。

ソル「……………そうか……………お前……………やっぱりそうだったのか……………」

クライド「ひ！！」 カキン！

クライドが隠し持っていた拳銃をソルに向けた。

ソル「お前もやつぱり．．．．．出来損ないの魂だったのか．．．
．．．．．」

クライド「い、いい、いああああああああああ！！！！
！」　パンパンパンパン！！！！カチンカチン

ソル「お前は犬の餌だ．．．．．犬の糞になってしまえ
！！！！（狂気黒笑い）」

ソルの右腕からさっきの赤黒いグラエナが口をカチカチ鳴らせて出てきた。

クライド「いあああああ！！！！ぐあああああ！！！！ああ
あああああ！！！！！！！！」　グチャ！！バリ！！ガビュ！！　　ク
ライドは赤黒いグラエナの餌食になった。

その後クライドはこの場から消えた。

しばらく経った後．．．．．

アマテラス「すまない。少し遅れた。」

ウラヌス「おい、何があった？」

ソル「いや、何時も通りに倒しただけだが？」

ウラヌス「それにしちや死体がないが・・・」

ソル「ああ、オレが消した。」

ウラヌス「ああ、そうかい（呆れ）」

アマテラス「ゲートも破壊したし、戻るとしよう。」

3人はジュウユーズへと向かった。

今日はここで終了。

ミッション8：遺跡に潜む者：ソルの最狂の能力（後書き）

なーんか久しぶりにやばいの書いたな。

ソル「正直言つてあの能力って……………」

うん、まあ今回はヘルシングっていう作品の名言を取り寄せたんだ。

エレン「……………」 気絶している。

て、見てしまったのかエレン！！

エグバード「う、うぶ。あれはあらゆる意味でインパクトありすぎだ。」

ソル「ていうかオレも吐き気がするんだが……………何であんなのにしたんだよ！！う、うぶ。」

アマテラス「だ、だれかバケツを……………」

オ、オレも吐き気が……………次回予告どうぞ……………

ベリアル「みんなダウンしてるし。」

次回予告

ベリアル「今回の依頼は森深くにある洋館の調査だ。猟奇的な事件が多発してるから危険とされたからエレンとオレとエグバードで行

くことになった。そして同時にジュウユーズのミッションと場所が
被っていたからカメックスのプリンスとも行くことになった。こ
こには何が待ち受けるのか……

う者達

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰ら

ミッション9：洋館の謎」

ミッション9：洋館の謎パート1：ミッション被りと謎のバクフーン（前書き）

今回の過去はエレンの過去、でもって最後の過去の紹介です。

エレン「どうして僕一番最後なの？」

ごめん。エレンの過去一番考えずらかったんだ。

エレン「ちゃんとしてよ……」

ホントごめん。それと今回は謎の人物が出るぞ。ではミッション9
スタート。

ミッション9：洋館の謎パート1：ミッション被りと謎のバクフーン

????????????????

彼女は自分が分からなかった。

彼女には生まれた時から両親がいなかった。

彼女は自分の人格が分からなかった。

ある孤児院……

「みんなージャンケンするよー！」

「おーーー！」

一匹のコリンクが他の孤児院の子供とジャンケンで遊ぼうとしていた。そこに一体のラティオスが猛スピードでそのコリンクに接近してきた。

「コラー！ー！ー！宿題を投げ捨てて遊ぶとはいい度胸してるなー！ー！ー！（怒）」

「ゲー！院長！ー！みんな逃げろー！」

院長と言ったラティオスから孤児院の子供達は四方八方に散らばって逃げ出した。その様子を影から見ていたマグマシがいた。エレンだ。エレンはその様子をしばらく見た後近くにあった孤児院に入っていた。

「はあ、みんなは元気あるなあ・・・」

エレンはため息を吐きながら廊下を歩いていった。そこにお玉を持ったガルーラがエレンと会った。

「あら、エレンちゃん。まだ悩んでるの？」

「うん・・・親がいないってことがまだ頭から離れなくて・・・」

「

エレンはずっと悩んでいる。何故両親がいないのか。何故ここにいるのか。悩んでる顔をしているエレンにそのガルーラはこう言った。

「はあ・・・あのねえエレンちゃん。そうやって何時までも悩んでると死んじゃうわよ？ホントに。今はちよつとくだらない幸せに喜びなさい。外で逃げ回ってるあの子達も貴方と同じ気持ちよ？ああやって遊んでるけどあの子達も親に会いたい子がいるのよ？それを暗い気持ちを持ち続けるとあの子達も元気を無くすわ。あの子達も暗い気持ちがあるんでしょうけど今を楽しんでるわ。貴方も少しでいいから笑顔を見せてあげて？」

「・・・うん・・・ごめん・・・」

「謝らなくていいわよ。さあ、ランチを作るとしましょうか。エレンちゃん。みんなを呼んできて。」

「うん。分かった。」

エレンは外にいる子供達と院長を呼びにいった。エレンは少しだけ

笑顔になっていた。今の幸せを掴み取って………

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 A M

7:01

「おーい起きろ。エレン。」

「……え？あ、うん。」

ベリアルが寝ていたエレンを起こした。勤務時間なので基本寝てはいけないのだ。

勤務中にガンシューティングゲームをやっているトカゲはいるが・

・
・
・
・

エグバード「あークソ！ヘッドショット決まらねえ！」

ベリアル「おい、依頼人来たらやめろよ？」

エグバード「分かってるって。」

ベリアル「ホントに分かってるのか？」

エレン「ふふ。」

ベリアル「ん？何が可笑しいんだ？エレン。」

エレン「ベリアルって何かお父さんみたいだなあと思って。」

ベリアル「そうかあ？」

エレンはこのやり取りを見て少し笑った。この時間が少しでも続けばいいとも思っていたのかもしれない。

しかし今の彼女はその時間を守るために戦っている。今の彼女にはその時間はとても少なかった。

エレン「みんな何か食べる？」

エグバード「早くないか？まあいいや。オレはフライドポテト。」

ベリアル「オイラはグミなら何でもいい。」

エレン「じゃあちよつと買ってくるね。」

エグバード＆ベリアル「いつてらしゃーい！」

エレンはf e n r i rから出てコンビニへ向かった。

f e n r i rから少し離れたコンビニ店内。

「えーと確かフライドポテトとグミだったかな。」

店内の商品棚からエレンはベリアルに頼まれたグミを探していた。探しているとグレープ味のグミがあった。

それを手にとってレジに移動した。

「これとフライドポテトをください。」

店員に言ってフライドポテトを注文した。エレンが代金を払おうと瞬間後ろに誰かから体全体を押さえられた。

「テメエら手を上げて床に伏せろ！伏せなきゃこのお嬢ちゃんがど

うなっても知らねえぞ！」

後ろにはスリーパーがいた。エレンはため息をしていた。

（どうしてこういう時にこういうのなるのかなあ）

そう思ってエレンは攻撃を加えようと思ったがコンビニのドアからポケモンが入ってきたので入ってきたポケモンを見て中止した。

そのポケモンはバクフーンだった。だが背がかなり高く2メートル近くある。左目には眼帯をしている。それに加えて背中には大剣を背負っていた。

「おい、何だこれは？みんな床に伏せて。」

「テメエも床に伏せろ！このお嬢ちゃんがどうなってもいいのか！？」

スリーパーはそのバクフーンに怒鳴って言ったがバクフーンは……

「勝手にしろ。」

「な！？」

「お前はその嬢ちゃんの命を握れてねえからな。なあ、嬢ちゃん？」

「分かっているみたいだね。」　「ゴオオオ！」

「ぎゃあああああ！！あちちちち！！」

エレンの頭から炎が出てきてスリーパーは床を転がり回った。そこでバクフーンに拳骨で頭を叩かれて気絶した。

「種族の特徴もう一度見直して来い。」

バクフーンが気絶しているスリーパーに言った。その後エレンに近づいて頭をいきなり触り始めた。

「な、何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、あの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いや、何でもない。悪かったな。」

そう言ってそのバクフーンはコンビニから出た。

「ま、待って！」

エレンがそのバクフーンを追いかけたが外には何故かいなかった。

「いない・・・・・・・・あの人、何だったんだろう・・・・・・・・」

エレンは気になったが今追っても意味がないと思って店内に戻ってさっき頼んだグミとフライドポテトの代金を払って二品受け取った後コンビニから出た。

一方fenrirには・・・・・・・・

ガチャ ギイ

ベリアル「ん？依頼人か。」

エグバード「ようこそ、f e n r i r へ。」

ドアのところにはあのバクフーンがいた。

謎のバクフーン「時間がないからこれで済ませる。じゃあな。仕事頑張ってくれ。」

そう言つて紙を投げて外に向かつていった。

ボタン

エグバード「え？あ、おい！」

ベリアル「ちよつと待て！ちゃんと説明しろ！」

ガチャ！

エグバード「な、いねえ！」

ベリアル「気配も消えてる。．．．何だっただ？アイツ．．．

」

明らかに不審だが追いかけても無駄だと思つて床に落ちた紙を拾い上げて詳細を見た。

それには地図と洋館の写真に40万ポケの小切手が貼られていた。

内容

この洋館で猟奇的事件発生。遺体の数はざっと30人ほど。
依頼人 悪いが教えられないんだ

かなり簡単に書かれていた。

エグバード「ふざけてるのか？」

ベリアル「凄い簡単だな、内容……」

ここでエレンが帰ってきた。

エレン「ただいまー。」

エグバード「ああ、お帰り。」

ベリアル「ついだけど仕事が来た。」

エレン「え、もう？」

これほど早く来るとは思っていなかったようだ。

エグバード「まあ依頼人がもう帰っちゃったけどな。」

エレン「え、何で？」

ベリアル「ああ、訳の分からないバクフーンだったよ。」

エレン「訳の分からないバクフーン？」

エグバード「左目に眼帯をしていてs」

エレン「背が高くて大剣を背負ってるバクフーンだね？」

ベリアル「会ったのか？」

エレン「うん。何か怪しいから追いかけたんだけどいなかったんだ。」

エグバード「オレ達も追いかけたがいなかったな。」

ベリアル「謎だな。」

3人はフライドポテトとグミを食べながらしばらくそのような話をしたがまたしばらくした後今回の任務に行くことにした。

玄関の前にはすでにカメックスがいた。そこにエグバード達が合流した。

プリンスト「ん？誰かと思えばガキンチョ達か。」

エグバードはこの言葉にイラッときてコヨーテを手にした。

エグバード「おい、ご飯塗れになった亀。もう一度言ってみろよ？

(黒)」

ベリアル「やめろ！」

エレン「やめて！エグバード！」

しばらく喧嘩が続いたがエレンが止めて今回の目的をプリンストに言った。

プリンスト「なるほどね、それでオレと被ったって訳か。まあ何にしてもお前達は邪魔だからな、さっさと帰れ。」

エグバード「あんだとこのノロマ亀が。（黒怒）」

プリンス「やるか？ガキンチョ？」

エレン「2人ともやめて！プリンス、悪いけど僕達も仕事をしないわけにはいかないから帰るわけにはいかないんだ。迷惑は掛けないから僕達にも協力させて？」

プリンスはしばらく黙ったがエレンの話に賛成した。

プリンス「ち、しょうがねえなあ。分かったよ。」

エグバード「ムカツク。」

ベリアル「喧嘩はするなよ？」

エレン「決まりだね。じゃあ行こう。」

バラバラなパーティーが結成されて行き先が不安だが4人は洋館へ入っていった。

洋館の死角にはあのバクフーンがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アイツ等なら大丈夫か。」

そう言って森の影に消えていった。

ミッション9：洋館の謎パート1：ミッション被りと謎のバクフーン（後書き）

エグバード「アンノウな奴が出てきたな。」

彼にはこれからちよくちよく来てもらうから。

エレン「・・・一体誰なんだろう・・・」

進めば分かるよ。

ベリアル「そうだな、それはそれとしてエグバード。」

エグバード「何だ？」

ベリアル「いい加減コヨーテを握るのやめろ。」

プリンス「まだイラついてるってか？」

エグバード「ぶっ殺す！！（黒怒）」

エレン「やめてって！」

ベリアル「プリンスもやめろ！」

物陰の死角。

謎のバクフーン「任務大丈夫かよアイツ等（汗）」

大丈夫なんじゃない？多分。

ミッション9：洋館の謎パート2：アクティブ洋館（前書き）

ラーラーラ♪ララーラー♪ことーばにーできなーいー♪

謎のバクフーン「どうした作者。（汗）」

いやね、頭に鳥の糞3連発で当たってね……………

マッドハルト「まあ、お疲れですね。ハッハッハ！！」

というかお前等勝手に出てくるな。ではミッション9パート2
レッツロック！！

ミッション9：洋館の謎パート2：アクティブ洋館

前回バラバナなパーティーが結成されたまま洋館内に向かったエグバード達。内部はどうかというところ……

0：15

名も無き洋館 玄関ホール AM 1

エグバード「すでに死体が何対かあるな。」

ベリアル「何かから逃げ遅れたのか？ 玄関の手前にも死体がある。」
プリンス「まあ、可能性は高いな。……ん？ そういえばあの嬢ちゃんはどうした？」

エグバード「何？ あ、いねえ！」

ベリアル「ど、どこ……てあそこだ！」

ベリアルがハサミギロチンに向けた先に死体となったポケモン達に連れ去られようとしていた。

エレン「ベリアル、エグバード！ 助けて！ 一人じゃ抜け出せない！」

エグバード「離れる！ この変体野郎が！」

ベリアル「死体だからもういいよな。ハサミギロチン！」

死体達はハサミギロチンをモロに受けてそのまま首を吹き飛ばされた。エレンの息は荒くなっていた。死体達に連れ去られる時に首も

絞まっていたのだ。

エレン「あ、ありがとう。」

ベリアル「いいよ、別に。にしても死体が動くか……いやな予感がする。」

死体が動くことは普通はありえない。だが何か仕掛けがあるなら別だ。

エグバード「あの死体、エレンが抜け出せないってことは結構力があるみたいだな。」

プリンス「さっきの死体を調べたが、コイツ等魔力によって操られてやがる。」

ベリアル「死体に魔力があつたのか？」

プリンス「微弱ながらな。」

プリンスは見かけは馬鹿っぽいが頭の回転も速く、調査にも向いていた。

エグバード「調査がやけにうまいじゃねえか。何かやってたのか？」
プリンス「ジユウユーズに入る前に調査隊をやってただけだ。」

プリンスはそれだけ言うと玄関ホールの左側の扉に向かって行った。エグバード達もその後を追いかけていった。

左の扉は廊下だった。通路には死体がまた動いている。どの死体もゾンビのような呻き声を上げていた。

エグバード「コイツ等一体何なんだ？」

プリンス「さあな、死体を動かすのが好きな変質者がやってるんじゃないのか？死体を動かすメリットなんて気配が殆どないだけだ

からな。」

ベリアル「おい、こつちに気がついたぞ。」

死体達は4人に気づいてヨタヨタ歩きながら接近してきた。

エレン「やるしかないのかな……」

プリンス「相手は死体だ。もう魂はねえよ。」

ベリアル「通路にいられても邪魔だからな。片付けるぞ。」

エグバード「オレがやろう。」

エグバードが前に出て死体達をコヨーテで切つていった。動きは遅く、歩きながらも倒すことができた。一通り倒し終わると来てもいいという合図をした。3人はエグバードのところに来た。

その後延々と洋館内を探索したがどういふ訳なのか仕掛けが何個もあつて突破するには時間が掛かった。

エグバード「おい！ここの持ち主何をしたくてこんなの作つたんだ！どんだけカラクリ好きなんだよ！！バイ〇ハザードじゃねえんだぞ！！」

プリンス「何なんだ？この洋館？（破壊してえ。今すぐ破壊してえ。）」

ベリアル「もう仕掛け20個は解いたよ……」

3人は仕掛けのパラダイスにうんざりしていた。だがエレンがまだ調べてないところを思い出した。

エレン「ん？ねえ仕掛けがあるとしたら外に多分あるよね？あそこはまだ調べてないよ？」

ここに来るまでにエレンは周りをよく見ていた。そして途中廊下を通る時に窓から庭を見つけたのだ。3人はただ先の仕掛けに取り組んでいたため外は見えていなかった。ちなみにプリンスは頭はキレる方なのだがくどいことがあると頭の回転が鈍るようだ。

プリンス「確かに外は調べちゃいないな。中々頭がいいじゃないか。」

エレン「さっき死体に掴まれて周りをよく見たほうがいいと思ったんだ。」

プリンス「ああ、そうかい。」

ベリアル「そうと決まったらさっさと調べよう。」

4人はその後外に向かって行った。

庭園には墓場へ続く道と植物園へ続く道があった。まず庭園の周辺を調べてみた。エグバードが桶の中からクランクを見つけた。何故桶に入ってたのかは謎である。エレンとベリアルが植物園に調べに行った。するとじょうろの中からまたクランクが出てきた。ただし小さい。最後にプリンストが庭園で調べてると茂みの中からデスマスクとお約束のクランクが出てきた。こちらは何故かでかい。それから庭園に集まってそれぞれの収穫を報告した。

プリンスト「……………どんだけクランクにこだわりのあるんだよ……………」

実はここに来るまで解いてきた仕掛けの全てがクランク関連だった。しかもご丁重に名前まであった。

ちなみにエグバードのクランクにはよろしくね（キリベリアルとエレンのクランクは醤油の発注多い♪
プリンストのクランクにはまそつぷ！と書かれていた。

エグバード「もう怒る気にもならん……………何なんだよこの洋館。一刻も早く帰りてえ……………」

ベリアル「我慢しろ。墓場で最後だ。」

エレン「これが最後だよ。」

プリンストとエグバードはある意味でヒョロヒョロになっていた。ここまでのクランクの嵐に疲れていた。なんというクランクマン……………

時間を省略。

墓場

P M 2 : 1 0

4人は全てのクランクを集め終えた。その数全部で23個。

プリンス「何が楽しくてこんなの作ってたんだ？」

エグバード「どうでもいい！これを作ったのが今回の首謀者だった
らこのクランク全部体に埋め込んでやる！！」

ベリアル「必ずいるとは限らないぞ。」

エレン「じゃあクランクを全部回そう。」

地道な作業がまた始まった。やっていく内に鉄の扉のロックが外れてきた。最後にまそつぷ！のクランクを差し込んで回すと鉄の扉が開いた。

エグバード「ああ、やっとだ。」

エグバード「テムエも掃除されてえか？」

プリンス「無理だがな。さあオレもイラついてるんだしストレス発散するか！」

プリンスは背中に付いているカメックスの大砲のような部分を悪魔の群れに向けた。

「汚物は流されなあ！ハイドロカノン！！」

水タイプの中でも得に強い技を繰り出して悪魔に直撃させた。何体もの悪魔が流されたが飛んできている悪魔がいた。ベリアルがそれを破壊光線で撃ち落としていく。まだ残っていた悪魔はエレンが噴火で片付けた。

エレン「殲滅完了だね。」

エグバード「ああ。いいストレス発散になった。」

ベリアル「さあ、あの扉のところに行くぞ。」

4人はデスマスクの窪みがある扉の前に来てデスマスクをはめた。

ガコン

ロックが外れる音がした。そのまま扉を開けて部屋に入った。

祭壇の奥の部屋には魔方陣があった。その魔方陣からは紫色の霧が出ていた。

プリンス「この魔方陣があゝの死体を動かす原因だな。悪魔を呼ぶと同時に死体を動かす仕掛けが施されてやがる。」

エグバード「おい、こっちに悪魔を呼んだ奴と思われる奴の死体があるぞ。」

プリンストがその魔方阵を破壊した後その死体を見た。

プリンスト「間違いないな。コイツがあゝの魔方阵、もとい簡易式のゲートを作った奴だ。よく準備をしなかったから呼んできた悪魔に即座に殺されたな。」

ベリアル「何でこんなことを……。」

エレン「分からない。でも何かしようとしてるのは間違いないね。」

エグバード「とにかく、依頼を成功させたんだ。f e n r i rに帰るとしよう。」

プリンストはジュウユーズに帰って3人はf e n r i rに帰っていた。

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 P M 5 : 1 0

部屋にはソルとアマテラスが帰っていた。

ソル「おかえりー遅かったな。」

アマテラス「何かあったのか？」

アマテラスの問いにエレンとベリアルが苦笑した。エグバードはイライラしていた。

エグバード「ああ、クランクがな。」

アマテラス「クランク？」

エグバード「あー何でもない。それよりも気になる奴を見かけたんだが・・・」

ソル「気になる奴？」

ベリアル「左目に眼帯をしていて背が高いバクフーンだ。」

エレン「今日の依頼人だったんだ。でも何か変で。」

アマテラス「変？」

エレンはここで今日あった謎のバクフーンについて話した。

エレン「コンビニで僕の頭をいきなり触ってきてその後外に出て行ったんだ。追いかけたんだけどドアが開いた瞬間にはいなかったんだ。」

ベリアル「オイラ達のところにもいたんだ。依頼の内容が記載されている紙を投げた後扉を閉めて行っちゃったんだ。開けたら何時の間にか気配も姿も消えてたんだ。」

ソル「変な奴だな。」

ソルはテレビのスイッチを入れた。そこで思わぬ事態が起きた。

「臨時ニュースをお伝えします。今日のAM7:20頃ミザッス（地球でいうペルー）の王宮で謎のポケモンの集団が暴れた情報がきました。そのポケモンの集団に1人で立ち向かうポケモンの姿もありました。特徴は種族がバクフーンで左目に眼帯をしていて背が高く大剣を背負っていたそうです。ポケモンの集団は1分も経たない内に鎮圧された・・・」

ソルは固まってないで4人は固まっていた。今話していた奴がこの臨時ニュースにいたのだ。

ベリアル「ちょ、ちょっと待て！ここからミザッスって必ず半日以上は掛かるぞ！それをほばオイラ達といた殆ど同じタイミングで！？」

エグバード「ゲートを使ったとか？」

ソル「それはねえな。見たところアイツは単独で行動している。ゲートをつくる場所もあそこにはねえよ。それよりも気になるのはアイツの目的だ。」

5人は新たな謎に直面した。このバクフーンの目的とは……………
・
・

同時刻ミザッスのどこか……………

「ここにも溢れてきたか。まずいな……………」

謎のバクフーンはその後また消えていった。

ミッション9：洋館の謎パート2：アクティブ洋館（後書き）

パート2終了だ。

ソル「謎が深まってきたな。」

ベリアル「いろんな問題も出てる時にか。」

前も言っただけど激化するからな。まあ今回は早いけど次回予告だ。今回はまた息抜き？回だ。ソル、頼んだぜえ。

ソル「はいはい。あーめんどくせえ。」

次回予告

ソル「何とオレのブラックエンジェルとホワイトデビルが大破して
しいた。相棒——————！！（大泣）相棒を救うために
オレは最高品質の銃が作れるという銃器店へ行った。その店長に
改造依頼と出そうと店員に言っ店長に来てもらったがソイツはま
さかのアイツだった！！！」

次回

f e n r i r

魂の乱獲者を喰らう

者達

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツ」

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツパート1：レッツ突撃。そしてマ

やってきたぜえ？ミッション10があ。

ソル「オレの銃が……………」

うん、大破。

ソル「うあああああああ！！！」 暴走

ここで暴走するな！ミッション10スタート！

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツパート1：レッツ突撃。そしてマ

アンブリス公園

P M 1 2 : 3 0

「ギユがりつごご午後五語gー!!」

ソル「しつこい野郎だなあ!」ズガ!ー!ダンドンダン!ー!

ベリアル「数がどんどん増えてやがる!」ドーーーーーン!ー!

ソルとベリアルはジュウユースからのミッションでこのアンブリス公園に夜中集まる悪魔の殲滅を依頼されていた。それで今ここにいた。

「グルオオオオオオオ!ー!!」

ソル「めんどくせえ!波導弾!ー!」

波導弾で悪魔を吹き飛ばした後二丁拳銃を乱射した。その最中に悲劇は起きた。

ちょうど悪魔が残り一体になってソルがホワイトデビルとブラックエンジェルのトリガーを引いたがその瞬間……

ダダン!! バキイン!ー!!

「げうう!ー!」ドサ……

ソル「……………」え?」

残り一体の悪魔を一体を倒したと同時にブラックエンジェルとホワ

便利屋 f e n r i r 1階 応接室

A M 8 : 2 3

ソル「うちの父ちゃんベンベルグ」(泣)「

エレン「まだ泣いてる(汗)」

アマテラス「これは収まらないな・・・」

ベリアル「ただの銃器店じゃ駄目だろうなあ。」

エグバード「コイツの銃は「モンスターガン」じゃなくて『デビルガン』だからな。」

ベリアルは修理できる銃器店を探していたがこの世界には銃器店は数えるほどしかない。それに加えてソルの銃の弾は14ミリの自作のマグナム弾だ。火薬の質も威力も桁違いだ。ただの銃器店ではすぐに壊れるだろう。ついでに銃の構造をよく理解していなかったソルは重量があれば耐えられるだろうと思っていたが火薬は何を入れたらそうなるのか銃身が火薬の威力に負けてバラバラになったのだ。ソルにとってこの二丁拳銃は命にも等しかった。結果この様である。

ベリアル「あまり聞きたくないがマッドハルトに聞くか。」
エグバード「そういえばアイツって情報屋だっけな。」

しばらく登場していなかったがマッドハルトは情報屋である。情報屋ならいい銃器店を知ってるはずだと考えたのだ。ベリアルはマッドハルトの電話番号に掛けた。

ブルルルルルル……。「はい！もしもし！」

ベリアル「相変わらずハイテンションだな。もしもしマッドハルト？」

マッドハルト「おーベリアル君かー！！グッドモーニングー！」

ベリアル「はあ……マッドハルト。ちょっと用があるから来てくれないか？」

マッドハルト「はいよー！」　ブツ……

ベリアル「もう切りやがった。」

ベリアルは半ば呆れた。それで時間があると思って書類の整理をしようと思ったら……

ガチャ

マッドハルト「やあ！久しぶり！！」

ソル ベリアル アマテラス エグバード「外にいたのかよ！！！」

マッドハルト「ネタは何時でもないと駄目なのだよ！ハッハッハ！
！（大笑い）」

ガツカリの象徴改め、ネタの象徴マッドハルトが現れた。まあ早く来てくれたので手間は省けた。ベリアルはこれまでの事情をマッドハルトに話した。

そしてマッドハルトがベリアル要求である銃器店の紹介をしてくれた。

マッドハルト「いい銃器店なら知ってるよ。このアンブリスの北方面に最高品質の銃が作れるという最高の銃器店がある。銃器店の名はオールベリーマツチ。ガンマニアにはまさに全てにおいてベリーマツチと言われるほどだ！費用もベリーマツチだな！！」

ベリアル「なるほど。（金掛かるなあ・・・）ソル！お前の銃が直せる銃器店が見つかったぞ！！」

ソル「なに！？相棒を救えるのか！？」

ベリアル「おおげさな・・・まあ直せるぞ。多分。」

ソル「よし！待っているよ相棒！！そこに行ってお前達の魂を呼び戻すからな！！」

ソルは一刻も早く銃を修理したいようだ。ベリアルとソルはアンブリスの北にあるオールベリーマツチへ行く準備をした。残りの3人はここで待機することにした。マッドハルトはまた何かのネタを言う風のように去っていった。

ソルの準備が整って外に出ようとしたがそこで奴が現れた。

ガチャ

謎のバクフーン「邪魔するぞ。」

エグバード「ん？て・・・また来た！！」

エレン「・・・また・・・依頼？」

ベリアル「自分から来るなんてな。」

アマテラス「コイツがお前達が言ってた奴か・・・」

ソル「・・・用件は何だ？」

謎のバクフーン「今日はここ頼むぞ。じゃあな。」

ソル「待ちやがれ。」ス力

ソル「げ！」

エグバード「またいなくなつた！」

謎のバクフーンはまた一瞬で消えた。消えたところにはまた前回と同様の組み合わせの紙だった。違うのは目的地だけだ。

内容

このビルで遺体が発見された。その数40。以上。

依頼人　もう少ししたら教えるよ

ソル「前も同じ感じか？」

ベリアル「まあそんな感じ。前は名前は教えられないって書いてあった。けど今回のこの内容って何なんだ？もう少ししたら教えるって、何が目的なんだ？」

エグバード「よく分からない奴だな。ニュースでは一瞬で長距離に移動してたしな。何をしてるんだか。」

ソル達はしばらく困惑していたが今そんなことしても意味がないと思つてソルはアタッシュケースを持ってベリアルと外に出て行った。エグバードとエレンとアマテラスは依頼の紙を一端先送りにした。

言い忘れていたが今日は定休日である。

そのころジュウユーズでは………

ゼウスはミッシヨンの報告書を見ていた。隣りにはウラヌスがいた。

「アイツめ、あれほど目立ったことはするなと言っておいたのに約束を破りおって……」

ゼウスは苛立っていた。ミッシヨンは成功したようだがその内容には「あれは無理だ。」と書かれていた。

「ゼウス様、あれは無理があるでしょう。奴らが表に出てきたんだから。そういえばエレンに接触したみたいですよ。」

ウラヌスはゼウスの言葉に対して反対のことを言った。ウラヌスは最後の言葉に何かに繋がるようなことを言った。

「アイツもそろそろ真実を言えいいものを……いや、まだか……」

「溝つてものは深いですからね。簡単には言えませんよ。真実を……」

・
「

ゼウスとウラヌスはそのような話をしばらく続けた。

アンブリス 北地方 銃器店オールベリーマツチ P M
11:38

ソルとベリアルはオールベリーマツチの前まで来たがソルとベリアルは呆然と立っていた。

「ここ・・・ホントに銃器店？何かセレブな奴が来るようなところだな。」

「地図だどこにだけど・・・」

ソルとベリアルの目の前のオールベリーマッチを疑った。何故なら建物がいかにセレブが来るようなところである。ていうかすでにいる。

「さあ、行こう。ハニー。」

「待ってえ、ダーリン。」

目の前をルージュラとケッキングが通っていった。服装はまさにセレブであった。

「・・・よし、行くぞ。」

「待て待て待て！オレ達この服装でいいのか!？」

関係ねえ！オレの相棒を早く直すにはここしかないんだ!!」

ソルはそう言つてオールベリーマッチに突撃した。ちなみにダーインスレイブを持ったままだ。

銃器店オールベリーマッチ 1階 商品展示物室

店内に入ってみるとありとあらゆる銃がぎっしりと展示されていた。

かなり小さい護身用の拳銃があれば戦闘用のライフルなどあらゆるものが揃っていた。ソルは気にせずに奥の部屋に行こうとしたが誰かに呼び止められた。

「ちょっと待った。そこから先はカスタマイズルーム。オレの許可なしには入れないぞ。」

後ろには赤いコートを着たゴウカザルが立っていた。

ソル「だったら今から許可を貰うか……………」

ゴウカザル「おい、何を急にだま……………」

2人ともお互いを見て黙った。

ソル「……………何やってんの、お前……………」

ゴウカザル「テメエEEEEEEEEEEEEEEEE!!!!何でここにいるんだあああああああああああああああああああ
あ!!!!!!!!!!」

さあ、みんなには分かっただろうか？続きは次回で……………

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツパート1：レッツ突撃。そしてマ

ソル「訳の分らないところで終わらすな。」

いいじゃん、次回分かるから。

謎のバクフーン「いい加減すぎると呆れられるぞ。」

指摘しないでくれよ……………

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツパート2：ガンスミス、ナト（前書きなどない。

謎のバクフーン「なら書くな。」

ネタが無いんだよねえ。早いけどスタートだ！

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツパート2：ガンスミス、ナト

銃器店オールベリーマッチ 2階 カスタマイズルーム 店長

特別室 pm11:45

ゴウカザル「たく、客がよりにもよって昔急にいなくなったライバルなんてな。」

ソル「今のオレはただの客なんだから別にいいだろうが。」
ベリアル「仲悪いなあ。」

ここから見ても分かんないだろうから結構前に戻ろう。舞台はソルの過去から。

ソルの過去 どこかの公園 PM2:21

「あゝ暇。」

公園のベンチで寝ている赤黒いリオルがいた。前にも言ったがこのリオルはソルである。（現在では赤黒の色ではなくルカリオの標準カラーでいる。）

寝ているソルに白いペンダントを首に下げたポケモンの集団がソルを囲った。

「見つけたぞ、前にナトの腕を折った悪魔！」
「お前等誰？」

突然来たポケモンの集団にソルはあらかさまに分かっている顔で嘘を言った。

そこに一匹のヒコザルがやって来た。

「のこのことここに来てたか。この悪魔。」

「いて悪かったな。それとナトって奴はお前か？」

「ああ、オレがナトだよ。前はよくもオレの腕をメチャクチャにしてくれたな。」

このナトというヒコザルに何があったかはミッシヨン3の冒頭に載っている。とにかくナトはソルに何か仕返しをしたいようだ。だがナトはここであまりにも無謀なことを言った。

「オレと決闘しろ！！」

ソルは一瞬だけ頭が真っ白になった。

「・・・ぶ、アーハッハッハッハ！！（笑）お前病院行つて来い。（真顔）」

「おい、オレは真面目に言ってるんだぞ。」

「いいから病院行つて来い。お前オレに何されたと思ってるんだ？腕殴られてグニャグニャになっただろ。またやられに来た気か？それともマゾか？もしそうだったら全力で逃げるから。」

「誰がマゾだあ！いいから構えろ！！（激怒）」

ナトは怒りを抑えきれずにパンチを繰り出したがソルに簡単に受け

止められた。

「分かってねえなあ。一度じゃ駄目ならもう一度苦痛を思い出させてやるよ。」

ソルはナトの拳を思いつきり握った・・・・・・・・・・

それから数日後・・・・・・・・

「決闘しやがれ！」

「またか。こりねえ奴だなあ。」

「うるせえ！岩砕き！」

「無理だっつのはつけい。」

ナトははつけいをモロに当たって内臓の1つが損傷した。
さらに数日後・・・・

「決闘しろ！」

「またか！」

「火の粉！」

「性懲りもねえ奴だな。バレットパンチ。」

ナトはまた腕の骨を折られた。
さらにさらに数日後・・・・

「決闘だ！」

「またかよ！」

「火炎車！」

「全く・・・・シャドウクロー！」

ナトは腹の部分を切られた。
さらにさらにさらに数日後・

ここからはソルの心境です。本編を見たい場合をスルーしてくれて
構いません。

「決闘！」

「・・・おい、やる前に聞いていいか？」

「何だよ？」

「どうしてそこまでこだわる。腕を折られても腹を切られてもどうしてそうまでしてやる？」

ソルはここでナトの意見を聞くことにした。ここまでやられてまで

決闘しに来るなど異常でしかない。ソルは操られてると思っていたがこれは本人の意思だと分かった。波導を感じ取っても本人から出てる波導には操られてる時の波導はなかったのだ。ナトはここで本心を明かすことにした。

「気に食わないんだよ。」

「気に食わない？」

「ああ、気に食わないんだよ！お前等の存在が！その見下した目が！オレ達をゴミのように見るその目が！」

ソルは黙った。この言葉を受けて激しい怒りを覚えて麻痺していた。少しの間黙っていたがついにソルが声を荒げて怒号を放った。

「だからテメエらはゴミクズなんだよ！！！！！」

「な！」

「見下す？気に食わない？だからどうした！！それでどうした！！それがどうした！！何もかも種族だの民だの悪魔だのの存在で決め付けるテメエらがバカだから見下してるんだよ！！たいした力もねえのにな！！虎の意を借る狐の狐側の奴が言うことと同じだ！！テメエらは外見と存在だけで全てを判断している！！あの人はかっこよくて神のようにいい人。あの人はブサイクで最悪の人。そういう具合にな！！仮にかっこいい奴が最悪のクソ野郎だったらどうするよ！！そしてブサイクだった奴が神とも思えるほど素晴らしい奴だったらどうするよ！！テメエらどうすんのよ！！どう判断するんだよ！！！！大事なのは外見と存在じゃない！内面にある心、即ち『魂』だ！！！！それをボロボロにしてるテメエらがバカだから見下してるんだよ！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ナトはこの言葉が頭にガンガン響いていた。彼に教えられた悪魔は

こういうものだった。

『悪魔は全てが悪。全てが幸せを貪る者。全てが存在してはいけ
ない者。』

これはナトのいる孤児院の神父の言葉だ。だがナトにとって今日の
前にいる悪魔、ソルはその固定観念とは違っているように見えた。
ソルからは悪が少し感じるように見えるが全ての幸せを貪る者とは思
えなかった。全てが存在してはいけない者とは思えなかった。も
し本当に悪魔の固定観念通りならソルはこれほどにも訴えないはず
だ。ましてや固定観念通りの悪魔なら魂のことについても殆ど気に
しないだろう。だがソルは魂に対しては過剰とも言えるほどに声を
荒げて語った。ナトは今まで固定観念通りで悪魔を見ていた。自分
の両親も悪魔に殺されていたために固定観念の意識が強くなってい
た。

「けつ。お前、前にウチのピカチュウに過剰な暴力振るつたよな。
あの時のアイツの顔思い出してみろ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・・」

「分かったようだな。悪魔の中にもお前等のような奴がいるんだよ。
悪魔に殺された奴とかな。オレと同じ悪魔とはいえ、アイツは臆病
で平和主義で優しい奴なんだよ。もとの普通のポケモンと思考は同
じなんだよ。」

「・・・・・・・・お前・・・・・・・・」

「・・・・・・・・しらけた話をしちまったなあ。さあどうする？オレに
決闘を申し込むか？それとも今日は帰るか？」

ナトはしばらく黙ったまま動けなかった。ソルはその様子を見て無
言で帰っていった。

それから一日後。ソルはまた公園のベンチに寝ていた。そこにナトがまたやってきた。

「答えは決まったか？」

「・・・ああ、決まったよ。答えは・・・これだ。」

ナトは戦闘態勢に入った。

「どうしても許せないってか？」

「まあな。だからお前の言ってた言葉が本当ならオレは尚更お前等と戦う！お前の言ってたことを確かめるためにな！」

「ククク、言うねえ、力の無い奴が。だが、これから手にするかもな。」

「前と一緒にするな。それとお前の名前だけ聞いてなかったな。お前はなんだ？」

「オレか？オレはソルだ。」

「ソル・・・か。ソル、今日も決闘してもらっぞ！！」

「上等だ！このハリボテ野郎！！」

こうして2人はまた決闘をした。

これがソルと目の前のゴウカザル、ナトの関係である。

再びオールベリーマッチの1階。

2人があつて何か言ってる内にベリアルが来て2人が決闘になりそうだったのを止めた。落ち着いた後ゴウカザルになったナトにカスタマイズルームへのカウンターへ案内されてカスタマイズルームの使用許可を貰った。そして今の状態である。何故ナトが店長特別室に案内したのかは今は謎である。ちなみにベリアルは外で待機していることにした。

ナト「で、用件は？改造か？修理か？それとも製作か？ここなら頼むだけですぐに仕上がるぜ。」

ソル「オレの用件は修理だ。これを見てくれ。」

ソルがアタツシケースを開けた。そこにはあの二丁拳銃の残骸と元の写真があつた。

ナト「ひ、ひでえ！何やったらこうなるんだよ！」

ソル「弾の威力と連射のしすぎかな。」

ナト「・・・・・・・・・・・・・・・・弾の大きさは14ミリか。正気じゃねえよ。ちなみに火薬の材料はなんだ？これお前の自作の実包だろ。」

ソル「え〜とニトロ化合物100%。」

ナト「・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿だろお前・・・・・・・・薬莢に何てもん入れてやがる！！よく実包全体壊れたな！！」

ソル「ちなみに弾丸は鉛とかじゃなくて鉄鋼だ。薬莢全体も鉄鋼だ。」

ナト「ああ、そうかい。その素材でよく壊れなかったな。・・・
・・・その威力だと最高級の鉄鋼でも駄目だな。仕方ねえ。おい、
ソル。金はいらねえ。お前に最高級のおもてなしをしてやる。」

ナトはそう言つて後ろにあつた金庫から何かを取り出した。それは
黒い塊と白い塊である。

ソル「何だそれ？ていうかどういふ風の吹き回しだ。」

ナト「お前等悪魔を倒す仕事をしてるそうじゃねえか。そんな事務
長へのただのプレゼントだ。いらねえなら捨てろ。」

ソル「それはいやだ。早く直してえからな。」

ナト「じゃあ受け取れ。ああ、この二つ、黒い方はダマスス鋼と
ヒビロカネの合金。白い方はミスリル銀とアダマントの合金。ど
れも失われた金属だ。」

ソル「・・・・・・本当か？」

ナト「そう思うなら殴ってみろ。ただの金属ならデコピンでも曲げ
られるだろ。」

ソルは言われた通りに二つの合金を殴った。

ガアン！ガアン！

ソル「か、硬！！本物か！！凹んでもいねえ！！」

ナト「な？本物だろ？それらは変な遺跡にあつたものをオレが拾つ
たやつだ。遺跡のほうに含んでる物質がご丁重に書かれていたんだ。」

ソル「変な遺跡だな。で、この物質でオレの銃を修理してくれるつ
てか？ただで。」

ナト「ああ。ただし条件がある。」

ソル「何だ？」

ナト「これからもオレ達を苦しめる悪魔を倒し続けるって約束しろ。」

ソル「愚問だな。やり続けるに決まってるだろ。」

ナト「決まりだな。」

ナトはニヤリと笑うと作業を始めようとした。だがソルがここでナトを呼び止めた。

ソル「ああ、ナト！もう1つ頼みがあるんだが。」

ナト「何だあ？一体？」

ソル「この弾に耐えられる銃を作ってくれ。」

ソルから実包全体が赤く輝く弾を渡された。

ナト「何だこれ？ルビーのように綺麗だな。これ物質はなんだ？」

ソル「弾丸と薬莢はオリハルコンで出来てる。存在しないはずの最も硬い金属からな。それと火薬の燃料は反物質だ。」

ナト「…………お前そこまでして倒してえ奴いるのか？そんな弾撃つたら腕もげるし的はえらい事になるぞ。（汗）」

オリハルコンは神話で神が与えた最も硬い金属だ。何故そんなものがあるのかは現時点では謎だ。

反物質とは簡単に言うところの世には普通存在しない物質と思えばいいだろう。この威力を知りたい人は「反物質」で検索すればいいだろう。ナトは素材の詳細を聞いて冷や汗を流した。

ナト「やれるだけやってみよう。」

ソル「じゃあ頼んだぜ。」

ソルはそう言って部屋から出た。ナトはまず弾の威力を確かめるた

めに銃の反動エネルギーを計測するための部屋へ行った。

銃器店オールベリーマツチ 地下 実包威力計測室

ナトは少し突起が出来ているハンマーの機械のところに来た。前には弾を挟むための万力があつた。ナトが機械をいじり始めた。弾を挟むための万力が開き始めた。ある程度開いたところで止めてそこにソルから渡された弾を挟んだ。また機械をいじって弾の発射準備をした。

「さて、アイツのことだし弾は１０インチの鉄板じゃ貫通するだろうな。１００インチにするか。」

ナトは機械を操作して鉄板の厚さを１００インチに変えた。そして発射するためのボタンを押した。

ボチ

100インチの鉄板の少し先にオリハルコンの弾丸があった。鉄板は荒く貫かれていた。

翌日の朝 A M 10 : 10

ソル「完成したか？」

ナト「ああ、完成したよ。ほれ。」

ソルはナトから渡された2つの白と黒の拳銃を受け取った。ホワイ
トデビル、ブラックエンジェルだ。

ナト「もう壊すなよ？また壊れたら修理しねえからな。」

ソル「お前の作りが正しけりや壊れねえだろうよ。あ、そうそう。
あの弾には耐えられるか？」

ナト「試しちやいねえ。オレが撃ったら間違いなく腕反動でもげる
からな。」

ソル「確証はないってか。じゃここで試すか。」

ソルはコートのポケットからあのオリハルコンの実包をブラックエ
ンジェルのマガジンに込めた。

ナト「空に向けるよ？」

ソル「分かってるって。」

ベリアル「耳塞いどころ。」

ナト「オレもそうしょ。」

ソルは空に向けてブラックエンジェルを発砲した。

ドウオオオオオオオン！！！！！！！！！！ 重低音が響いた。周りには強烈な風圧が広がった。

「な、何だ！？うわ風圧が！！？」

「何だ今の音！？？」

周りのポケモンは騒いでいた。ソルのブラックエンジェルからは風圧が発砲時に発生した。ソルはブラックエンジェルを見た。変化はない。叩いてみた。以上はない。次にナトが分解して内部を見た。傷1つない。ソルはそれを見て口が裂けるように笑っていた。

ソル「ククク、ナト。」

ナト「何だ？」

ソル「パーフェクトだ。（狂気笑い）」

ナト「そりやどうも。（もうコイツに慣れちまったな）」

ベリアル「……………凄い音と風圧だ……………」

ナトが元に戻してソルに渡した後ソルは満足してタクシーに乗った。ベリアルもタクシーの中に乗った。ナトはその様子を見ていた。

「アイツ、あの弾で何する気なんだか。まあいいか。」

ソルとナトは最後手を振って別れの挨拶をした。

次回からはまたミッションだ。

ミッション10完

ミッション10：オレの相棒とまさかのアイツパート2：ガンスミス、ナト（後

つ、疲れた。文章のでき悪いな。

ソル「無駄に長かった気がするぞ。」

まあ今回は雑談だな。

ナト「もう来たくないな。」

また登場するかもしれないぞ。

ナト「マジかよ………」

では次回予告。

次回予告

エレン「以前謎のバクフーンに依頼されたあの紙の地図にロンデイスのあるビルの写真が載っていた。今回僕とソルにジュウユーズからもウラヌスとゲンガーのアベンジャーと行くことになった。このビルにもあの魔方阵があるのかな……」

次回

f e n r i r

魂の乱獲者を喰らう

者達

ミッション11：ビルの陰」

ミッション１１：ピルの陰パート１：ミッション合流（前書き）

前回の新キャラのゲンガーのアベンジャーですがアヴェンジャーに改名します。前回間違えた。

アヴェンジャー「ちゃんとしてくださいよ。」

ごめん、ごめん。あ、ちなみに。だから。珍しく。

エグバード「これって女性少ないよねえ。」

そついうもんだから仕方ないじゃん。それとそろそろシーズン１の終盤に入るぜえ。ではミッション１１スタート。

ミッション11：ビル陰のパート1：ミッション合流

便利屋 f e n r i r 屋上 AM 1：10

外は大雨が降っていた。ソルはこの時間に普段来ないこの場所にいた。ここである人物を待っているようだ。しばらくすると黒い霧が地面から出てきた。中心にいるのはあの謎のバクフーンだ。

「全く、オレに何の用なんだ？」

ソルが一枚の紙をヒラヒラさせながら言った。紙には今夜のAM 1：10に屋上に来てくれ。と書かれていた。

今回紙には名前も書かれていた。『ギルガメス』と・・・・・・・・・・

「お前に今の現状を伝えようと思ってな。」

「現状だと？」

謎のバクフーンは警告という形でソルに現状を伝えようとしていた。

「彼方此方で簡易式のゲートが出現し始めた。この意味分かるな？」

「急げってか？」

「そういうことだ。誰も手を下してないというのに出現しているということは魔界が開かれようとしている。魔界が出す特殊な魔力、または波導のせいだな。」

「そうかい。じゃあオレから質問していいか？」

ソルはここで質問をすることにした。何故これほどにまで知っているのかを。

「なんだ？」

「何故そこまで知っている？いくらなんでも知りすぎだ。」

「いろいろ調べたからな。それとあの依頼の紙だがあればお前達の戦力を確かめるものでもある。」

ギルガメスがここであの依頼の紙の目的も言った。悪魔と戦うための戦力の確保と確証を得るためのようだ。

「悪魔と戦う戦力の確保ってか？随分と親気取りだな。」

「お前達は若すぎるからな。アイツもだ。」

ソルにはアイツが誰なのかすぐに分かった。

「エレンのことか？」

「そんなところだ。」

「お前からはエレンの波導と似ているところがある。ほんの微弱だが。お前エレンの親戚か親父だろ。」

ソルにはエレンとギルガメスの波導がほんの少しだけ似ていることを見破っていた。

「・・・そこまで言われるとな。まあエレンに関係していることは間違いないな。オレから言えるのはそれだけだ。話が長くなっちまったな。じゃあな。エレンによろしく頼むぜ。」

「近い内に話してやれよ？ギルガメス。」

「ああ。」

ギルガメスは別れの挨拶を言うと一瞬のうちに消えていた。ソルはため息を吐きながら事務長室に向かった。

（そろそろやばいか・・・）

ソルはここでギルガメスのことについて4人全員に言った。それを知った3人は少し驚いていた。後1人エレンだけが驚きを隠せなかった。

エレン「じゃあ、あのバクフーン、ギルガメスって僕のお父さんの可能性ってこともあるの？」

ソル「可能性はありえる。さっきも言ったが波導が少しだけ似ていた。どの道お前に関係してるってことは間違いない。」

エグバード「父親だったら感動の再会か？」

ソル「そうとは限らんぞ。」

アマテラス「何か理由があるということだな？」

ソル「その理由を聞けばどれだけいいことか。まあそういうことだ。何かしらの理由は明確になったってことだ。ああ、話が脱線しちゃったな。本題に戻るぞ。」

ソルがここで本題に入ることにした。

「ギルガメスの情報によると魔界が開かれようとしてるってことだ。魔界が開き始めると簡易式ゲートが勝手に開くらしい。その魔界から出される特殊な魔力、または波導の作用でな。つまりオレ達にはそろそろ後が無いってことだ。」

ギルガメスが魔界のゲートを探しているらしいがまだ見つかったならしい。お前達、魔界が開かれた時はどうする？」

4人はここで黙った。しばらくした後アマテラスが声を上げた。

「開かれたとしてもオレは戦うぞ。奴らに負けるわけにはいかない！」

次にエレンが声を上げた。

「僕も戦うって決めた。まだ頭の整理は出来てないけどそれでも戦うよ。この世界とポケモンを守りたいから。」

最後にエグバードとベリアルが声を上げた。

「喧嘩上等！魔界からの悪魔なんかは蹴散らしてやる！」

「オイラもここで戦うって決めたからな。家はここだ。家族はここだ。アイツ等にメチャクチャにさせるつもりはない！」

ソルが4人の様子を見て頷いた。そしてギルガメスのあの依頼の紙を手にとって簡単に言った。

ソル「誰か1人来い。」

エレン「なら僕が行く。自分の力を試したいからね。」

ソル「決まりだな。残り3人はまた何時も通りにしてくれ。」

3人「了解。」

ソル「じゃあまずはジュウユーズへ行くか。目的地はあそこの国だからな。」

ソルはジュウユーズへ行くための魔方陣のゲートを手を動かして出

現させた。

エグバード「お前も魔法使いになったか？」

ソル「ウラヌスに前のミッシヨンの帰りに教えてもらったんだよ。」

アマテラス「そういえばそんなことしてたな。」

エレン「じゃあ行こう。」

ソル「だな。」

ソルとエレンはゲートに入っていくと消えた。

4番通り

ロンドイス（地球でいうローマ） ビナスト1

私設対悪魔討伐隊ジュウユーズ 1階 大広間 A
M 6 : 2 3

ソルとエレンは大広間にいた。

ソル「さてと、司令官室へ行くか。」

エレン「そうだね。」

ソルとエレンは司令官室へ向かった。

6階 司令官室 A M 6 : 2 8

ガチャ

ソル「邪魔するぞー」

エレン「失礼します。」

ウラヌス「ああ、ちょうどいいところに来た。」

ゼウス「タイミングがよかったな。お前達、この意味分かるな？」

ソルはこれを聞いて依頼やるんじゃないかった。と思った。エレンの方はため息を吐いた。

ソル「場所はどこだ？」

ゼウス「このビルだ。」

エレン「え、僕達と同じところ。」

エレンが目点を点にして言った。そういえば前回もジュウユーズと重なっていたのだ。これで二度目だ。

ウラヌス「そりゃよかった。ミッションすぐに終わるな。じゃあ今回はオレとソル、エレンにアヴェンジャーだな。」

ソル「アヴェンジャー？」

ウラヌス「ああ。ゲンガーのアヴェンジャーだ。結構前からいるベテランだ。ああそれと一応女だから。」

ソル「そこ必要か？まあいい。」

ウラヌス「それと先に現場付近にいるんだよね。」

ソル「何でいるんだよ。」

ウラヌス「何事もスピーディーに終わらせたい性格なんだよ。彼女は。」

ソル「ああ、そうかい。じゃあすぐ行こう。」

ソルとエレンのウラヌスはそのビルに向かった。

7:10

ビナスト16番通り 廃ビル 入り口付近 A M

入り口付近にはすでに一体のゲンガーがいた。

ゲンガー「遅いですよ、ウラヌス。」

ウラヌス「悪い悪い。ああ、コイツがゲンガーのアヴェンジャーだ。」

ソル「どうも、f e n r i rの事務長ソルだ。こっちのマグマラシが構成員のエレンだ。」

エレン「よろしくね。」

アヴェンジャー「よろしくお願いします。」

ソルとエレンの紹介が終わった後、4人はビルの中に入って行った。

ミッション11：ビル陰のパート1…ミッション合流（後書き）

終わるのが早いなあ。

ソル「時間無かったとか？」

それもある。

アヴェンジャー「しっかりしてください。」（ビシ）↑指を指された。

す、すみません……………

ミッション11：ビル陰のパート2：狙われるエレンと凶悪夫婦（前書き）

疲れた。

ソル「何にだ？」

テストだよ。活動報告でも書いただろ。

アヴェンジャー「更新遅れなくくださいよ？」

・・・頑張るよ・・・

ミッション11：ビル陰のパート2：狙われるエレンと凶悪夫婦

ビナスト16番通り 廃ビル 1階 ??? AM7:12

ソル達はビルの中を探索していた。1階は構造がよく理解できないものでフロアの詳細は分からなかった。ソル達4人はそれぞれ部屋の隅々まで調べたが何故か死体が1つも無かった。

ソル「おかしいな。1階にも死体は1つぐらいはあるはずだが・・・」

アヴェンジャー「異常事態に備えられるようにしましょう。こういう時に無闇に進むと手荒い歓迎を受けますからね。」

アヴェンジャーは緊急事態にも対応できるように周囲を見渡していた。

一方エレンとウラヌスは1階の手洗い場を調べていた。

エレン「壁などにも仕掛けは無い。ここには何も無いよ。」

ウラヌス「そうなると次は上の階だな。」

エレンとウラヌスは手洗い場からソルとアヴェンジャーのいるフロアに向かった。合流して報告をした後次の階に向かった。

次の2階も調べたが何も無かった。

ソル「おいおい、ここも無いのか。」

エレン「こつちも探したけど何も無かったよ。」

ウラヌス「これはちよつと異常だな。ここにも何も無いってどういうことだ?」

3人は話していたがアヴェンジャーは目を閉じて考えていた。そしてアヴェンジャーが1つの可能性を発言した。

アヴェンジャー「我々を上を誘おうとしてるのではないですか？」

ソル「どういうことだ？」

アヴェンジャー「ここまで来て無いという事は我々をさらに上の階へ行かせようとしてるのではないのですか？逃げ場の無い上の階へ。」

ここまで来るとウラヌスにもある考えがでた。

ウラヌス「そうだとするとオレ達を潰しに来た奴かもな。」

アヴェンジャーはその考えもあったようだがまだあるのか首を横に振った。

アヴェンジャー「そうかもしれませんが、違うかもしれませんが。ですがもしウラヌスさんの言葉が本当の事なら慎重に行ったほうがいいでしょう。」

ここでソルが1つの提案をした。

ソル「今更遅いが波導を感じ取ってみるか？」

アヴェンジャー「やってなかったんですか？でしたら今すぐにやってください。」

ソル「分かってるって。」

ソルは波導を感じ取ってみた。ソルは上に何かあるかすぐに分かった。

ソル「死体が無いわけが分かった。」

エレン「どうなってるの？」

ソル「死体は何かに操られて上に固まってる。」

アヴェンジャー「ということは？」

ウラヌス「いるな。操ってる奴が。」

エレン「また死体と戦うのかなあ・・・」

エレンは前回のミッションでも死体と戦っていた。そして今回も。

アヴェンジャー「戦闘は控えますか？エレン。」

エレン「いや、戦うよ。」

ソル「そうと決まったら上に行くぞ。」

ウラヌス「途中仕掛けもあるかもしれないからな。急いでいくなよ？」

ウラヌスの最後の忠告を聞いた後4人は上の階に進んで行った。

3, 4, 5階は今までのように何も無かった。6階には悪魔が待ち構えていた。

ソルが先に先制攻撃をした。

「道を開ける！」

ソルがダインスレイブで前方の悪魔を切りながら吹き飛ばす。後ろからウラヌスが銃剣でまだ残っていた悪魔に投げつけて倒していた。悪魔達も技を仕掛けてきたがソルがダインスレイブを回転させて全て防いだ。

アヴェンジャーは影に姿を隠して一体ずつシャドークローで切り倒していた。エレンはソルと同じように悪魔に接近した後火炎車で蹴散らした。

全ての悪魔を倒した後また上の階を目指した。

7階には魔方阵があった。悪魔を呼び寄せるものだったようだ。ついでにそれも破壊したがまだやることが残っていた。

ビナスト16番通り 廃ビル 9階 ???

AM7:30

4人は9階への階段を上っていた。上る途中にエレンは体が震えていた。

ソル「どうした、エレン？体が震えてるぞ。波導も何か乱れてるし。」

エレン「・・・何だかこの先に行くのが怖くて・・・」

ウラヌス「なら待機させよう。ヘタに行つて死ぬ奴がいるからな。」

エレン「い、行くよ。僕も。」

アヴェンジャー「大丈夫ですか？・・・ソル、貴方はエレンを守つてあげてください。」

ソル「言われなくとも。」

3人はエレンを心配しながらも9階の1つの部屋に入つて行つた。

廃ビル 9階 大広間 AM7:32

扉を開けると何故か部屋は大広間になっていた。広間の奥には死体に変な踊りをしていた。ソル達は何やってるんだ？と思つてる隙に扉が勝手に閉まつた。

ソル「ん？扉が閉まつた。結局罠か。」

????「その通りだよ。ミスターソル。」

どこからか謎の声がした。ソルは声の方向にブラックエンジェルを発砲した。

ダン！

???「ちよつと危ないじゃないか。当たったらどうすんのよ?」

ソル「知ったこっちゃねえな。とつとと死ね。」

ウラヌス「さつさと姿現せよ。ムカツクなあ。」

???「へーへー。分かりましたよう。」

ソル達の目の前から黒い霧が発生した。中心にはダーテングがいた。

???「ようこそ皆さん。このパーティーへ私はシドって名前です。どうぞよろしく。」

ソル「ああ、そう。じゃ、死ね。」 ガチャ!!

シド「ちよつと待ちなさいってええ。いきなり死ねはない」 ダ

ダダダダ!!!!

ソル「うるせえ。オレはお前のような喋り方嫌いなんだよ。」

シド「そうは言われて、あああああ!!!!」

シドがエレンを見て驚いた。エレンはシドを見て体の震えが止まらなかった。

シド「こ、ここに、こんなところにいた。魔界への鍵が!」

ソル「何?」

シド「さあ、いい子だからおいでえ?大人しくすれば手荒いことはないからあ。」

エレン「い、いや・・・来ないで・・・」

エレンは少し後ずさった。恐怖で声も震えていた。

ウラヌス「よく分からんがここは脱出したほうがよさそうだ。ソル！扉をぶっ壊して外に逃げるぞ！！」

ソル「あいよ！！逃げるが勝ち！！」　ダンドン！！　バゴオン！！
アヴェンジャー「エレン！早く！！」

エレン「う、うん！」

シド「逃がすかああああ！！」

4人は外に向かおうとしたがシドが猛スピードで追いかけてきた。
ソルが後ろに振り返ってダインスレイブを構えた。

ソル「け、ムカツクジジイかと思っただけのロリコンか。成仏しやがれ！！」

シド「待てええええいいい！魔界の鍵いいいいいい！！」

ソル「行かせるかよ！！ロリコンジジイ！！」

シド「邪魔するなあああ！！」　ガギイイイイン！！！！

ソルのダインスレイブとシドの葉の刃が重なって金属音を鳴らした。ソルは何時もなら口を裂かせて笑っているはずだが今日は不機嫌そうな顔をしていた。自分にとって嫌いなタイプだからだ。

シド「死体共！あのマグマラシを追いかける！！」

後ろで踊っていた死体が突如猛スピードでエレンの方へ向かって行った。

ソル「何！？死体の癖にメチャクチャ速ええ！！」

シド「どけええええええええええいいいい！！」

ソル「どかねえよ！！」

ソルにはシドを食い止めることで精一杯だった。

ビナスト16番通り 廃ビル 入り口付近 A M

7 : 3 6

ソルを除く3人は窓から飛び降りて落下している最中だった。入り口付近には2体のバクフーンがいた。右片方は眼帯をしていて大剣改め黒い大剣を背負っている。左片方は黒い大鎌を背中に背負っていた。

そこに3人が地面に着地した。

ウラヌス「あれ？2人とも何でいるの？」

ギルガメス「妻が娘に会いたいつてな。」

大鎌のバクフーン「アナタ！！今までよく黙ってたねえ！！家帰ったら斧でケツバット10000回だから覚悟しろ！！！」

ギルガメス「勘弁してくれ……」

エレン「え？む、娘？」

アヴェンジャー「それは後にしましょう！！上から死体が来てます！！！」

アヴェンジャーが言うのと死体がすでに上から降ってきていた。

エレン「噴火！」

ウラヌス「悪の波導！」

アヴェンジャー「冷凍ビーム！」

ギルガメス&大鎌のバクフーン「ブラストバーン！！！」

4人それぞれ大技を仕掛けて死体を大半を予め片付けた。残りの死体が地面に着地した瞬間にエレンに接近したが大鎌を持っているバクフーンがもの凄い速さで死体達を殴り飛ばした。最後の一体はギルガメスがアッパーカットを食らわせて吹っ飛ばした。

死体は全員が協力したおかげですぐに殲滅できた。

ウラヌス「相変わらずおっかねえ夫婦だな。まあおかげでピンチの

ソル「さてと、目的聞かせてもらうか。」

大鎌のバクフーン「今すぐ殺す！すぐ殺す！」

ウラヌス「ちょ、落ち着いて！！」

大鎌のバクフーン「落ち着けるかあ！！」 ドゴー！

ウラヌス「いで！ひ、肘打ちは勘弁して……」

ギルガメス「エレン、側にいる。目的を聞くまでも無い。すぐに殺した方がいい。」

エレン「……………」

アヴェンジャー「確かにすぐに殺した方がいいですね。野放しにするやばい。」

全員はシドを追い詰めていたかのように思えた。だが……

シド「あゝ全く。今日についてない。今日は逃げるとするか。」

ソル「逃がすか！！」 ダン！

ウラヌス「消えた！？」

ギルガメス「クソ。また逃げられたか。」

大鎌のバクフーン「ゴラアアアア！逃げるなあ！！」

アヴェンジャー「気配も完全に消えた。逃げられましたね。」

エレン「……………」

6人はその場に立ち尽くしていた。獲物に逃がしたことに。

今回のミッションはいつでも。

ミッション11：ピルの陰パート2：狙われるエレンと凶悪夫婦（後書き）

ソル「展開早いな。」

急ぎすぎた……………

ギルガメス「ミッション20まで行かないな。これは。」

……………厳しすぎたか。

大鎌のバクフーン「あのクソジジイ……………」

こゝここで怒らないでください。お願いします……………次回予告。

次回予告

ソル「事態は急展開を迎えた。エレンの両親と再会。そしてあの口リコンジジイの目的。これからさらに忙しくなるな。とりあえずはエレンと両親が離れていた理由が次回の内容だ。これは重要なことだ。この物語の起源とも言えるものだからな。」

次回

f e n r i r

魂の乱獲者を喰らう

者達

ミッション12：ブラックフリーユールの末裔」

ミッション12：ブラックフリーユールの末裔：共にいれなかった理由（前書き

最近疲れることが多い。

エグバード「最近何をしてるんだよ。」

どうも自転車で遠いことへ行くことが多いんだ。

アマテラス「意味あるのか？」

古いゲームソフトを求めて……………

ベリアル「ゲーマーか。」

ゲーマー言うな！ミッションスタート。
レッツロック！！

ミッション12：ブラックフリーゲルの末裔：共にいれなかった理由

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 A M 8 : 3 6

ソルとエレン、ギルガメスと大鎌のバクフーンはシドを取り逃がした後 f e n r i r にいた。ジュウユーズの2人はすでに知っているのか先に戻っていった。

f e n r i r の構成員達はギルガメスと大鎌のバクフーンの話しを聞くために全員1階にいた。

ギルガメス「今ここでオレ達のことを言うことになるとはな。」

エレン「ねえ、教えてよ。どうして産まれてすぐに僕を孤児院に預けたの？それに僕が魔界の鍵ってどういうこと？」

大鎌のバクフーン「それはアタシが言うよ。ああ、それと自己紹介がまだだったね。アタシはマステイマだ。」

ソル「オレはソル。」

アマテラス「オレはアマテラス。」

エグバード「エグバード。」

ベリアル「ベリアルだ。」

4人それぞれ自分の名前を言った。マステイマが頷くとエレンと共にいれなかった理由と狙われる理由を言い始めた。

マステイマ「さてと、理由を言わないとね。アンタ達ブラックフリーゲルの末裔を知っているよね？」

ベリアル「ブラックフリーゲル？それってかつて魔界の王を倒した最強のバクフーンの伝説のことか？魔界の王を倒した後魔界を繋ぐ鍵となる血と武器を子孫に残したらしいな。」

マステイマ「そう。まあ簡単に言うたとアタシとエレン、ギルガメスはそのブラックフリーユールの末裔ってことなのよ。」

アマテラス「な、」

ギルガメス「信じられないことだろうが本当のことだ。そいつの遺産である武器もここにあるしな。」

ギルガメスの言葉に対してソルが指を指して言った。

ソル「それがその背中にある大剣とマステイマが持っている鎌か。」
ギルガメス「そうだ。大剣のほうがデイスペア。鎌のほうがカラミティだ。ブラックフリーユールは一度にそれらの武器を片手で振りわしながらメチャクチャな戦いをしたらしいぞ。」

エグバードはデイスペアとカラミティを見て口をあんぐり開けていた。

エグバード「ありえねえ。片手で振り回すなんて。」

ギルガメス「ブラックフリーユールも悪魔だったからな。それも悪魔の中でも一番強い魔帝だったからな。」

ソル「オレと同じか。」

マステイマ「話がそれちまったね。さっきの話に戻るよ。」

マステイマが本題に戻ることにした。

マステイマ「さっきも言ったけどアタシとギルガメスはブラックフリーユールの子孫、いわば末裔だね。まあなんやかんやでギルガメスと結婚して子が出来た時に問題が出たのさ。」

ソル「それがあのロリコンジジイことシドか。」

マステイマ「そう、あのクソジジイが来たんだよ。」

マステイマはここで鬼のような形相をしていた。

マステイマ「奴は恐らくこの世界の王にでもなろうとしようとしてるんだろうな。魔界に行けば悪魔を強くする武器や装飾品がわんさかあるからな。それで魔界への鍵となっているブラックフリーゲルの血を求めてアタシ達を襲ってきたのさ。アタシ達は遺産である武器を持ってたからな。一発ではれたよ。まあアタシ達もそんなに甘くなかったがな。一度は撃退したんだがしばらく月日が経った後に二度も襲ってきたんだ。しかもその時はアタシにとって一番安静にしてなきゃいけない時にな。その時にも撃退したんだがアタシはもう限界だった。子を守りながら戦うなんて自殺行為に等しいからな。まあその後アタシ達の子、エレンが産まれたんだけどその時にも奴が襲撃してきたんだ。このままの状態で育てるのはあまりにも危険だったからね。だからあの孤児院に保護を頼んだのさ。アクアマリン孤児院にな。その後シドを倒すために各地を探し回ったんだよ。結局見つからなかったけどな。それとエレンを孤児院に預けた訳はエレンの行方を分からなくするためだ。それにいくらブラックフリーゲルの末裔、アタシ達の娘とはいえ、まだ子供だからな。子供が大の大人には勝てない。経験の差もあるからな。守りながら戦うにも危険だからな。別れるしか無かったのさ。これがエレンとアタシ達が一緒にいれなかった訳だよ。」

エレン「…………でも、どうして今になって会おうとしたの？」

エレンが涙を流しそうになりながらどうして今に会おうとしたのか聞くことにした。

マステイマ「…………長い間会いたって気持ちを抑えてたからね。今になって会いたくなっただよ。ギルガメスが会いに行くのはアイツを倒してからって言って反対したけどそれを無視して行っ

たのさ。それで会いに行こうと思ったたらエレンが孤児院から居なくなっただけで聞いたからアタシはエレンをずっと探してたって訳。ギルガメスはエレンを探しつつシドを探してたんだよ。まあギルガメスは見つけてからもアタシに黙ってたみたいだけど………」

マスティマがギルガメスを睨みつけた。

ギルガメス「だからまだ会いに行くのはまずいって行っただけ」

マスティマ「黙れや！この完全主義者！！」　　ゴス！

ギルガメス「痛！」

マスティマがカラミティの柄で思いっきり叩いた。エレンはしばらく黙っていた。これまでのことを振り返っているのだ。

ギルガメスがその様子を見て頭を下げた。

ギルガメス「ごめんな。ホントに今まで一緒にいれなくて。」

マスティマ「アタシからもごめん。今まで何も伝えられなくて……」

エレン「……バカ……」

エレンは頭を下に下げながら泣いていた。

エレン「バカバカバカ！この大馬鹿！！今までよくも会ってくれなかったね！ずっと耐えてきたけど凄く辛かったんだよ！？凄く寂しかったんだよ！？そういう理由でも会いに来てよ！！そういう理由でも僕を抱きしめに来てよ！！大馬鹿！！！！」

エレンが涙を流しながらも叫んだ。アマテラスは目をそらしていた。かつてこういう光景が前にもあったからだ。ベリアルやエグバードも目をそらしている。その中、ソルだけは目をそらしていなかった。

ソル「お前等なに目をそらしてるんだ？そらしちゃいけないだろうが。」

アマテラス「……お前は何で大丈夫なんだ？」

ソル「目をそらすことは目の前の真実をそらすことだ。そういつたことに目をそらしてどうする。失礼だろうが。ギルガメスとマステイマ。エレンを抱きしめてやれ。できるのは今しかないぞ。」

ソルがギルガメスとマステイマに言った。

ギルガメス「……分かってるよ。」

マステイマ「ホントにごめんね。エレン。」

2人がエレンを優しく抱きしめた。その間もエレンは泣き続けた。

エレン「バカ……お父さんとお母さんのバカ……」

ギルガメス（やれやれ……ホントに悪いことしちゃったな。）

マステイマ「ごめんね……ごめんね……」

ソル「……しばらくは2人に任せておくか。」

ソルは3人の様子を見た後、アマテラスとエグバード、ベリアルに言った。

ソル「しばらくはあの2人に任せるとしよう。」

アマテラス「……そうだな。」

エグバード「そうしよう。」

ベリアル「……大丈夫かな。」

ソル「大丈夫だ。ほら行くぞ。」

ソルとベリアル、アマテラスとエグバードは2階の食堂に移動した。

3人の気が済むまで食堂で待つことにしたのだ。

時間が経った後にエレンとギルガメスにマステイマが来た。エレンはもう泣き止んでいた。

ソル「気が済んだか？」

エレン「うん。もう大丈夫。」

ギルガメス「オレもだ。」

マステイマ「アタシもだよ。」

ソルは頷くと3人に椅子に座るようにジェスチャーをした。3人が座った後、今後のことについて話し始めた。

ソル「さて、お前達は今後どうする？」

ギルガメス「そうだな。またオレはシドを追いかけて思う。」

ソル「追いかけるのはいいがここからは出てくなよ？せつかく再会したのにまた別れるなんてオレが許さんぞ。」

エレン「それにもうばれてるよ。今更別れたって……」

マステイマ「別れるつもりはアタシは無いけどね。」

とりあえず強制的にギルガメスがここにいることになった。マステイマは言うまでも無く、エレンと一緒にいるつもりだ。それからいろいろ話した。しばらく話した後に談笑もした。その談笑をしてる最中にギルガメスがあることを言った。

ギルガメス「そういえばお前がアマテラスか？」

アマテラス「ああ、そうだが？」

ギルガメス「エレンから聞いたぞ。お前が彼氏だったな。」

アマテラス「な！？」

マステイマ「あれ、アナタってそういう人だったの？」

エグバード「おお？この展開はまさかの！？」

ソル「よくあるあの光景か？」

ベリアル「????」

ソルとエグバードは父親がよくいうあの光景を思い出していた。大
体「娘は渡さんぞー！」みたいな光景だ。

だがギルガメスは……………

ギルガメス「まあ、お前なら許すか。」

アマテラス「え？」

マステイマ「て、違ったし。」

エレン「お父さん。ここでその話をするって……………」

ベリアル「分かんないもんだなあ。」↑全く分かってない

しばらくそのような話をしていた。

そのころジュウユーズでは……………

ゼウス「はあ。まだ見つからん。」

ウラヌス「面倒臭くなってきましたね。」

ゼウスとウラヌスはコーヒーを飲みながら魔界のゲートの特定をしていた。そこにプリンストがやってきた。

プリンスト「ゼウス様、テレビで面白いのを見つけましたぜえ。」

ウラヌス「お前なあ。勤務中にテレビ見るなよ。」

ゼウス「よし、疲れたしその面白いのを見るか。」

ウラヌス「うおい！最高司令官がサボるな！！」

ゼウス「黙れ！最高司令官命令だ！！テレビのスイッチを入れる！！」

サボっていた。

次回を待て
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ミッション12：ブラックフリーユージェルの末裔：共にいれなかった理由（後書き

なんかかんやで終わりました。

ソル「最後サボり気味だな。」

捻るのが難しくなってきたんだ。

エグバード「駄目じゃん。」

お前抹消。

エグバード「電光石火！」

無駄だあ！もう当たらん！！次回予告！！

ベリアル「紙切るのめんどくさいなあ。」

え？ ジャキン！！↑紙を切っているベリアルのハサミにギロチンされた。

ゴブリンバットー！！↑断末魔

次回予告

ギルガメス「魔界のゲートを見つけるためにオレとアマテラスとエグバードとジュウユースのプリンスでゲートの探索をすることになった。探索の道中に謎の集団がオレ達に襲い掛かってきた。外見

からすればただのポケモンだったがソイツ等は悪魔だった。どうも
また殲滅をしなければいけないようだ。こんなことする奴はすぐに
分かったがな・・・・・・・・

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰
らう者達

ミッション13：探索と交戦」

ミッション13：探索と交戦パート1：雑談と明朝の襲撃（前書き）

また今回から気合入れて逝くぞ。

ギルガメス「始めから誤字になってんじゃねえか。」
マステイマ「駄目じゃん。」

・・・誤字が最近酷い・・・

アマテラス「大丈夫なのか？ホント。」

もう言わなくていいよ・・・（：。）

エグバード「何だよその奇妙な顔文字。」

どうだっていいじゃん。ミッション13スタート。

ミッション13：探索と交戦パート1：雑談と明朝の襲撃

ト14番通り

ロンドンイス（地球というローマ） ビナス

私設対悪魔討伐隊ジュウユーズ 6階 司令官室

AM4:38

ゼウスはまた早めに起きて魔界のゲートの特定をしていた。ちなみに今はウラヌスはいない。

「世界各地を探しているがまだ見つからんとは。全く、本当に面倒臭い。」

1人で愚痴を漏らしながら作業を進めていた。そこに後ろから気配がした。

「まあその仕事もうしなくてもいいぜええ。」

「……貴様がシドか。」

ゼウスが振り向くとダーテングがいた。こんな嫌な喋り方をするのはシドしかない。

「おやあ？誰かに聞いたようだねえええ。」

「ギルガメスからすでに聞いた。わざわざご苦労だな、自分から檻に入ってくるとは。」

ゼウスがサイコネシスを発動させてシドを捕らえた。

「げ！」

「私の前から消える！」

サイコキネシスの力を圧縮させてシドをバラバラに吹き飛ばした。タイプ関係無しで。しかし黒い霧が発生してシドがまた復活した。

「痛ええなああ。ミュウツウのサイコキネシスは痛ええんだから勘弁してくれよおお。」

「気合玉！！」 ドガーーン！！

司令官室が今の気合玉で破壊された。シドはまた当たってまたバラバラになっていた。それでも先ほどのように復活したが。

「痛ええからやめろって言っただろおお！！」

「は！貴様のような雑魚悪魔初めて見たぞ！！」

シドが燕返しを繰り出すとゼウスは気合玉をそのままシドの葉の刃にぶつけた。

ドガー————ン！！

「ち、暴れすぎたか。仕方ねえ。トンヅラするk」 シーン！

「逃がすか。」

突然現れた青色のコートを着た背の高いルカリオに鞘が黒く、柄が白い日本刀で微塵切りにされた。

それでもシドはまた再生したが再生スピードが遅かった。

「ぐえあああああ！！ば、馬鹿痛ええええ！！テメエ魂を直接斬りやがったなああああ！！！！」

「だったら何だ？死ね。」

ルカリオがまた日本刀を振るったがシドは消えていた。ゼウスが後から来た。

「ち、逃げられたか。鼠が……」 カチン

「何故ここに来た？」

「シドの気配がしたからな。」

「そうか。それよりもお前がここにいていいのか？私とウラヌスは構わんが他の部下はお前に罵声をぶつけに来るぞ。」

「そんなことは分かっている。ではこれで失礼する。」

「ああ。」

そのルカリオは一瞬の内に消えた。しばらくした後ジュウユーズの部下が来た。この日、襲撃が起きたことはマスコミに駆けつけられ、大変な起きたという……

ギルガメスはこのフリーダムな職場を見て唖然としていた。みんなやりたいことを好き放題している。そんな時間に早くもミッションが来た。

ガチャ

ゲンガー「失礼します。ミッションの通知で来ました。」

ソル「ん？お前アヴェンジャーか。」

アヴェンジャー「はい、そうです。ゼウス様が待っています。仕度を終えたら司令官室に来てください。司令官室大変なことになりますけど。」

アマテラス「????」

アヴェンジャー「ではこれで……」

アヴェンジャーが魔方陣のゲートを造ってその中に入っていった。消えた。

ソル「やけにミッションが早いな。」

エグバード「それだけ大変なんじゃないの？」

ギルガメス「仕事か。ならオレが行くか。」

アマテラス「最近行ってなかったからな。オレも行くでしょう。」

エグバード「じゃあオレも。」

ギルガメス、アマテラス、エグバードが行くことにした。

マステイマ「仕事熱心だねえ。最近の若者は。」

エグバード「いやあ、それほどでも、（前回のような変な仕掛けありませんように……）」

ソル「おい、何心で祈ってるんだよ。」

エグバード「さああ？何のことかなあ？」

エレン「……………あれを思い出したんだね……………」

エレンの言うあれとはミッション9の悪夢である。詳しくはミッション9のパート2にある。

3人それぞれ装備を整えた後、アヴェンジャーが造ったゲートに入っ
ていって消えた。

り

ロンデイス（地球というローマ） ビナスト14番通

私設対悪魔討伐隊ジュウユーズ 1階 大広間 AM5:

27

アマテラス「さあ、司令官室に行こう。」

ギルガメス「そうだな。」

エグバード「とつとつと行こうぜ。」

3人は司令官室に移動した。

6階 司令官室 AM 5:35

ゼウス「来たか。」

アマテラス「・・・何をしたんだ？」

ウラヌス「シドが襲ってきてこの有様だ。」

エグバード「わお。こりやすげえ。」

ギルガメス「相変わらず力の加減を知らん奴だ。」

司令官室の周りは吹き飛んできてメチャクチャになっている。ウラヌスもご覧の通り呆れている。後からプリンストが入ってきた。言い忘れていたがウラヌスやゼウス、プリンストにアヴェンジャーはすでにギルガメスと関わっていた。ようは知り合いだ。

プリンスト「どうも出勤に来ました。」

ウラヌス「お前遅い。」

プリンス「へーへー。ってまたガキンチョか。」

エグバード「その腹薄く切って皮財布にしてやるうか？（黒）」

ギルガメス「やめろ。」

アマテラス「……（無視しよう。）それでゼウス、オレ達は何をすればいい？」

アマテラスがエグバードとプリンスの喧嘩を無視してゼウスに今回のミッションの内容を聞くことにした。

ゼウス「この区域の探索だ。」

アマテラスがゼウスから渡された地図にマーキングが付いていた。

ゼウス「その区域で探索をしてほしい。」

アマテラス「ゲートの探索か。場所は……ブリレッジ周辺か。」

ゼウス「範囲が広いが頑張って探索してくれ。」

アマテラス「分かった。エグバード、ギルガメス、行くぞ。」

ウラヌス「ああ、後プリンス、お前も行け。」

プリンス「……コイツと二回目なんだが。」

ウラヌス「知るか。チーム気にする奴は最初に死ぬ奴だぞ。」

プリンス「どっちにしろ死ぬじゃねえか。」

ウラヌス「いいから早く行け。」

プリンス「はいはい。ぼそぼそ（たく、仕切りやがって。あんちきしょう。）」

プリンスが司令官室のロッカーからロケットランチャーと大斧を取り出した。

プリンス「ゼウス様ーこれ使いますわー。」

ゼウス「ああ、いいぞ。」

アマテラス「もういいか？」

プリンス「ああ、いいけど？」

3人改め、4人がブリレッジへ向かった。

ブリレッジへ行く途中、4人は電車の中で雑談をしていた。

プリンス「あゝ酒飲みてえ。」

ギルガメス「飲むのやめろ。お前が飲むとまたオレが背負って帰るはめになるだろうが。」

エグバード「駄目大人じゃん。」

プリンス「何か言ったか？ガキンチョ？」 ガチャ↑ロケットランチャーを向けてる

エグバード「ミンチにされてえか？（黒）」 カチ コヨーテに手を掛けている

アマテラス「やめろと言ってるだろ。」

しばらくこのようなことが続いた。
次回へ続く。

ミッション13：探索と交戦パート1：雑談と明朝の襲撃（後書き）

今回は雑談回だったな。

エグバード「あの野郎、ぜってえぶっ飛ばす。」

プリンス「できるもんならな。」

エグバード「よおし！殺す！！」

また始まった。ギルガメス、ザ・ワールドだ。

ギルガメス「はー。ザ・ワールド！！」

エグバード「……………」

プリンス「……………」

アマテラス「この2人は犬猿の仲だな。」↑波導を展開して防いだ

コイツ等どうしょ。

ミッション13：探索と交戦パート2：海底のような過去とお嬢様ベイリーフ

今日も行くぜ！地獄へ！

ソル「宿題と言っ名でな。」

それを言っな……………

アマテラス「それよりも早く進めよう。」

そう……………だ……………じゃあパート2

GO TO HELL!!

ミッション13：探索と交戦パート2：海底のような過去とお嬢様ベイリーフ

ブリレッジ（地球というフランス） イコット街 AM 1
0：28

ブリレッジは本来鎖国しているため、他の国は殆ど入れない。しかしロンドイスと関係が保てているためにロンドイスには入国許可されている。だがエグバードとアマテラスはそれぞれ出身国が違う。エグバードに至っては出身国不明だ。まあそのためにジュワユーズも力を入れているのだが。

門の入り口に一体のシュバルゴがいた。そのシュバルゴがアマテラス達に近づいてきた。

シュバルゴ「入国許可証をお見せください。」

プリンス「これでいいか？」

シュバルゴ「拝見します。……ジュワユーズの方ですね。

後ろの方もそうですか？」

プリンス「コイツ等はオレの連れだ。大丈夫だ。コイツ等は暴れたりはしない。」

シュバルゴ「では後ろの方も拝見させて貰います。」

シュバルゴがアマテラス達を睨み始めた。しばらく睨みつけた後門を開けた。

シュバルゴ「暴れたりはしなさそうですね。ではお氣をつけて。」
プリンス「どうもありがとうございます。」

4人はようやくブリレッジに入れた。

エグバード「特権か？」

プリンス「ジュウユースにはあらゆるものが優先される。この国ではな。ホテルだって借りることができる。列車にもただで乗れる。ただし緊急時だけな。」

アマテラス「……この国、ロンデイスに植民地にされてるのか？」

ギルガメス「条件からすればそう思われそうだがそれはジュウユースだけだ。この国じゃ悪魔が大量発生するからな。だから現場に早く着けるように優先されてるんだよ。」

アマテラス「そうなのか。だがここには長く居たくないな。」

アマテラスはこの国に来て最初に思ったことは貧富の差が激しいと思ったことだ。アマテラスはすぐに帰りたい気持ちになった。

プリンス「どうした？先に帰るか？」

アマテラス「……いや、早めにミッションを終わらせよう。」

ギルガメス「（アマテラスにとってこの国は毒か……）早めに切り上げたほうがよさそうだな。」

エグバード「なんつうブルジョワ！傭兵やってたころはこんな綺麗なレストラン入ったことも見たこともねえよ！ちよつとぐらい観光してこうぜ？」

プリンス「1人で観光してる。オレ達は仕事しに来たんだぞ。」

エグバード「……は！そうだった！！」

ギルガメス「仕事といっても蒸気機関車に乗ったり馬車に乗ったりしてブリレッジの周りを回るだけだな。」

アマテラス「！蒸気機関車……」

アマテラスは蒸気機関車の言葉を聞くと急に顔色が悪くなった。

エグバード「乗り物酔いするのか？」

アマテラス「そういう意味ではない……」
プリンス「何してんだ。さっさと行くぞ。」

顔色の悪いアマテラスを連れて蒸気機関車がある駅へ向かった。

ミレラッド駅 プラプル蒸気機関車 AM10:43

ここでプリンスはまたジュウユースの特権を使った。それで寝具もついている最高級の車両に乗ることが出来た。
エグバードは足をスキップさせながら車両に入って行った。元傭兵なのでこういったのには楽しみになるのだ。ギルガメスとプリンストはどうでもいいという感じで車両に入っていた。アマテラスはというと……

アマテラス「……」
プリンス「おい何立ち止まってんだ。早く来い。」
アマテラス「……あ……ああ。」

アマテラスが重い足取りで車両に入って行った。アマテラスにとって蒸気車はトラウマだった。何故なら………

アンブリスのある蒸気機関車

???????

アマテラスはその車両にいた。現在はルカリオに進化している。眼つきは無気力な感じが余計に増えていた。隣にはまだ自分より小さいコリンクがいた。

この車両はアンブリスのある闘技場に運ぶための商品、いわばこの蒸気機関車は人身売買列車だ。まだ小さいコリンクはアマテラスに話しかけた。

「ねえ、お兄ちゃん。これどこに向かっているの？」

「・・・言えることはこの先が幸せにはなれないとこだ。」

「幸せになれないとこ？」

「ああ、人生を海底に沈めるようなところだ。抜け出したくても抜け出せないところだ。」

「僕もそこに行くの？」

「そうだ。運が悪かったな。お互いに・・・」

「僕・・・やだ。そんなところに行くの・・・」

「嫌でも無理矢理行かされる。心の準備はしておけ。死にたくなかったら全力で戦え。」

「・・・」

アマテラスは無気力な眼と無気力な声で言った。コリンクは静かに涙を流していた。

（さよならだ。もう戻れない。あの馬鹿馬鹿しい平和な日々には戻れない。戦え、コリンク・・・）

アマテラスは深い眠りについた。

そして現在………

アマテラスは車両の中にいた。今アマテラスがいるのは車両内の廊下である。そこから外の景色を見ていた。

（やっぱり嫌な乗り物だ。心が沈んでいく……この振動が……この蒸気が……オレを沈めていく……深い深い海底へ……）

アマテラスはまたあの時と同じ感覚でいた。それでも少しでも景色を見ると少しだけ気分が良くなった。アマテラスが前に乗ってた蒸気機関車は窓が無くて小さな電球が取り付けられてただけだった。今回は窓があつて光が差し込んでいた。気分を良くしてくれるのはこれのおかげだ。

しばらく外を見つづけてるとアマテラスの右側から一体のベイリーフが近づいてきた。

「あんた外の景色見てて楽しいの？」

「……どうだっていいだろ。」

ベイリーフの声は具体的にいうとお嬢様の声だ。♀のようだ。

「どうだっていい？よくないわよ。そんな暗い顔して言い訳しないでしょ。そんな顔でここにいるんだったら今すぐ飛び降りて頂戴。」

「生憎勤務中だ。」

「勤務中？あつはっは！あんた見たいな坊やが！？あつはっは！」

「おい、殺意を抑えられてる内に消え失せろ。でなければ斬るぞ。」

チャキ

アマテラスは強烈な殺気を眼に込めて黒竜を手に掛けた。何時でも居合い斬りをするつもりだ。だがベイリーフは全く怯まなかった。

「だったら斬ってみなさいよ。」

「・・・後悔するぞ。」

「言っでないでやれば？」

「！斬る！！！」

アマテラスはベイリーフを斬った・・・はずだった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ふふん、斬れなかったし。押し倒す！」

「ぐ！」

アマテラスはベイリーフに押し倒された。黒竜も足で踏まれて振り回せない。

「甘ちゃんね。心が乱れてるから命中もしない。」

「クソ！クソクソ！！」

「はいはい、クソクソ言わない。」

「これが言わずにいれるか!!」

「はあ・・・あんたがあたしを斬れなかったのは心に良心があったから。その良心がある限りあたしは殺せないわよ?」

「~~~~!!~~~~!!」

「怒りで言葉も言えてないし。いい?話は変わるけど良心があるってことはそれだけあんたにとっての成長の過程があるのよ。経験と何をしたらいけないのか。こんな感じにね。」

「~~~~!~~~~!」

「経験の過程で何か辛い過去でも思い出したんでしょうけどそんなに飲み込まれてどうするのよ?もつとシャキつとしなさい。もつと明るくいなさい。そんなことじゃこの先生きていけないわよ?」

「~~~~!~~~~!」

「はあ、何言ってるんだか。じゃああたしは失礼するわよ。ああ廊下に暗い顔でいないでよね。凄い気分滅入るから。」

ベイリーフはアマテラスの隣の車両部屋に入って行った。アマテラスは起き上がったがしばらく立ったままだった。

「・・・そうだな・・・過去に囚われてる自分が恥ずかしいよ・・・」

「

アマテラスも自分の車両部屋に入って行った。

部屋の中は結構広くてあまり揺れない。冷蔵庫もあった。寝具つきの車両なので寝具もある。アマテラスは寝具に入って横になったまま眠りに落ちていった。

プラプル蒸気機関車 8番 寢室車両 6番 P
M7:20

「zzzzzzzzzz」

「おい。アマテラス、起きろ。夕食だぞ。」

「んん？あ、ああ。」

ギルガメスがアマテラスを起こした。あのまま昼食抜きで寝続けたようだ。そのせいか腹が余計に空く。

「腹が減った。」

「昼食抜きだったろ。ほら行くぞ。」

アマテラスは寢室を後にした。

プラプル蒸気機関車 2階 食堂 PM7:23

アマテラスはまだ眠かった。夜なので余計に眠い。眠気が酷かったがプリンスとエグバードのいるテーブルのところに移動して椅子に座った。この蒸気機関車は高級車両のようだ。椅子の座り心地もいい。テーブルにはすでに料理があった。

プリンス「随分遅かったじゃねえか。」

エグバード「しかも眠そうだが？」

アマテラス「寝てた。」

エグバード「ああ、そうかい。（昼寝したっけ？コイツ？）」

ギルガメス「さっさと食べて部屋に戻るぞ。」

4人揃ったので夕食を食べようかと思つた矢先……

「あ、いたいた。あんたあたしと一緒に夕食付き合いなさい。」

アマテラスが後ろを振り向くとあのベイリーフがいた。

アマテラス「……何故？」

ベイリーフ「細かいこと気にしないでいいじゃない。ちょっとこの子借りてくわよ。」

アマテラス「おい！」

エグバード「いいよなあ。もてる奴は……行つてらっしゃい。」

（いいなあ。あんな可愛い子に捕まつて。）

プリンス「今のうちに経験しておけ。」

ギルガメス「レディに失礼ないようにな。」

アマテラス「ちょっと待てお前等あああ……！」

お嬢様ベイリーフに連行されたアマテラス。一体どうなるのか。
次回へ続く。

ミッション13：探索と交戦パート2：海底のような過去とお嬢様ベイリーフ

何か初のパート3行きだな。

アマテラス「何故こうなった……」

時間が無かったんだよ。てか平日ゆっくり考える暇がない。

ベイリーフ「駄目人間ね。」

一発屋のアンタに言われたくねえよ。

次回はミッション13の後半とアマテラスとお嬢様ベイリーフとの夕食です。

ミッション13：探索と交戦パート3：哲学な夕食会と明朝の交戦（前書き）

今回は無駄に長いぞ。前半。

アマテラス「家に帰りたい……………」

言っておくけどまだまだあるからな？

アマテラス「何でオレだけ……………」

しょうがないじゃん。過去一番辛いんだから。

ベイリーフ「さあ、始めましょう？（ニヤリ）」

はいはい。じゃ、スタート。

ミッション13：探索と交戦パート3：哲学な夕食会と明朝の交戦

前回と同時刻、アマテラスはベイリーフに無理矢理2人つきりで楽しめる特別食事室に連行された。料理もすでに置かれていた。

「何を考えてるんだ？お前。」

「ちよつとあたしの少しおかしい話に付き合ってもらおと思ってね。まあ邪魔されないようにここに連れてきたって訳。王女だって大変だからこういうので息抜きしたいのよ。」

「今さらりと暴露したな？凄い事。」

「嘘じゃあないわよ。まあせつかくだし自己紹介でもしようかな。

あたしはバラデュール「アントワネット。これからの話し相手なんだから覚えときなさい。で、あんたは？」

「・・・アマテラ」

「王女様あああああ！！」

窓からいきなり一体のジャローダが入ってきた。部屋は大きいのでぎちぎちにはなかった。

「こんなところでさぼってないください！女王様がお怒りです」

「うるさいわ！このスカポンタン！！ソーラービーム！！」 ビ

ーーーー！！

「げあああああああ！！」 ドサ！ゴロゴロゴロ

ジャローダはソーラービームをモロにくらって路線に落ちていった。

「おい・・・落ちてったぞ・・・」

「大丈夫よ。アイツ例の人曰く「何度でも蘇るさ！」だからね。」

「・・・ああ、そう。」

「聞き逃したわね。もう一度聞いわ。」

「アマテラスだ。」

「それだけ？名字無いの？」

「無い。」

「は？そうですか。」

「何だその軽蔑してるような顔は。」

「だって名字無いって貧しいイメージあるもん。」

「ちっ」 ギリギリ

アマテラスは舌打ちをしながら齒軋りをした。

「さてと、そろそろ話をしましょうか。ああ、食べながらいいわよ。せつかくのごちそうを手放したくないでしょ？」

バラデュールはパンを食べながら言った。アマテラスは変な気持ちになりながらもグラスに注がれてた赤い液体を飲んだ。が・・・飲んだ瞬間・・・

「げほ！げほ！何だこれは！」

「えーワイン飲めないの？ていうかワイン知らない事にビックリだわ。お子様ねえ。」

「飲めるか！しかもこれ酒だろ！」

「ブドウ酒だからワインなんじゃない。アルコールないワインてただのブドウジュースじゃん。て、それじゃあワインじゃないし。」

「ブドウジュースに変えてくる！」

「止めた方がいいわよ。食材粗末にすることになるから。」

「！」

「ん？今の反応・・・ふふふふ、第一の話題見つけた。」

「何だと？」

バラデュールが不気味に笑って言った。

「第一の話題、まずは『食』！」

「????」

「食といえばまさに「食べる」ということ。食材の命を頂くということ。さて、あんたにとって食べるとはどういうこと？」

バラデュールがつるのむちを使ってナイフとフォークを持って上手に切った牛肉を食べながらアマテラスに答えを求めた。

「……食材に自分にやれるだけの感謝をして食材の命を頂くということだ。」

「へー。中々いいこと言うじゃない。食べるは人生の楽しみ。生命を繋ぐ大事な行い。単に空腹を満たすためのものとも言えるね。じゃああんたは今言った3つの内どれ？」

「生命を繋ぐ大事な行いだ。」

「ふーん。どうして？」

「一番じゃ食べるということのありがたみがない。三番では欲を満たすのと同じだ。いずれも食材を何も思わないで殺しているのと同じだ。二番はその食材の生命のありがたみをもって食べている。生命を繋ぐということの重要性を知っている。」

「おー。凄い凄い。こだわりあると思ったらやっぱりあった。あたしの選択は間違ってたわね。じゃあ早いけど『食』は終了。」

バラデュールが宣言して『食』の話題は終了した。アマテラスがパンを食べながらバラデュールにさっきの説明を求めた。

「バラデュール、さっきのは何だ？急に哲学者みたくなって。」

「さっきのがあたしの趣味。日常のことからあまりやらない行いま

でああいうことするのがあたしは好きなのよ。」

「哲学者にでもなったらどうだ？」

「興味はあるけど多分なれないわね。王女だからもう次すること決まっちゃってるし。」

「そうか。「時間」が無いとも言えるな。」

「そうねえ。あ、第二の話題思いついた。」

「何？もう？」

バラデュールがまた話題を提案した。

「第二の話題、次は『時間』！」

「時間？」

バラデュールは今度はサラダを食べながら言った。

「時間といえは限られたもの。普通では止められないもの。あんたにとって次は何があると思う？」

「・・・行動が出来る間。」

「うーん。まあいいんじゃない？それじゃあ続き。時間の中では様々な事が出来る。でもその時間の中で基本的に出来ないことって何だと思う？」

「時間そのものの干渉だ。」

「おー。結構難しい事言うね。まあ確かに時間そのものに干渉何て普通できないよね。出来るのは時間を操れる者だけだしね。ではさらにもう一つ。時間の中でやろうと思えばできるけどやると危ないものって何だ？」

「んー・・・時間の破壊？」

「ビンゴ。そうよねえ。時間破壊したら危ないよねえ。何起こるか分かんないもの。と、まあこんな感じね。じゃあ『時間』についてはこれで終了。」

先ほどと同じように宣言して『時間』の話題は終了した。これ以降は同じような哲学じみた話題が何十分と続いた。出された料理が全て食べ終わった後デザートが来た。ここで最後の話しに入った。

「じゃあこれで最後にしよう。最後はあたし個人の趣味の話だけだね。」

「最後は何だ？」

「ふふん。最後はね……」

バラデュールがデザートのアイスを食べながら言った。

「『七つの大罪』よ。」

「七つの大罪？」

「そう。傲慢、嫉妬、暴食、色欲、怠惰、強欲、憤怒、こんな具合にね。今回は哲学的なものではなくてあんたにとってどれが一番罪が重いか決めてもらいたい。あんたは今言った中で何が一番罪が重いと思う？」

「七つの中から……か。」

「時間はいくらでも待ってあげるわ。自分の経験からして何が一番重いのか分かるはずよ。」

「……………」

アマテラスは目をつぶって考えてみた。するといきなり目の前が真

っ白になった。

そこから大量の記憶がフラッシュバックされる。

（どっちにしろ生きられない・・・）

（何度やつても同じだ・・・）

（何もしない方がいい・・・）

（何やつても無駄だ・・・）

（やつても意味がない・・・）

「く！」

「・・・ちよつと考えすぎよ。それまでにしなさい。」

「ぐ！・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「もう考えない方がいいわね。答えは決まった？」

「・・・さつき記憶を振り返って何が一番罪が重いのか分かったよ。あくまでオレにとつてだけだな。」

「そう。で、答えは？」

「怠惰だ。」

「怠惰・・・そうね。確かに生きる目的に関しては一番罪が重いと言えるわね。だって怠惰って墮落ともいえるもん。何事に関してめんどくさいとか、やつても意味ないとか。すぐに諦めたりね。何事にも挑戦しない。これなら一番罪が重いつていえるわね。うん、いい結果が取れた。」

「はあ、疲れた。」

「付き合ってくれてありがとう。じゃ、これにてお話終了。ああ部屋に戻る前に一言。」

「何だ？まだあるのか？」

「まあね。あんたにとつての罪は間違いなく怠惰よ。解消法はプラナリアの如く足掻き続けること。途中なんかで諦めたら駄目よ。」「完全にやり遂げるまで足掻きなさい」。以上よ。」

「・・・もう諦めるつもりはないがな。」

「そう。じゃあ午前に言ってた勤務とやら頑張つてね。それじゃ、
Bonne nuit, Un amant.（おやすみなさい、愛
しい人）アマテラス。」

「????おやすみ。バラデュール。」

アマテラスには今の言語は分からなかった。だが分からなかったほ
うがよかっただろう。もちろんバラデュールは分かる言葉では言わ
ないようにしていた。本当に思っているかどうかは分からないが・
・・・・

特別食事室にはアマテラスだけが残った。デザートをまだ食べてな
かったのだ。アマテラスのデザートはチョコレートケーキだ。急い
で食べてごちそう様と言った後、自分の寝室車両に向かった。

プラプル蒸気機関車 8番 寝室車両 6番 P

M 8 : 5 0

「あんなに話してたのか。何かホントに疲れた。ふあゝ。早いけど
寝るとしよう。」

アマテラスは久々にかなり話したのでクタクタに疲れていた。シャ
ワーを浴びた後、すぐにベッドに入って横になった。今回もそのま
ま深い眠りに落ちた。

そのころ車両の廊下では……………

エグバード「アイツもう寝てやがる。」

ギルガメス「時間からして一時間以上話してたようだな。」

ブリンスト「オレ達のミッションこれからだというのにアイツ寝てやがって。」

ギルガメス「寝かせてやれ。もう熟睡しちゃってるぞ。」

エグバード「レディの相手そんなに疲れるのかよ。まあいいや。オレ達でやるとしよう。」

3人はゲートの探索のためにあの蒼い石を持って車両の上に乗って調べることにした。

一方バラデュールは……………

「もしもし？ああ、あんたね。え、ジュウユーズ？いるけど？て、あんただんだけ嫌いなものよ。同じ悪魔狩る立場なんだから協力すればいいのに。汚れた奴らと悪魔が集って悪魔を狩るのが許せないってあんたやっぱ小物ね。あ、あの小物電話線切ったわね。短気な人ねえ、だから負けるのよ。ジュウユーズに。」

バラデュールは携帯電話の電源を切ると窓をじっと見始めた・・・

（そんなことじゃ、何時までも進歩できないわよ。小物・・・）

M 4 : 2 0

プラプル蒸気機関車 8番 寢室車両 6番 A

「んん．．．ん？起きるのが早かったか。」

アマテラスは何時もより早く目が覚めた。もう一度寝ようかと思っ
たがギルガメスが廊下において手招きをしている。指示だと分かって
装備を整えた後、廊下に出た。

アマテラス「何だ？」

ギルガメス「昨日はよく寝れたか？」

アマテラス「ああ、寝れた。」

ギルガメス「そうか。なら今すぐ車両から降りるぞ。」

アマテラス『何故だ？』

ギルガメス「外を見る。」

アマテラス「外？何だアイツ等？」

外からは何体かのポケモンの集団が電光石化で迫ってきていた。全
員青いマントをしている。

プリンストとエグバードが横から来た。

プリンスト「アイツ等はオレ達ジュワユーズに因縁をつけてきてい
る敵対組織だ。組織名は覚えてねえがな。」

エグバード「まあこれからアイツ等と戦わなきゃいけないんだよね。
何かオレ達 f e n r i r にも喧嘩をふっかけるつもりらしい。」

アマテラス「アイツ等悪魔か。」

ギルガメス「オレ達に敵対するなら容赦しないぞ。」

4人は窓から外に飛び降りた。外にはあの青いマントをしているポケモンの集団が待ち構えていた。

ポケモンの集団から一体のライボルトが出てきた。

ライボルト「我らの楽園への入り口を塞ごうとする悪人め、ここで消してくれる！」

ギルガメス「何が楽園への入り口だ。魔界のどこが楽園だよ。」

エグバード「誰か精神病院紹介してやれよ。」

プリンス「藪医者集いの病院なら知ってるが？」

エグバード「そこに紹介してやれよ。」

プリンス「これが終わったら紹介」 ビシャーン！

エグバードとプリンスは雷をまともにくらった。2人の額には青筋が立っていた。

エグバード「・・・そうかあ。そんなにミンチにされてえかあ。ハンバーグの材料にしてやるよ・・・（黒笑）」

プリンス「さっとロケットランチャーでローストしてやるよ。（黒）」

ライボルト「十万ボルト！」

2人は難なく避けた。

プリンス「おら、たらふく食べやああああ！！」 ドシューー
ドガーシューー！！

炸裂式のロケットランチャーの弾をポケモンの集団に当てた。何体

かのポケモンは倒れていたが霧になって再生するものがいた。それはエグバードがヨルムンガンドで薙ぎ払って片付けた。

エグバード「何だその弱さ！そんなにオレ達に喧嘩売ったってかああああ！！？」 ドカ！バキ！ゴン！

エグバードはもう武器を使わずに素手で殴り倒していた。アマテラスとギルガメスはただ見てただけだった。

ギルガメス「弱すぎるだろ。いくらなんでも。」
アマテラス「いくまでもなかったか。」

ぶち切れたプリンスとエグバードに殲滅された。だが全員気絶で済まされていた。

エグバード「アイツ等どうだったよ？」
プリンス「全然駄目だ。」

エグバード「藪医者集いの病院行きだな。」
プリンス「だな。」 パアン！

この時だけエグバードとプリンスは手を重ねて鳴らした。ギルガメスは目を閉じていた。アマテラスも目を閉じている。

アマテラス「ギルガメス。」
ギルガメス「分かってる。……後ろにいるのは分かってるぞシド。」

シド「ち！まああたはれたかああ。ルカリオは仕方ねえとしておめええは感覚ありすぎだ。」

ギルガメス「仕組んだのはお前だな？」
シド「あらほれさっさ」 ドシューーーー！

プリンストが後ろからロケットランチャーを撃ったがシドには命中しなかった。

シド「危ねえだろおうが！当たったらどうするんだよおう！」

プリンスト「知るかよ、死ね。」

シド「今日もトンスラするか。へっへー！」

シドはまた一瞬で消えた。

ギルガメス「また逃げられたか。封印装置でも造ったほうがいいな。」

アマテラス「それよりも早く蒸気機関車に向かおう。距離がだいぶ離れた。」

エグバード「何かスツキリしねえな。」

プリンスト「仕方ねえな。戻るとしよう。（斧の出番なかったな）」

4人はまた蒸気機関車に向かった。ちなみにプリンストはギルガメスに背負われて運ばれた。

ミレラッド駅 改札口 AM 10:24

ミレラッド駅のプラプル蒸気機関車でブリレッジの周辺を探索したが結局手がかりは何も無かった。

アマテラスが最後に降りた後、目の前にはバラデュールがいた。

「早いけどお別れね。」

「そうだな。」

「今回の勤務で何か進展はあった？」

「得に今回は……いや、1つあった。」

「それは？」

「オレはまだまだ弱いが強くなれるということだ。」

「いかにもベタなことね。ま、いいんじゃない？」

「だな。じゃあオレは帰るべきところへ帰る。」

「そうね。さようなら。もし次会うときはあんたの彼女も一緒にね。楽しい哲学のような話がしたいから。」

「……機会があったらまた会おう。さよなら。バラデュール。」
「うん、さようなら。アマテラス。」

2人は改札口にいて切符を渡した後、それぞれ帰るべき家に向かった。彼らを出迎えてくれる家へ……

ミッション13コンプリート

ミッション13：探索と交戦パート3：哲学な夕食会と明朝の交戦（後書き）

今回はアマテラスがメインのストーリーだったな。
今回は微量の恋愛成分だったかな？

アマテラス「あまり酷使しないでくれ。」

次回はゆっくり休んでいいよ。

アマテラス「そうさせてもらうよ。」

さあ次回は急展開を迎えるかもしれないぞ。

バラデュール「かもじゃ駄目でしょ。」

いや、未定なんだもん……………てか何か続編に出す雰囲気にしてしまった。

バラデュールどうしょ……………

バラデュール「その時に決めなさい。」

はい……………一発屋のはずがこれか……………ホントどうしよ？

仕方ないけど次回予告。

次回予告

マステイマ「マッドハルトっていう奴からの依頼でアンブリスのあ
る洞窟で異変が起きてるらしい。詳しい内容もあり分らないら
しく、アタシとベリアル、エレンとソルでその洞窟の調査をするこ
とにした。異変か。どうも好きじゃないにおいがする・・・

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰

らう者達

ミッション14：洞窟の調査」

ミッション14：洞窟の調査パート1：正夢（前書き）

さあ、今回はある方に来てもらいました。

ソル「ある方？」

そう、誰かは後で分かる。

ベリアル「気になるな。」

まあ、そうあせるな。ミッション14スタート
レッツパーリー！

「はー！」 ガバ！

「な、何なんだ？あの夢？夢にしちゃあ鮮明に感じたぞ。」

ソルは謎の夢から覚めた。もう一度あの夢を思い出そうとしたがどういう訳なのか思い出せなかった。

気味が悪かったが気にしても仕方ないと思って装備を整えた後、食堂に向かった。

食堂での時間はスルー。

便利屋 f e n r i r 1階 応接室 A M

7：34

ソル「ん？この剣……」

ソルは応接室のクローゼットに妙な波導が出ていたため開けてみたらそこには夢で見たあのツター ज्याの使っていた黒い剣があった。ちなみにアマテラスも妙な波導には気づいていた。

ギルガメス「見た事あるのか？」

ソル「馬鹿馬鹿しいだろうけど変な夢見てな、その夢で出てきたツター ज्याがこの剣を使ってたんだよ。」

アマテラス「……まさか正夢か？」

ソル「……いや……まさかな……」

だがソルにはいやな予感がしていた。何か大きな災害が訪れるかのように。ソルは一応その黒い剣を背中のダークインスレイブにくっ付けた。その時にあの男が来た。

マッドハルト「少年に仕事を与える男！○○○ダーマツ！！」

ソル マステイマ「空気読め！！」

マッドハルト「生憎笑いに空気を読む必要はない！（キリ」

エグバード「ベリアルー！また死にそうだー！」

ベリアル「何でいつもナイフで行くんだ！」

ギルガメス「騒がしいなあ。楽しそうでいいな。」

エレン「仕事ももう来ちゃったしね。」

ギルガメス「アイツがマッドハルトか。」

結局そんなこんなで今日の仕事、依頼が来た。

マッドハルト「今回の依頼はねえ。この洞窟の調査だ。」

ソル「調査からには何かあるんだろうな？」

マッドハルト「あるとも、今回この洞窟では謎の血液が採取されたらしい。成分も全く分からないね。後そこに生存者がいたと思われる痕跡もあるんだよ。こんな時に謎があつたら調べるべきじゃない？」

ソル「・・・確かに、今の時期は異変があるなら調べるべきだな。分かったよ。引き受けよう。」

マッドハルト「よし！決まった！！では、さらば！ハーハッハッハッハ！！（大笑い）」

マッドハルトは風の如く消えていた。

ソル「ホント消えるの好きだな。アイツ。で、誰来る？」

エレン「じゃあ僕が。」

ベリアル「オイラも行くでしょう。」

マステイマ「若い奴にまかせっきりは良くないからねえ。アタシも行くよ。」

ソル、エレン、ベリアル、マステイマが今回の依頼に参加することになった。4人はその後、目的の洞窟に向かった。

そのころ洞窟付近・・・・・・・・

「・・・・・・・・ここはバグがないみたいだ。空気が澄んでる。・・・洞窟は複雑だし奴らでは簡単に抜け出せないだろうな。今は休めるところを探すべきか・・・・・・・・」

白いロングソードを持ったツタージャが洞窟付近から出てきて辺りを見た後、森の奥へ向かった。休息を取れる街を目指して・・・・・・・・

ミッション14：洞窟の調査パート1：正夢（後書き）

アラタ・ハイドさんからのコラボ依頼、

『Pocket Monster Fantasia』ケルベロスのウター』からツター ज्याのツカサさんに来てもらいました！
よろしくお願いします。

ソル「よろしくな。それと作者。今日バカ短いじゃねえか！」

時間無いんだよ！！理解しろ！

マステイマ「これは短すぎでしょ。」

エレン「これは短いよ。」

ベリアル「短い。」

次頑張るから許してええ……………

ミッション14：洞窟の調査パート2：三原ツカサと変異バグ（前書き）

今回もパート3行きだ。

ソル「前回、バカ短いせいだな。」

イワンでくれー

ベリアル「誤植発生してるし。」

畜生！もういい！スタート！

ミッション14：洞窟の調査パート2：三原ツカサと変異バグ

レイツシティ PM 12:10

ソル「あゝ全く。洞窟まで遠いじゃねえかよ。」

エレン「洞窟かあ。何だか冒険に行くみたいで少し楽しみ。」

ベリアル「そうはいつでもこれからは仕事だからそんな暇はないぞ。」

マステイマ「冒険かあ。ロマンがあつていいねえ♪」

4人はレストランで雑談をしていた。これから向かう洞窟はfennirから距離が離れているため、ここで昼食を取ることにしていた。

ソル「ん？あのツタージャ……」

ソルは窓を見ていて偶然、夢で見たあのツタージャを見つけた。外には住民がひそひそ話している。

「何だ？あのツタージャ？自分より倍の剣を片手で持ってやがる。」

「か、怪物？」

「はは、まさか……怪物つていつたらfennirの連中がすでにいるじゃん……」

「ああ、そうか。fennirに勝てる化け物っていないからな。」

ツタージャ「はあ……（やつぱり化け物って言われるか……それにしてもさつきから言ってるfennirってなんだろうか？）」

ツタージャは街でキョロキョロして見回していた。そこにソルが近づいてきた。

「この剣、お前のだよな？」

「え？ああ、はい。ていうか何で分かったんですか？それに持っていて危なくありませんでしたか？」

「馬鹿馬鹿しいだろうけど夢でお前を見てな。まあそれで分かったわけよ。それと剣から変な怪物が出てきたが無理矢理押し込んで黙らせた。」

「押し込んで黙らせた？それに夢で見たって・・・」

「・・・あゝ立ち話じゃなんだな。店に入って話すでしょう。食事おごつてやろうか？」

「・・・ええ、そうしましょう。食事をおごつてくれるのはありがたいですね。」

「決まりだな。じゃ行くとしよう。」

ソルとそのツタージャは先ほどソルがいたレストランの中に入って行った。

店内

店員のドレディアが2人に近づいてきた。

店員のドレディア「いらつしゃ・・・え・・・ええと、お1人様追加ですか？」

ソル「ああ、追加。」

ツタージャ「はあ・・・」

キルリアの反応を見てツタージャはまたため息を吐いた。白と黒の

ロングブレード、それぞれ片手で持つてるのだ。びっくりするのは当然だがそれで化け物扱いされるとその本人もガックリする気分になる。結構傷つくのだ。

「やっぱ化け物扱いされるってやだよな？」

「そりゃそうですよ。」

「だよな。けど危害は加えないんだからあの言葉は止めてほしいもんだ。」

「あなたも化け物って呼ばれるんですか？」

「呼ばれても仕方ねえな。オレ化け物より危険だからな。」

「??」

「まあそれは席についてから話してやるよ。」

少し話した後、2人はエレン達がいる席へ向かった。

エレン「やっと来た。もう料理くるよ？」

ソル「悪い悪い。まあ座ってくれ。」

ツタージャ「はい、失礼します。」

マステイマ「どうぞ。」

ベリアル「さて、ソル。今回は何について話すんだ？」

ベリアルがソルに今回の目的を聞かせるように要求した。ソル以外には分からないのでソルに説明を求めた。

ソル「今回の話はまあ見ての通りこのツタージャのことと、その詳細だ。」

ツタージャ「?・・・何だかよく分かりませんがとりあえず自己紹介しましょう。僕はバグに対抗するために結成されたバグ駆除組織、D - A D V E N T に所属している三原ツカサです。」

ソル「D - A D V E N T ? バグ? まあいいか。オレはソル。平均よ

り背がでかいが一応ルカリオだ。見ての通りな。便利やのfennirを営業してる事務長だ。こっちのマグマラシの方はエレン、グライオンの方はベリアル、こっちのバクフーンがマスティマ。全員fennirの構成員だ。ああ、後マスティマはエレンの母親だ。」

ツタージャ改め、ツカサが自己紹介した後にソルも自己紹介と仲間の紹介をした。

ツカサ「fennirというのははあなたは達でしたか。よろしくをお願いします。ところでみんな名字は無いのですか？」

ソル「オレ以外はないな。まあオレの名字も偽名だから無いんだけどな。オレの名字は「ネファステュリス」災いの塔って意味だ。」

ツカサ「災いの塔か、いかにもイレギュラーに見られる名字ですね・・・では本題に入りましょう。さっきバグとD-ADVENTを知らないと言ってましたが本当なんですか？」

ソル「ああ、全く知らん。お前達知ってるか？」

ソルがエレンとベリアルとマスティマに聞いた。

マスティマ「いや全く。」

エレン「はじめて聞いたけど。」

ベリアル「オイラも知らない。」

全員知らなかった。

ツカサ「そんなバカな。いくらバグが降りかかってないからといって世界には知れているはず・・・」

ソル「なら世界が違うんじゃないのか？」

ツカサ「世界が？」

ソル「オレ達を見てご覧の通り、バグもD-ADVENTも全く知

らない。普通ならどこでも知れてるところが知られてねえなら世界が違うか、過去に来てるかだ。ちなみにお前は今この世界で大量殺害事件の異常発生が起きてるんだが、知ってるか？」

ツカサ「いいえ、聞いたことありません。バグによるものならありますけど。」

ソル「なら考えは絞られたな。世界が違うか、過去であるかだ。今そっちの年は何だ？バグとやらは何時発生した？」

ツカサ「こっちは2062年でバグは2010年に発生、D - ADVENTも同年に設立されました。」

ソル「こっちは2013年だが2010年にはそんなもの発生してないし設立されてない。世界が違う決定だな。」

話し合いの結論で世界が違うが確定した。ソルはまだツカサがメニューを決めてないのに気づいた。

ソル「そういえばツカサ、飯まだ決めてないよな？メニューから好きな選んでいいぞ。」

ツカサ「ありがとうございます。ん〜じゃあマルゲリータとチョリートパフェでいいですか？（どうせドライフードだろうなあ・・・）」

ソル「いいぞ。後ドライフードじゃねーぞ。何が悲しくてあんなものをピザにして食うんだよ。食った奴絶対泣くぞ。（汗）」

ツカサ「え・・・ドライフードじゃないんですか？・・・何かみんなに悪いです。僕だけ本物のピザ食べるって・・・」

ベリアル「殆どドライフードなのか？そっち。」

ツカサ「はい・・・デザートと米と麦と卵と野菜とトウモロコシに水と果物以外全てドライフードなんです・・・」

エレン「・・・」

マステイマ「か、悲しすぎる・・・」

ソル「・・・バグとやらの影響？」

ツカサ「そうです・・・」

ソル「・・・・・・・・なら次はバグだな。」

5人はドライフードの話をした後バグに関して聞くことにした。

ツカサ「バグというのは宇宙から突如、雨のように降ってきた謎の黒い胞子です。胞子は一部を除いて世界中に降りかかり、地面や草木や水等ありとあらゆる物に付着して汚染し、胞子汚染はポケモン達にも牙を向きました。これがバグの特徴です。

その後、大半のポケモンがバグの汚染を免れた島国に逃れた後にバグ駆除組織、D・ADVENTが結成されました。」

ソル「なるほど、じゃあお前が夢で戦ってたあの黒い小さな狼のような奴とか、大剣と盾を装備した騎士のような奴もか。」

ツカサ「そうです。狼のようなバグは「ガブリ」で、大剣と盾を装備した騎士のようなバグが「オールドソイル」といいます。このオールドソイルは最近発見されたばかりの新型なんですがね。」

ソル「なるほどね。じゃあ次聞くとしよう。」

ソルはそろそろ夢のことについて話すことにした。

ソル「オレさつき夢でお前を見たって言ったよな？」

ツカサ「ええ、言いました。」

ソル「夢でお前がバグと奮闘してたの見てたんだよ。夢にしちゃあ生々しかったけどな。波導も感じ取れたし。」

ツカサ「そうなんですか。そういえばガブリに後ろをとられた時、突然光出てきてが辺りを真っ白に染めた後、辺りにいたバグがいなくなってたんです。あの光ってあなたがやったことですか？」

ソル「光を出した覚えはないな。だがお前が後ろをとられた時に拳銃を発砲したけどな。多分それがなっただらうな。」

ツカサ「夢で繋がってたようですね。何か信じられないですけど。」

でも助けてくれてありがとうございます。後ろの奴を撃つてくれなかったら多分僕はやられてました。」

ソル「まあいいってことよ。さてと、夢のこと聞いたし、そろそろこっちも言うか。何が起きてるかについて。」

ツカサの話を聞いた後、ソルのほうも此方の現状をツカサに全て教えた。ツカサは最初訳が分からなかったが次第に分かってきた。しばらく話した後、全員の料理が運ばれてきた。ツカサは本物のピザのマルゲリータを食べた時、感激で体が震えていた。その後チョコレートパフェも食べれたので満足していた。他のみんなには悪いと思っていたが……

その後、ツカサ含めて5人はあの洞窟へ向かった。

無名の洞窟 入り口付近

P M 2 : 1 0

5人は洞窟の入り口付近にいた。

ソル「さて、ここだな。バグがいるところは。」

ツカサ「ここからは僕の仕事です。下がってたほうがいいですよ。」
マステイマ「お言葉に甘えたいところだけどソイツ等も殲滅するのも仕事だね。引くわけには行かないんだよ。」

ソル「デバツクウェポンでなければあまり有効じゃないってことは技も通用するってことだ。オレ達はその技に関しちや威力がずば抜けるから戦力にはなるぞ。後、オレの武器は特殊だからな。」
ツカサ「本当にいいんですね？感染したらどうなっても知りませんよ？」

ソル「感染したら殺し返すまでだ。」

ツカサ「そうですか。（実力を見れば分かることですね・・・）」

ソル「そういうこと。お前等行くぞ。」

エレン マステイマ ベリアル「了解。」

5人は洞窟の中へ入って行った。

しばらく進んでいると最も一般的なバグ、「ガブリ」一体がでてきた。だがツカサには違和感があった。

ツカサ「ん？通常より大きい。それに色が濃くなってる・・・」

ツカサが見たガブリは形は変わってないがいつもより大きく、黒色がもっと濃くなっていた。

ソル「ふ、悪魔と波導が似てると思ったらコイツ等も悪魔化してやる。状態は違うみたいだな。」

ツカサ「どうしますか？」

ソル「決まってるだろ？『消すまでだ』（狂気笑い）」

ツカサ「性格が変化した・・・」

エレン「何時ものことだよ。」

ツカサ「そ、そうですか。（何か変なのに関わったなあ・・・）」

ツカサは変なのに関わったと思っていた。話してる途中にガブリが襲ってきたが……

ソル「おら！死ねえ！！」　ダンドン！！

ガブリ「ぎゅおおおお！！」　ゴロゴロ！　シュウウ……

ツカサ「ただの銃弾で死んだ。それも消滅？」

ソル「侵食破壊作用のある波導を弾に込めている。ただ物理で当てても意味が無いのはさっきの話で分かったからな。有効だと思ってやったら的中したな。」

ツカサ「……戦力としては安心できそうですね。」

5人は洞窟の奥へ進んだ。この先に何があるのかも知らずに……

ミッション14：洞窟の調査パート2：三原ツカサと変異バグ（後書き）

今回はツカサさんと共闘だ。

ソル「楽しみだなあ。（狂気黒笑い）」

ベリアル「技はありったけぶつけたほうがよさそうだな。」

エレン「僕達は後ろで援護しよう。」

マステイマ「アタシのカラミティはそんな甘くないけどね。」

ツカサ「ホント変なところに来てしまいました。」

どんまいです。では次回を待て。

ミッション14：洞窟の調査パート3：バグ殲滅戦レベルアンノウン（前書き）

昨日は宿題のせいで全く書けなかった。

ソル「頼むから宿題貯めないでくれよ。」

そうは思ってるんだけどねえ、中々できないんだよ。

マステイマ「全然駄目じゃん。」

も、もうイワンでくれ。

エレン「また誤字誤植になってるよ……。」

うう、心が痛む……スタート……。

ミッション14：洞窟の調査パート3：バグ殲滅戦レベルアンノウン

無名の洞窟 内部 PM2：15

ソル「何か冷えるなあ。洞窟ってこんなに寒いのか？」

ツカサ「いえ、いくらなんでもこんなに寒くありません。」

ソル達5人は洞窟の中を探索していた。この洞窟は発光物質を含む鉱石が辺りにあるため暗くはなかった。洞窟の中は基本冷えているのだが、この寒さは以上だ。全員の息が白いのだ。それに加えて水滴が垂れてたであろうところは氷で固まっていた。

ツカサ「前ここに来た時は寒くなかったし、氷もなかった。短時間でこうなるなんて・・・」

マステイマ「氷を使う奴がいるんじゃないのかい？」

ツカサ「だしたらカラドリオですね。」

ベリアル「カラドリオ？」

クジャク

ツカサ「孔雀と鷺を模した巨大な怪鳥型バグです。氷弾を発射したり怪音波による攻撃を得意としています。アイツなら氷を使いますが・・・ここまでなるものでしょうか？地形そのものの温度を変える力

はないと思いますが・・・」

ソル「さっきみたく悪魔化してれば別なんじゃないのか？言っただけだったが悪魔化すると攻撃範囲と攻撃力も上がる。それに加えて普通習得できないものも習得できる奴もいる。そのカラドリオも地形を変化させるほどの能力持つてるんじゃないのか？」

ツカサ「それならありえますね。悪魔化とは厄介なものですね。」

5人は洞窟の奥へさらに向かった。

「グゴゴゴゴゴ・・・」

「ピギユギユギユ・・・」

ガブリと孔雀と鷲を模した巨大な怪鳥型バグ、さっきツカサが言ってたカラドリオがいた。カラドリオが体中から強烈な冷気を放って洞窟の壁や周りを凍らせていた。

ソル「孔雀みてえな奴いるな。アイツがカラドリオか。さっきの考えはまあ間違っちゃいないか。それとガブリ数百体か、コイツ等どっから入ってきやがった？」

ツカサ「僕にも分かりません。でも今は殲滅に専念しましょう。」

ソル「だな。カラドリオは氷らしいな。エレン、マステイマ、いけるか？」

エレン「うん、大丈夫。」

マステイマ「獄炎で燃やし尽くしてやるよ。」

エレンとマステイマがカラドリオに気づかれないように近づいていた。一定の距離まで来たところでエレンが攻撃を仕掛けた。

エレン「炎の渦！」

カラドリオ「ピギユアアア！！」

カラドリオはエレンが繰り出した炎の渦に飲み込まれた。カラドリオは身動きが取れずにいた。そこにマステイマが大鎌カラムティでカラドリオの脳天を真っ二つにしようとした。

マステイマ「裂ける！！」　ズガガガガ！
カラドリオ「p・・・」　ドズン！

ツカサ「馬鹿力ですね。そのまま真つ二つって。おっと、忘れてました。」

ベリアル「ガブリに気づかれたな。」

ソル「そりゃああんだけ叫び上げりゃあな。」

ガブリの大群「ゲルオオオオオオ！！」

悪魔化したガブリの大群がソル達に押し寄せてきた。そんな大群を見ても5人は怯まないで余裕の表情でいた。数百体程度ではすでに慣れていたのだ。単に種類ということもあるが・・・

ソル「雑魚ではオレを倒せない。化け物を倒すのは何時だって英雄じゃないとな。」

ツカサ「バグに英雄も何もないでしょう。」

ベリアル「真つ直ぐ突っ込んできて・・・バカか、コイツ等？破壊光線！」　ドーーーーーン！！

ガブリの大群は破壊光線一発で消し飛んだ。胞子が辺りに広がったがエレンとマステイマが火炎放射で焼き払っていった。ソルが波導で感知してバグが全滅したのを確認した。

ソル「バグの除去完了だな。まあ奥にまだまだいるんだけど・・・」

ツカサ「ここから先が大変ですね。ここの奥は大空洞になってて凄
い数のバグがいるんです。」

ソル「なら消さねえとな。ここまでバグ侵食されたらたまったもん
じゃねえな。」

エレン「でも一々焼き払うのはやだなあ。」

ソル「その必要はねえぞ。オレが消すからな。」

ツカサ「そんなに簡単ではありませんよ?」

ソル「それでもやれるならやるまでだ。」

5人はまた奥へ向かった。

そのころ奥では………

シド「へっへっへっ 適当に世界から取り寄せたが中々使えるじゃねえかああ。何て言うかは分からねえがとりあえずコイツ等ここに来てから変異してやがるし死ぬと霧みたく分散して別の奴になるな。」

まあ分散した後少し時間経つと消滅しやがるけど。名前は『エクトズムインフェス』って呼ぶかああ。」

シドは変異したバグのことをエクトズムインフェスと名称して不気味な笑いをしていた。

一方ソル達は・・・・・・・・

ソル「よく湧く奴らだなあ！この洞窟なんなんだ！？」　ダダダダ
ダダダダ！！

バグ「ゲゲエ！ブゴオオ！！」

ツカサ「僕もビックリしましたよ！来た時こんなにいるなんて！」
ズバズバ！

ソルとツカサは周りに群がるバグを片っ端から消していった。ソルは侵食破壊作用のある波導を込めた弾でバグを消滅させていく。ツカサは接近してきたガブリと1つ目の浮遊バグ、アイロードを斬り倒していった。

ベリアル「全くもって邪魔だ！トリプルデスカノン！」

バグ「グゴオオオオオオオ！」

エレン「能力開放、ヴォルケイノランス！」

マステイマ「噴火！」

ベリアルとエレン、マステイマもバグと奮闘していた。ベリアルはトリプルデスカノンでバグを消し飛ばした。エレンはヴォルケイノランスでバグを吹き飛ばす。それをマステイマが噴火で燃やし尽く

した。

ソル「やれやれ、掃除するのは大変だな。」

ツカサ「労力を使いますからね。でも除去できるだけでまだ楽ですよ。あちらでは分散した後の処理が中々できませんから。て、あれ？」

ソル「どうした・・・んん？」

バグ「グゴ・・・ググ・・・」 シュウウ・・・

ツカサが倒したバグは時間が経った後、自然消滅した。それだけでなく、マステイマがカラミティで倒したバグも時間が経った後自然消滅した。ベリアルがハサミギロチンで跳ね飛ばしたバグも自然消滅した。

ソル「・・・悪魔化した影響で攻撃性は上がったが、分散した時に悪魔化の影響に耐えられずに消滅しやがったか。・・・まあ一々除去しなくてもいいってことだな。」

ツカサ「単に世界の違いの影響に耐えられなかったのも考えられそうですか・・・」

ソル「どっちにしろ処理はしなくていいんだからいいだろ？波導も完全に消えてるし。」

ツカサ「そうですか。ならよさそうですね。」

ソル「さてと、行きますか。」

バグの完全消滅を確認すると5人はまた奥へ向かった。しばらく進むと空洞があった。またバグの大群がいるが・・・

ソル「銃に飽きたし、そろそろ剣使つか。」

ソルは背中に背負っていたダインスレイブを「右手」に持った。言い忘れていたがソルはダインスレイブを片手で握って振り回している。ようはベルセルク、狂戦士だ。まあソルは戦士ではないのだが。ソルがバグにゆっくり近づいていった。バグの中に大剣と盾を持ったバグがいた。このバグがオールドソイルだ。こちらも悪魔化の影響で巨大化していた。バグの中では苦戦する相手なのだ。ソルはお構いなしでバグの大群に向かっていった。一定の距離まで来るとソルがダインスレイブを高々と上に振り上げた。

ソル「道を開けなああ！！」

ソルがダインスレイブを振り下ろした。ダインスレイブの刃先から膨大な量の黒い炎がバグの大群の方向に向かって行った。バグの大群はオールドソイルも含めて黒い炎に飲み込まれた。黒い炎が消えた後はバグは孢子もろとも跡形もなく消えていた。

ソル「かゝ弱！これぐらいの雑魚技避けろよ。たかが範囲広いだけの広範囲技なのに。」ギーン！
オールドソイル「グオオオオオ！！」
ソル「そうでもなかったみたいだな。」

ダインスレイブで前方からきた大剣の突きを防いで大剣の先を見た。オールドソイルはまだ生きていた。盾で攻撃を防いだのだ。もう盾は黒い炎によって消えていたが。

ソル「だが盾消えるようじゃまだまだだな。あの炎、0・5%ほどしか波導込めてないからな。」

ソルは拳を軽く握り締めてオールドソイルの大剣を先端部分から柄

の部分をアッパーカットの要領で殴った。

バキバキバキバキ！！

ソル「大剣も脆いなあ。そんなんでオレに勝とうとしやがって・・・
・永年速えよ！！（狂気黒笑い）」ズド！！
オールドソイル「グゴオオ！」

ソルが五本指のシャドークローで手刀の要領でオールドソイルの鎧と胴体を貫いた後、切り上げて止めを刺した。オールドソイルは分散して少し経つと消滅した。

ツカサ「何てメチャクチャな戦い方。戦法もなにもない。それに大剣を殴って壊すって・・・」

ソル「ああ、駄目だ。あの大剣。ポツキーみたく脆い。」

マステイマ「お前さんが馬鹿力なだけだろ。」

ソル「ああ、そうだったな。」

ツカサ「・・・馬鹿力つてのを超越してる気がするんですが・・・

」

そんなこと気にせずにソルはさらに奥へ向かった。

無名の洞窟

大空洞

P
M
3
:
4
9

5人はついにツカサの言っていた問題の大空洞の崖に着いた。大空洞の大きさはおよそ半径4キロ近い空洞だ。

かなり広い。そしてそこに信じられない数の悪魔化したバグの大群がいた。その数ざっと3000体。大型のバグや未確認のバグもかなりの数だった。ソルは口笛を吹いて余裕の表情、ツカサはもの凄いい嫌そうな顔をしていた。残りの3人はあまりの数に黙っていた。そんな5人にシドが現れた。

シド「いあやゝコイツ等便利だねえええ？辺りにエクトズムインフエスが集まってりゃあ消滅せずにまた復活する。感謝してるぜええ？そのツタージャさああん。」

ツカサ「今すぐ消えてください。（ムカツク、凄くムカツク。こんな奴に連れてこられたのか）」

シド「ひどおおお！いきなり消えるはねええだろ。」

ソル「下にいつて地獄を楽しみな！」 ドゴ！

シド「アーーーーーー！！！」

ソルがシドを下に蹴り落とした。バグ達にメチャクチャにされてカラドリオの上に跳ね上げられた。跳ね上げられた先はさっきのソル達のいた崖だ。黒い霧になって復活したが。

シド「不意を突いて下に落とすなよおお！すげええ痛かったじゃねええええかあああ！！！」

ソル「よし！もう一度！！（狂気黒笑い）」 ↑ スーパーDモード

シド「何でええ！？燕返し！！！」

ソル「飛び蹴り！」 ドゴ！

シド「何故だーーーーー！！！！！」 ヒュー・・・ドス

ン・・・ドカ！バキ！ゴン！ベキベキ！！ Gos！ズガ！ドスン！ベシ！パンパン！ドン！ゴロゴロ・・・スパーン！・・・ドサ！

また落ちていつてまたカラドリオに跳ね上げられてまた霧に再生して復活した。

シド「だからやめろって」

マステイマ「よし！アタシも！！」
↑ドSモード

シド「もうくらうか！！」

シドは一定の距離をとった。

シド「全く、説明の最中に攻撃なんて外道つてもんじゃねえぞお
お！」

ソル「テメエにその権限ない。」

エレン「僕先に帰りたい・・・」

ベリアル「オイラも帰りたい・・・」

マステイマ「よし！テメエ殺す！！」

シド「ああ、はいはい！帰りますよ！帰ればいいでしょおお！！
？」

ソル「いや、氏ね！！」
↑意図的に誤字

シド「さいならー」！！それとエクストズムインフェスってアイツ等のことだでなああ、あれ最初に名づけたのオレだからなああ。パクるなよー！！！！」

シドはまた一瞬で消えた。ソルとマステイマは止められなかったことを悔しがりながら地面を踏みつけていた。その際ソルは「ヒヤッハーハー！！」と言っていた。相当ムカついているようだ。まあそんな事言つてバグに気づかれたが・・・

ソル「て、やべえ。気づかれた。」
ツカサ「騒ぐからですよ。」

マステイマ「仕方ない。また殲滅するか。」

エレン「援護は任せて。」

ベリアル「最初にオイラが破壊光線で片付けよう。後からソルとツカサが行ってくれ。」

ソル「お、結構いいじゃねえか、作戦。じゃ、頼んだぜ。」

ツカサ「分かりました。ただ気をつけてくださいよ?」

ベリアル「分かってるよ。じゃあ行くか!!」

最初にベリアルが下に滑空しながら下りていった。下りる最中に破壊光線を辺りに撃ちまくった。それで近くのバグを追い払っていく。後からソル達の下りてきた。

ソル「さて、あんだけいるし、能力洩る訳にはいかねえな。」

ソルは前のように両腕を水平に上げて前に突き出した。

ソル「魔力レベル2開放。眼前のターゲットが完全沈黙になるまで能力を開放する。」

そう言った後、ソルの体全体から赤黒いオーラが出てきた。

ツカサ「何をする気なんですか?」

ソル「決まってるだろ、殲滅だ!!!!」

ソルはバグの大群の中に突っ込んでいった。ツカサは周りに集まってきたバグを倒すことに専念することにした。

ツカサ「やれやれ、疲れる仕事ですね。」

バグ「グゴゲゲゲ!!」

ベリアル「力をセーブする必要なんてないよな?」

エレン「今回は本気出さないと。」
マステイマ「近づく敵は潰さないとなあ!!」

ツカサは目の前にいたガブリとゴリラのような大型バグの一種、ドングを斬り倒していった。左右からまた別のバグがきたが身を捻って避けた。避け後すぐに追撃してそのバグも倒した。しばらく倒し続けてるとツカサはバグの大群に囲まれた。

ツカサ「グラスミキサー!」

ツカサは緑色の竜巻のようなものを繰り出して周りのバグを吹き飛ばした。これで周りに集まったバグは一掃できた。だがツカサの後ろからカラドリオが近づいてきて攻撃しようとした。が・・・

ジャキン!

カラドリオ「ピギユガ!」

マステイマ「大丈夫かい?」

ツカサ「ええ、助かりました。」

マステイマがカラミティでカラドリオをまた真つ二つにしてツカサが攻撃されるのを防いだ。ツカサはまた体勢を立て直してバグに突っ込んでいった。

ベリアルとエレンは火炎放射と破壊光線を連発してバグを倒していた。

ベリアル「数多いなあ!ホント!」 ドーン!ドーン!
エレン「こんな数相手にするなんて思ってたよ!」 ゴオオオオオオ!!

バグ「ゲゲゲゲゲゲ！」

広範囲技でバグを片付けていくが一向に減る気配がない。無理もない。この大空洞にバグがぎっしり詰まってるのだ。中々減らなくて当たり前だ。そんな常識を破壊する奴がツカサ達とは違う方向にいたが……

ソル「オラオラオラオラどうしたあああああ！」

ソルは能力を開放して両腕はオーラで満たされて腕を振ると50メートルくらいの巨大な五本指のシャドークローが出現させて辺りのバグを切り刻んでいった。それに加えて神速で移動しながら巨大なシャドークローを行っているのだ。バグはどんどん減っていった。

ソル「まだ足りねえか。ならチェンジだ！」

ソルは立ち止まってホワイトデビルとブラックエンジェルを取り出した。取り出した時すぐにマガジンを抜いてコートの中側にあるマガジンケースに閉まった。もう1つのマガジンケースからマガジンを取り出した。そのマガジンの側面には、『デストラクション超破壊徹甲弾』と書かれていた。このマガジンにあるのはあのオリハルコンの弾丸だ。そのマガジンをホワイトデビルとブラックエンジェルに差し込んだ。

ソル「くらいな、この弾丸を！」 ドドン！！ドドン！！

放たれたデストラクション超破壊徹甲弾はバグをどんどん貫通していった。次々にバグの大群がドミノのように倒れていく。今ので7

00近くは減った。

ソル「は！所詮数だけか！この弾使うのは勿体無いな！」

ホワイトデビルとブラックエンジェルをコートのホルスターにしまつてダインスレイブで戦うことにした。だがダインスレイブからは赤黒い炎が出ていてそれが先程の巨大なシャドークローに近い巨大な刃に変化した。神速を使ってまたバグの大群を殲滅していた。

これでソルのほうは殆ど片付いてしまった。

ツカサ達のほうもだいぶ片付いてきた。バグの猛攻もだいぶ勢いが無くなってきた。

ツカサ「草結び！」

ツカサが草結びを繰り出して周りに群がったバグの動きを止めた。動きが止まったバグをツカサがロングブレードで斬っていった。後ろからドングがきたが二度もやられる訳なく、攻撃を受け止めた後に反撃で黒いロングブレードで斬り跳ね飛ばした。ドングはそれきり動かなくなった。

ツカサ「ふう・・・やっと片付いた。あっちも終わったみたいですね。」

ツカサが見た方向はベリアルとエレンのいた方向だ。ただ距離が離れててやってる音が聞こえなかったが。ベリアルが残ったガブリを手のハサミでギロチンして跳ね飛ばしていった。エレンのほうは火炎放射で辺りに分散したバグの胞子を焼き払っていた。マステイマ

のほうも噴火などを使って容赦なく焼き払っていた。

ツカサ「さて、ソルのほうは・・・まあ結果は決まってるか。」

ソルの方向はバグどころかバグの胞子すら無かった。奥の暗闇がソルがバグの体液だらけでベトベトになってながらも帰ってきた。

「お、そっちも片付いたか。」

「あなた無茶しますね。あれだけの数1人で片付けるって。」

「全然駄目だ。アイツ等弱すぎる。こんなことなら能力開放せずにやりやよかったぜ。」

「その戦力こっちの支部にもほしい・・・ん？」

「どうした？・・・ああ、バグの胞子が集まって新しい奴になろうとしてんのか。」

ソルとツカサの向いた方向にはバグの胞子が集まって新たなバグになろうとしていた。一定のバグの胞子が集まるとさつきソルが戦ったオールドソイルになった。ただ体全体が紫になっていた。

「最後に亜種の登場ですか。面倒ですね。」

「クク、潰せばいいだけだ。」

「ゴガアアアア！！」

オールドソイルが雄叫びを上げて2人に接近した。オールドソイルが突きを行った。ソルが左手で止めたが少し後ろに体下がった。

「お前は骨がありそうだな。」

「グオオオオオ！！」

オールドソイルが盾でソルに殴りかかった。ソルはそれを右腕でガ

ードした。ツカサが後ろから黒いロングブレードで斬ろうとするが避けられた。

「お前は結構強いな。よし、オレが名前を付けてやるか。お前はの名は『アギガレズト』だ。」

「こんな時に呑気に名前付けてる場合ですか？」

「グゴウウ！」

悪魔化で凶暴化したオールドソイルの亜種改めアギガレズトは大剣を横にして大きく振った。薙ぎ払いだ。かなりの量の斬撃が辺りに広がった。ソルは薙ぎ払いによる斬撃をツカサの方向に向かってる斬撃含めてブラックエンジェルでもの凄く速さで連射して全て撃ち落とした。

「助かりました。」

「いいってことよ。それよりもツカサ、作戦があるんだが・・・」

「なんですか？」

「アイツ普通に倒そうにもバグの胞子が広範囲に分散するのは面倒だからな。オレがアイツの動きを止めるからお前が止め刺してくれ。お前のあの剣の怪物なら胞子残らず喰うだろ？」

「えらく簡単な作戦ですね。できるんですか？やれないことはないですけど。」

「さつき素手で止めただろ？」

「そうでしたね。」

「グオオオオオー!!」

「おっとそうだった。」

「来てましたね。」

2人は難なくアギガレズトの攻撃を避けた。避けた後ソルが真っ直ぐ突っ込んでアギガレズトの大剣と盾を掴んで身動きを取れなくさ

せた。

「やれ！ツカサ！！」

「了解、修復」
デバック

「グゴガ！ガガ！」

アギガレズトが暴れようとするがソルが押さえつけてて動けなかった。その間にツカサが黒いロングブレードの刃先をアギガレズトに向けた。刃先からあの怪物が大口を開けて出てきた。その怪物がアギガレズトの喰らい尽くそうと暴れ始めた。ツカサは表情を殺人鬼のように変えてアギガレズトをあゝの怪物が出たまま黒いロングブレードで突いた。

「キャリアアウト 執行」ズガブ！！

「グゴオオオオオオオオオ！！！！」

「じゃあな、次蘇る時はいい奴になれよ？」

アギガレズトは黒いロングブレードの怪物に喰われてこの場から跡形もなく消えた。だが途端に怪物が暴れ始めた。

「またですか！しかも何時もより暴れてる！！」

「オラ飯食ったんだからとっとと元に戻れ！！」 ガアン！

「ウガゲ！！」

ソルが怪物を殴りつけた。怪物は大人しく元に戻っていった。

「実力行使ですね。」

「こういう奴はこれに限る。」

しばらくした後、エレンとベリアルとマスティマが合流した。

マステイマ「あゝやつと終わったか。」

ベリアル「だいぶ疲れたよ。」

エレン「数が凄かったからね。終わるのには時間が掛かるよ。」

ソル「ああ、お疲れ。オレは全く疲れないがな。」

ツカサ「殲滅したのはいいですが、・・・僕帰るにはどうすればいいんでしょうか？」

ソル「あーそうだったけな。帰る方法ってない・・・あ？」

ソルが辺りを見回しながら言っていると何時の間にか崖の近くに赤い魔方阵が出来ていた。その近くには紙もあった。ソル近づいてその紙を見た。紙にはこう書かれていた。

ひでえツタージャへ

勝手に呼び出して悪かったよ。このゲート通つてもう帰ってくれ。今日散々な目にあつて良心砂の一粒くらいできました。つつ訳で帰ってください。ホント帰ってください。マジで帰ってくれ。

スーパーカッコイイシドより

ソル「ついでにテメエも地獄に帰れ。」

ツカサ「なんですか？それ。てか何言ってるんですか？」

ソル「ああ、気にすんな。それとお前宛だ。」

ツカサ「どれどれ？・・・」　ビリビリ

シド「ひでええ・・・」

ツカサはしばらく紙の内容を見た後に問答無用でビリビリに破いた。
ツカサはシドに相当ムカついていたようだ。

ソルはシドがいたのに気づいていたが無視した。

ツカサ「それで、ここ通れば元の世界に戻れると。本当なんですか？」

ソル「ムカつくがゲートの行き先は合ってるぞ。お前の世界の波導がちゃんと伝わってきてる。」

ツカサ「そうですか。」

ソルが顔を〇〇〇メイ〇〇イ3の〇〇ドオーブみたく歪ませながら言った。その後5人は別れの挨拶をした。

ツカサ「では、早いですけどあなた達とはお別れですね。」

ソル「そうだな。まあ、また会えれば会おうぜ。」

ベリアル「じゃあな、得に話さなかったけどオイラはツカサのこと仲間だと思ってるよ。」

エレン「またね、ツカサ。次会うときはみんなで楽しく話せればいいね。」

マステイマ「さよなら、ツカサ。元の世界に戻っても負けないでね。」

ツカサ「ええ、では・・・さようなら。」

ソル「さよなら、ツカサ。」

ツカサは赤い魔方陣のゲートに入った後消えていった。ソルは確認すると3人に向き返った。

ソル「じゃあ、オレ達も帰るか。あの愛しい我が家にな。」

エレン「うん。」

ベリアル「だな。」

マステイマ「帰るとしようか！」

ソル達4人は自分達の家、f e n r i rに向かって帰っていった。

ミッション14コンプリート・・・？

そのころジュワユーズでは・・・

ゼウス「全く、一体何時になったら見つかるというのだ。」

ウラヌス「ホントですよ。ただだけ見つからないんですか。」

ゼウス「あと見てないところといえば公の施設だな。ビルとか軍事施設とか。」

ウラヌス「なら捜査しますか？そこ。」

ゼウス「だな。」

ミッション14コンプリート

ミッション14：洞窟の調査パート3：バグ殲滅戦レベルアンノウン（後書き）

長かったー！

ソル「そうだな。」

コラボ話終了です。次回そろそろ大詰めに行きたいと思ってます。

ベリアル「ホントか？」

マジだよ。次回予告！

次回予告

ウラヌス「強制捜査に移行したオレ達の調査その調査の途中、不自然なビルを発見した。あまり大人数で行くのは駄目だからな。一番付き合いが長いソルと2人でそのビルに侵入した。そしてそのビルなんだったと思う？大当たり（・・・）だよ。」

次回

f e n r i r

魂の乱獲者を喰

らう者達

ミッション15：そのビルは大当たり」

ミッション15：そのビルは大当たりパート1：終結前の出来事（前書き）

今回から戦編だ。

ソル「やつと？」

やつと・・・

ウラヌス「序盤オレ凄い動いたんだけど・・・」

スポーツドリンク飲んで休んでたまえ。

ウラヌス「へーへー。」

ではスタート。今回はある人が来てくれました。
ヘブン オア ヘル！！

ミッション15：そのビルは大当たりパート1：終結前の出来事

注意パロ：落ちから始まります。

便利屋 f e n r i r 5階 A M 4 : 2 0

ソルはいつも通りに寝ていた。で、その日また夢を見ていた。

ソルの夢の中

ソル「くかー」

???「ソルや、起きなさい。」

ソル「ん?・・・あんた・・・誰・・・」

ソルの目の前には変なデブのオッサンが手を羽のようにパタパタさせて飛んでいた。ついでに言うつと凄じ苦しそうだ。

オッサン「私はあなたの剣に宿る精霊、ダーインスレイブの精です。」

ソル「イーーーーー」

現実

「どあああああああああ！！！！！！」

悪夢から目覚めたソル。ネタは「ヘルシング」からでした。元もとのネタは違うみたいだけど・・・

「お前の朝は何時もそれか？」

「・・・ウラヌス、何でいんの？」

「怪しいとこ見つけたんだよ。あの蒼い石持って武装揃えて早く来い。ここで待つてゐるから。ああ、それと今回お前だけだからな、同行者は。」

「何でだ？」

「これから行く怪しいところは公の施設だからな。大人数で行くのはまずいんだよ。」

「なるほど。じゃあ置手紙書いといて行くとするか。」

「三分で終わらせてくれよ？」

「はいはい。」

ソルは手紙に短い文章で済ませた後、武装を揃えた。

「これから行くところは公の施設だからな。見つからないように行くぞ。まあ目的地国外なんだけどな。」

「うへえ、国外かよ。面倒臭いなあ。」

「文句言ってねえでさっさと行くぞ。こっちは権限で高級航空便に乗れるんだからそれで文句無しにしろ。」

ソルが愚痴愚痴言ったがウラヌスが無理矢理連れてくことにした。結局ソルはウラヌスに言われた通りに行くことになった。

アンブリス（地球でいうアメリカ　f e n r i r もここにある）
国際ターミナル

A M 5 : 2 1

「朝だというのに混んでやがるなあ。」

ソルは朝早くにも客がたくさんいるのに嫌気がしていた。

「国際ターミナルだから混んでるのは当たり前だ。」

ウラヌスも嫌気がしていながらも駅の改札口に行った。この国際ターミナルは列車の駅のような構造をしている。そのため簡単に済ませることができる。ウラヌスが何やら怪しいカードを機械のカードの差込口に入れた。

その直後に高級感が漂う切符が排出口から排出された。

「お前等ブルジョワだな。」

「オレは普通の航空機でいいんだけどな。国のお偉いさんが勝手にこうするんだよ。」

「機嫌とるためってか。国民知ったらキレるな。」

「恐ろしいからやめてくれ。」

そんなこと話しながら2人は航空機のところまで移動した。

航空機 アーヴィング 機内客席 AM5:25

ソルはフライドポテトとコーラを頼んで食っていた。ウラヌスはコーヒーとドーナッツを頼んで食っていた。

「ウラヌス、そろそろ目的地の詳細言えよ。」

「そうだな。あれは強制調査の時なんだがな……………」

ヴァンクル ギガルド市街 AM1:30

「さて、大手の商業会社ラプトルに来たが、．．．住民誰もいねえじゃねえか。」

ウラヌスは首都ビンソリアから離れた地点のギガルド市街にいた。この時間でも住民は1人はいるはずなのだが誰もいなかった。

「来た途端にこれかよ。ん？」

ウラヌスは道路の奥から一体のカバルドンがこっちに向かって歩いてきた。ウラヌスは呼び止めようとした。

「おい、あんた。住民やけにいないけど何があった．．．．．」

「はあ、今日も残業係か．．．帰って酒飲みてえなあ。」

「．．．．．アイツ、魂しかない．．．．．」

ウラヌスが見たカバルドンは肉体ではなく、魂そのものだった。ようは死者だ。生きてる者の声が聞こえるはずがない。

「ラプトルが怪しいと見て間違いないな。」

ウラヌスは早速中に侵入しようとしたが．．．

「ん？ち、待ち伏せてやがったか。しかも本当の悪魔が。」

「グルルルルル．．．．．」

ウラヌスの目の前には体全体が凍りで覆われている小型の犬のような生物だ。ポケモンでない存在は明らかだ。

「一端帰還して報告するか。予想外に当たったもんだな。」

ウラヌスは聖書のような本を取り出してあるページを開いた瞬間消えた。

ロンデイス（地球でいうローマ）　ビナスト14番通り

私設対悪魔討伐隊ジュウユース　6階　司令官室

AM 1:33

「亀えええ……何故ベストを尽くさない……」
「まーたこの最高司令官は……こっちは夜勤でやってるつてのによ。」

ウラヌスはイラつときた。最高司令官であろう、ミュウツのゼウスは〇〇ツクの人物の言葉を寝言で言っていた。

「ゼウス様……起きてください。」

「ん？ああご苦労。」

「ホントに疲れたよ！あんた何寝てんだよ！」

「仕方ないだろ！眠いんだからな！」

「コツチだって眠いわ！夜勤でやってんだぞ！！」

「どちらにしろ眠いものは眠い！」

「だー！駄目だこれ！！」

しばらく口喧嘩が続いたがしばらくした後落ち着いた。

「はあ、で・・・どうだった？」

「大手の商業会社ラプトルが怪しいと断定ですね。あそこに悪魔がいました。」

「それもポケモンの悪魔ではなく本当の悪魔が。」

「・・・・・・なら、後は・・・・・・」

「石で確かめるだけですな。」

「では誰を連れてく？プリンストか？アヴェンジャーか？」

「プリンストは強襲の方が向いてます。隠密はあまり得意じゃないでしょう。アヴェンジャーだと隠密性には優れてますが一撃の火力が乏しいです。」

「ならソルは？」

「・・・・・・すぐばれるだろうけど・・・・・・まあアイツなら大体蹴散らしてくれるでしょうね。」

「なら同行者はソルだな。なお事態は一刻も争う。私のところに来ないで即刻ミッションへ移れ。」

「了解。ああ、プリンストとアヴェンジャーをビンソリアに待機させといてください。それとf e n r i rの構成員達もそこにオレが待機させときますから。」

「分かった。では行つて来い。」

「じゃあ行つてきます。それと万が一魔界開いちゃったらそんな時はゼウス様も着てくださいよ。ヘリとかで来ないでレポートで。」

「はいはい、分かつてる。」

ウラヌスはこの時4人分の航空切符を忘れて行つた。

「アイツめ、忘れてつたな。仕方ない、アヴェンジャーに向かわせるか。」

で、現在。

ウラヌス「こういう訳だ。」

ソル「最高司令官務まってるのか？」

ウラヌス「た、多分務まってる。」

ソル「多分ってお前。それにお前もお前だ。ウチの奴らに何も言うてねえじゃねえか。」

ウラヌス「あ・・・。」

ベイリーフ「駄目じゃん。」↑

ウラヌス「しまったー！てバラデュール何でいるの？」

ウラヌスはf e n r i rの全員に伝い忘れていた。ついでにアマテラスと前話していたベイリーフが何時の間にかいた。

そのころf e n r i rでは・・・・・・

ベリアル「アイツ1人で行きやがったか。無事だといいいけどな。」

エレン「大丈夫だよ。ソルは負けたりなんかしないよ。」

エグバード「だな。てかアイツに勝てる奴なんてこの世界じゃないないだろ。」

アマテラス「……みんな、アヴェンジャーが来た。」
アヴェンジャー「最初に気づいたのはやはりあなたですか。波導を感じ取れるって便利ですね。」

アヴェンジャーの声が玄関のドアから聞こえてきた。その後律儀にわざわざドアを開けて入ってきた。

アヴェンジャー「全員に指令です。今すぐ我々の小型ジェットに乗ってヴァンクルの首都、ビンソリアに移動してもらいます。」
アマテラス「何故だ？」

アヴェンジャー「それについては機内で話します。今はなるべく時間を掛けたくないのです。準備が整い次第、私のここに来てくださ
い。」

アヴェンジャーはドアを閉めて外に出た。前にも言ったが彼女は素早く終わらせるのが自分のポリシーなのだ。

アマテラス「あまり時間が無いようだ。装備を整えて行こう。」
エレン「そうだね。」

ベリアル「じゃあ準備を整えよう。」
エグバード「……臭うなあ。あの戦場の臭いが、微かに……」
アマテラス「エグバード？」

エグバード「アマテラス、今回いろいろ覚悟した方がいいぞ。」
アマテラス「……ああ、そうだな。（オレも薄々嫌な予感を感じている）」

4人は準備に取り掛かった。

そのころジュウユーズでは……………

6階 司令官室 PM5:29

「ゼウス様オレですか？」

「そうだ。」

「面倒臭えなあ。」

「いいから行け。」

「へーい。」

プリンストがゼウスに出勤に行かせる最中に出来事は起きた。

プリンスト「じゃあロケットランチャーと大斧をグベ！」 ドスン！

リザードン「痛！」

ゼウス「！？！？」

プリンストに突如頭に青いゴーグルと首に青いスカーフが巻いていて、腰には聖剣のようなものをつけている風変わりなりザードンが何もないプリンストの頭上に落ちてきた。

リザードン「痛ーどこだここは？」

ゼウス「また面倒なことになりそうだ。」

プリンスト「オレの前世は……ガンダムなんだ……………ガク」

さらにギガルド市街では……………

「あーあー面倒な奴呼んじまったなあ、命日来るかもな。」

あの嫌な声が街に響いた。

ミッション15：そのビルは大当たりパート1：終結前の出来事（後書き）

ゲスト来てもらいましたよう。何と作者のフォックさんだあ！
よろしく願いしまーす！

ソル「ひょう！でもまだ来るんだろ？」

来るぜ、恐らく・・・次回を待て！

ミッション15：そのビルは大当たりパート1：終結前の出来事2（前書き）

来たぜえ・・・集結の時（未定）が。

ソル「アンダースタッド（駄目じゃん）」

ひでえ・・・

バラデュール「てか、あたし結局登場してるし。」

うばああああああ・・・

ギルガメス「さっさとコールしてくれよ。」

はいよ・・・それと今回また2人来るぜ。

へブン オア ヘル！！

ミッション15：そのビルは大当たりパート1：終結前の出来事2

航空機 アーヴィング 機内 特注室 AM5：26

2人はバラデュールに遭遇した後強制的に特注室に連行された。

ソル「ブルジョワだなー。」

ウラヌス「うわーせこいなあ。なんだよ、旅客機にスイートルーム並みの設備って。」

バラデュール「あたし特注の部屋だからよ。ちなみに言っておくけど、入国を許可してる国の乗り物にはこれと同じがあるわ。あたしだけのね。」

ソル「我が儘もここまでくりやあ尊敬になるな。」

バラデュール「あたしにそんな言葉通用しないわよ？」

ウラヌス「わお・・・」

バラデュール「それと、あんたに自己紹介しときましようか。あたしはバラデュールⅡアントワネット。あんたは？」

ソル「ソルⅡネファステュリスだ。まあ名字は偽名なんだがな。」

そんなこんなで雑談してたが本題に入ることにした。それとバラデュールはすでにジユワユーズの数名と関わっていたらしい。

バラデュール「今回あんた達ラプトル社に行くそうじゃない。気をつけた方がいいわよ。嫌な予感がビリビリ来てるわ。あんた達にも来てるでしょ。」

ソル「そりゃあな。」

ウラヌス「多分失敗するんじゃないかねえかって思う程な。」

バラデュール「そうよねえ。でもヘタレたら許さないわよ？」

ウラヌス「はいはい、分かりました。」

ソル「戦わないで何が *f e n r i r* かつつの。やるに決まってるだろ。」

バラデュール「ならよし、まあ伝えることはこれだけね。まあ後は行くまでちよつと雑談でもしましょうか。」

ウラヌス「うわ、来たよ。」

ここからバラデュールと雑談をしたが前の哲学のような雑談だった。

一方アマテラス達は・・・・・・・・

????????????????????

「ウエアああひよひやひやひゅひやひやひや！！！！（狂狂）」
「・・・やめて・・・」

辺りが仄暗い謎の広間にエレンとアマテラス？がいた。アマテラスの足元には原型をとどめてない肉塊らしきものがあつた。何箇所にも何かで貫かれた箇所がある。

アマテラスに何「？」がついてるかと言うと体の右半分と服装はアマテラスなのだが、左半分は『体全体赤黒いバクフーンに変貌』していて口がソルより裂けて奇声を上げて笑っている。エレンは涙を流しながらアマテラス？を見ていた。

「死ぬえ死ぬえ死ぬえ死ぬえああああひえひやひやひやひや！！！！（狂狂）」
グジュ！グジュ！グジュ！グジエ！↑肉塊を何度も踏みつけている

「もうやめてええええええ！！！」

小型ジェット 機内 AM7:30

アマテラス「！！！」

エグバード「うおわ！いきなり目覚ましがって！」

エレン「凄い魔されてたけど大丈夫？」

アマテラス「だ、大丈夫だ。」

ベリアル「顔色悪いぞ。」

アマテラス「嫌な夢見ただけだ。」

ベリアル「そ、そうか・・・」

アヴェンジャー「精神が不安定になってますね。少し落ち着いてください。」

アマテラス「ああ・・・」

アマテラスはしばらく気になったが気にしても仕方ないと思って外の景色を見た。

また一方ジュウユーズでは・・・

ゼウス「つまり、勝手に呼び出されたということか？フォック。
リザードン「ああ、そうだ。」

プリンス「あ、頭がまだ揺れる・・・」

プリンスは普通に立てていた。少し辛そうだが……
フォックとは前回プリンスの頭上に降ってきた風変わりなりザー
ドンである。話によると何者かによる空間転移魔法により、この世
界に呼び出されたいらしい。

フォック「それよりもあの2人も大丈夫なんだろうか……」
ゼウス「あの2人？」

フォック「実は呼び出されたのは俺だけじゃくて後2人いるんだ。」
ゼウス「何？ いったいだれ」 コンコン

ドアのノックの音が聞こえてきた。ドアから1体のレアコイルが入
ってきた。

レアコイル「最高司令官、ウラヌス様から伝言が。」

ゼウス「フォック、ちょっと待ってくれ。」

フォック「ん？ ああ。」

ゼウス「何だ？」

レアコイル「ギガルド市街の北門に生存者と思われるゴウカザルと
ドダイトスの2人組みが情報屋によって確認されたようです。いか
が致しますか？」

ゼウス「ならすぐに保護、事情徴集」

フォックはこのレアコイルの言葉を聞いて反応した。

フォック「ちょっと待て、ゴウカザルとドダイトスの2人組みだと
？」

レアコイル「ええ、そうですが？」

フォック「今すぐ案内してくれ。知り合いなんだ。」

先程言っていた者のようだ。

ゼウス「さっき言ってた自分以外に呼び出されたものか？」

フォック「そうだ。」

ゼウス「なら丁度いい。プリンスト、お前はフォックを案内してやれ。」

プリンストはフラフラしながらも立ち上がった。完全に回復した訳ではないようだ。

プリンスト「了解、こっちだ。着いて来い……」

フォック「おい、フラフラしてるぞ。」

プリンスト「うるせえ。」

フォック「ああ、そうかい。（黒）」

プリンスト「??」（何か黒い気配を感じた気が……まあいいか）」

2人はジュウユーズの所有するヘリのあるヘリポートへ向かった。

ゼウス「介入者が3人か……嫌な予感がする……」

ゼウスはコーヒーに映る明るい太陽が恩恵を受ける太陽とは思えなかった。

そのころギガルド街では……

「何だコイツ等！ポケモンじゃねえな！エナジーバスター！」

「街の人も誰もいない、何か起きてると見て間違いないよ！」

ドダイトスとゴウカザルの2人組みは黒い衣を着た3本角の骸骨と奮闘していた。2人組みの方は余裕で倒していたが……物陰からはシドが見ていた。

「野郎共まで来やがったかああ。全く、ついてねえ。一回死ぬなあオレ。」

またギガルド市街の門から300メートル離れた地点……

「ようやく決着をつける時か。」

「じゃあアナタ、行くでしょうか。」

ギルガメスとマスティマも動き出した。

集結の時は近づいてきた。

ミッション15：そのビルは大当たりパート1：終結前の出来事2（後書き）

次回集結だ。

ソル「短いなあ。」

何度も言ってるだろ、時間無いって！

マステイマ「聞き飽きた。」

ショボーン・・・・・・・・（´・ω・｀）

ゼウス「やつても面白くないぞ。」

ひでえ・・・・・・・・・・

ミッション15：そのビルは大当たりパート3：我 闘士（前書き）

戦編いくさの集結編だ。

ソル「難題はこっからか？」

そうなんだよ・・・ラストからここまでのストーリーはもう完成してるけどその編集がね・・・

ギルガメス「まあやるしかないだろ？」

そうさ。じゃあ行くぜ、パート3

ヘブン オア ヘル！！

ミッション15：そのビルは大当たりパート3：我 闘士

ヴァンクル（イギリスの部分） ギガルド街 門前 AM9：
30

ソルとウラヌスは門の前にいた。この大市街に潜む元凶を破壊するために・・・

ソル「さて、ここまで来れば後は野郎をぶっ殺すだけだな。

ウラヌス「言つとくけど暴れすぎんなよ?」

ソル「さあ、どうでしょう?」

ウラヌス「やっぱ人数増やしとこつ。もう駄目だ、計画ねえ。コイツのせいで。」

ウラヌスは服のポケットから携帯電話を取り出した。そして番号を入力していく。

ピポパ プルルルル

アヴェンジャー「何ですか?」

ウラヌス「ギガルド市街に今いる奴ら配置しといて。ソルが計画ぶっ壊しやがった。」

ソル「おい。」

アヴェンジャー「はあ・・・分かりました。全員ギガルド市街に移動させます。」

ウラヌス「頼んだ。」

プツ・・・・・・・・・・

ソル「まだ実行してねえだろ。」

ウラヌス「どっちにしろやるつもりだろうが。さっさと行くぞ。」

ソル「へーへー分かったよ。」

ソルとウラヌスはギガルド街のラプトル社へ向かった。

街道 P M 9 : 4 3

ソル達の目の前には明らかに不自然な骸骨の石像があつた。何せ道路のど真ん中にあるのだ。これを不自然以外に変えられるなど無いに等しい。

ソル「壊して問題ないよな？」

ウラヌス「ないな、ない。」

ソル「よつと。」 バゴン！

骸骨「ゲゲゲ！！」

ソル「もうちつと学習しろ。」

ソルは微塵の躊躇も無く骸骨の石像を蹴り壊した。何か断末魔が聞こえたが何、問題など無い。

ソル「ん？おい、生存者いるじゃねえか。」

ウラヌス「へ？おかしいな、確かいはいはずなんだが。まあいい、すぐに向かうか。」

ソル「レスキューだ、レスキュー。」

ソル達は生存者と思われる人がいる場所へ急いだ。

大手商業会社ラプトル 入り口付近

A M 9 : 4 4

ドダイトス「なあシルム、ここから嫌な空気が流れてねえか？」
ゴウカザル「そうだね、ドルク。まるで『あの時』のようだよ。」

2人組みのドダイトスのドルクと言われた者とゴウカザルのシルムと言われた者が目の前のラプトル社の入り口に立っていた。そこにソルとウラヌスが来た。

ソル「お、やっぱり生存者いたか。」

ウラヌス「おい、ここは危険だぞ。早くこの街から出る。」

ドルク「悪いがこの空気感じて引くわけにはいかねえんだよ。」

シルム「このビル、ただのビルじゃないでしょ。」

ソル「ああ、何たってそこは魔界への入り口、ゲートだからな。石も青白く光ってやがるな。まあそれで、お前達は何者なんだ？」

ドルク「聞きてえか？聞きてえよな？俺達の事…俺は探検隊ブレイブ！ロマンを求めて探検する探検隊だ、テムエ等のハートに刻んだときな！！俺がドルクでこっちのゴウカザルは相棒のシルムだ！」
シルム「え」と、よろしく。」

ソル「ああよろしくな。ドルクとシルム。敵じゃあないし、実力もかなりある方だな。まあ行きたいってんなら別に止めねえが命の保障はできねえぞ。」

ドルク「俺達はそれぐらい普通に通ってきてる。今回も挑戦するに

決まってるだろ！」

そんなこんなで即席パーティーが造られた。ウラヌスは……

（わーい♪潜入も糞もねえよ♪）

諦める、ウラヌス……

そしてビルに入ろうかと思いきやさらにポケモンが来た。来たのはフォックとバクフーンの2人組み、マステイマとギルガメスだ。

ギルガメス「オレ達のほうが遅刻とはな。」

マステイマ「仕方ないだろ、お客さんきたんだから。」

フォック「お前達無事だったか。」

ドルク「当たり前だろ、俺達を誰だと思ってやがる。」

ソル「知り合い？」

ドルク「まあ知り合いと知り合いだな。（ウチの作者だけだな）」

シルム「作者も連れてこられたってどういう」ズゴゴゴゴゴゴ

突如地響きが辺りに広がった。ビルの上空には黒と紫の不気味な雲が出来ていた。

ウラヌス「何だ！？地震！！？」

ソル「（上空に魔力が集まってる？）急がねえとやべえ、つか話してる暇なかねえ！！」

ギルガメス「魔界が魔法によって無理矢理開かれようとしてるんだ！急がないと開けられる！！」

マステイマ「ピッキングのつもりかい？アイツ！」

ドルク「やべえならとつと行こうぜ！」

ソル「あ、待ちやがれ！！」

7人はギチギチになりながらもビルの自動ドアを通っていった。

大手商業会社ラプトル 一階エレベータールーム？

A M 9 : 5 4

一階はエレベータールームのはずだった。だが周りは何だか変に歪んでいた。

ソル「おい・・・これって・・・」

ギルガメス「もうホントに時間無いな。」

ドルク「おい、何か来たぞ。」

7人の前方に魔法使いの典型的な服装をした人型の悪魔が奥のエレベーターから現れた。

ウラヌス「とつとと倒すか。時間無いからな。」

シルム「なら先手必勝だ。バーニストガン、ブレイクショット！」

悪魔「d d f g f g h j k j」

シルムが炎で具現化させた二丁拳銃から青い光を放つ弾丸が撃たれた。悪魔は呪文を言ってバリアを張るが・・・・・・

バリーン！

悪魔「ぬうおおおおおお」

ソル「おお、バリアを破った。オレも先手必勝で行くか。野郎のビルだから何撃ったっていいよな？」

ソルはホワイトデビルとブラックエンジェルのマガジンをデストラクション超破壊徹甲弾のマガジンに変えて悪魔に向けてトリガーを引いた。

ドウオオオオオオオオン！！

ウラヌス「うお！」

ギルガメス「な！？」

シルム「何この威力！？」

ドルク「すげえ風圧だな！」

ソル「はっはー！雑魚だな！バリアー！！」

弾丸はバリアなどお構い無しに貫いてく。悪魔も何体も貫通して次々と倒れていった。

ドルク「なら俺もやるか！エナジーバースト！！」 ドーーーーー
ン！！

ドルクが口から緑色の広範囲に広がる光線を放った。悪魔達に当たると大きな爆発を起こした。悪魔達は吹っ飛ばされてそのまま動かなくなった。

ドルク「次に進めるな。」

シルム「そ、そうだな。」

ソル「時間はもう迫ってるからなあ。飛ばして行くか！」

ウラヌス「やれやれ、ホントゴリ押しだな。」

ギルガメス「どうせ何時もだろ？」

マステイマ「隠れても意味ないしね。」

7人はエレベーターに乗って最上階を目指した。

そのころ最上階・・・・・・・・

「あー全く、ホント使えねえなああ。やっぱり雑魚悪魔じゃあ話になんねえなああ。ここはわざとこっちに呼ぶかあああ。」

シドは不穏な企みを立てていた。

M10:00
大手商業会社ラプトル 最上階 社長室？
A

部屋にはすでに元凶が待ち構えていた。

ソル「何だ？自分から来たってか？」

シド「いい加減追っ掛け回さないで欲しいんだけどさあ。こっちにh」

ドルク「エナジーバスター！」

シド「危ねえ！不意打ちとは卑怯」

フォック「竜の波動！」

シド「テメエもかよおおおおお！！」

フォック「よし、どうやって料理するか。（黒）」

ドルク「テメエ俺を呼んだからには覚悟できてんだろうな？（黒怒）」

シド「ああ、もう！ロクでなし！」

マステイマ「今すぐ死ね！！」

ギルガメス「そろそろ決着つけさせてもらうぞ。」

ウラヌス「覚悟しろや！このポケジイ！！」

ソル「さあ・・・潰してやるよ！！」

シド「へっへっへーそれができればなあ。」

シドは手の葉を擦り合わせて何かをし始めた。

ソル「！空間の転移か！」

シド「ここじゃあ狭いからなあ。場所でも移そうぜええ。」

ソル「な！」

ウラヌス「ソル！？」

ソルは突然出現した穴に吸い込まれた。ドルクやシルムも吸い込まれていった。

ドルク「畜生、踏ん張りがきかねえ！」

シルム「ドルク！うわ！！」

フォック「ドルク！シルム！！」

ウラヌス「待て！行くな！！」

フォックも2人の後を追って穴に飛び込もうとしたがウラヌスに止められた。

ギルガメス「シド、お前！」

シド「オメエ達大人組みはそこで掃除でもしてなああ！あーへっへっへっへっへ！！」

マステイマ「テメエエエ！！」

シド「安心しな？ママさん。あの餓鬼共はオレが責任もって処分してやるからよおお。へっへっへっへ！！！！」

フォック「時の逆転！！」

シド「なん」

時間が突如巻き戻され始めた。さっきエレベーターにいたところまでいったがそこで空間に亀裂が生まれた。ついには砕け散った。

フォック「何！？」 バリーン！

シド「ヒエーヒエッヒエッヒエ！！ねえどんな気持ち？悔しい？悔しい？悔しいよねえ！？この時間は今オレが管理してるからオメエが何しようが意味ねえよ！バーカ！！ヒエッヒエッヒエ！！いやー準備しといてよかったわ。時間操る奴の対策しといてよかった。あーやべーマジ受ける！！」

シドの言葉はもう従来の話し方と変わっている。フォックは怒りで拳が震えていた。

シド「順番通りに消してやるからそれまで待つてろやー！ああ後マ
マさん。オメエの娘は後でオレが美味しく頂いてやるから感謝しな
あ！」「ここからさきの発言はR指定」（どういうのかはわかんない
けど）「ヒャーホウ！！テンション上がるううう！！！」
マステイマ「~~~~！！ぜってえ許さん！！」
シド「うつせえわバーカ！じゃあなあ！後掃除頑張りなあ！！カツ
コ大笑い！！ギャハハハハ！！！」
ギルガメス「野郎！」
ウラヌス「待ちやがれ！！」

シドは穴に飛び込んで消えていった。エレベーターの上がってくる
音が聞こえてきた。

ゴウン　ゴウン　ゴウン　ゴウン

ウラヌス「クッソーー！あんな屈辱初めてだ！！」

ギルガメス「……………今は悪魔に集中しよう……………」

フォック「ふ・ふふふ・…奴はじっくり料理してやる……………（黒
狂激怒）」

マステイマ「めん玉に画鋏刺しまくってやる……………」

エレベーターが開いた瞬間「後掃除」が始まった。

異次元空間

??????

ソル「たく、変なところに連れてきやがって。」

ソルはただ1人空が紫と茶色で染まっっていて地面が黒い場所にいた。後からドルクとシルムが落ちてきた。

ドルク「つと、随分と高いところから落ちたな。」

シルム「アイツ、何が目的なんだ？」

シドが3人の目の前の地面から出てきた。

シド「ようこそ、ようこそおお。このビックリな空間へええ。」

ソル「死ぬ。」

ドルク「死ぬ。」

シルム「死ぬで済ませないでよ、二人共・・・。」

シド「相変わらずひでええ。」

ソル「テメエ覚悟できてんだろうな？」

ドルク「俺に勝てると思ったら大間違いだぞ。（黒）」

シド「無理無理、勝てんからああ。」

突然シドの姿が変化し始めた。急速に巨大な大仏のような姿になっていった。

ドルク「何だこりゃ？」

ソル「的がデカイだけじゃねえか。」

シルム「でも油断は」

シド「あ、テメエら死んだな。」

ソル「なんだ」　　「ゴーーーーー！！！」

3人は突然右から放たれた光に飲み込まれた。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
...

ミッション15：そのビルは大当たりパート3：我 闘士（後書き）

ソル「おい！何だ最後の！」

油断した結果だよ。

ソル「いや、してねえからな。」

してたから。次回！

全員「早！！！」

次回予告

ギルガメス「狂ってるなんて今のご時世じゃ効かない。それがたとえ異界と繋がることとなってもな。だがそんな時でもオレはマトモな奴はいると思っている。それがアイツ等だ。さて、あのジジイに出された後掃除をするか。シド、次オレと会う時はお前の命日だ。

次回 f e n r i r 魂の乱獲者

を喰らう者達

ミッション16：バスタータイム！

ミッション16：バスタータイム！…テメエの魂はゴミ色だ！！（前書き）

ソル「再戦だ！！」

とうとう最終決戦だね。奴とは……

ウラヌス「ん？ちょっと待て、「奴とは」だと？」

さあ、何のことかな？

ギルガメス「……………」

まあ行くでしょうか。

ヘブン オア ヘル！！

ミッション16：バスタータイム！：テメエの魂はゴミ色だ！！

異次元空間

??????

ソル「魔力レベル2開放。」

ドルク「ロックフェンス、張つといてよかったぜ。」

シルム「でもロックフェンスが・・・」

ソルはダーインスレイブを地面に刺して剣全体から黒い炎が出ていて、ドルクが張ったロックフェンスという技の岩の壁の周りを覆っていて攻撃を防いでいた。だがロックフェンスはボロボロになっていた。ダーインスレイブの黒い炎と共同で防いでもあの光の砲撃にはギリギリで耐えるのが限界だった。

大仏のような80メートル程の巨大な悪魔になったシドは舌打ちをした。

シド「ちつ生意気に障壁なんぞ張りやがって。あのまま消えればよかったのによう。」

ソル「魔力レベル2解除。消える訳ねえだろ。ロリコンジジイ。」

シド「ケー！まだ言いやがるか！！」

ドルク「余所見してんな！リーフストーム！！」

シド「グゲ！テメエ！！」

シルム「大文字！！」

ソル「波導弾！！」

シド「テメエらああああ！！！！ ドガーーーーー！！！！

シドは3人の大技をモロに受けた。黒煙が辺りを覆った。

ドルク「あれじゃあ終わらねえな。まだ気配がありやがる。」

シルム「敵はあの大きさだから攻撃はバンバン当たるけど・・・」
ソル「耐久力か・・・」

シド「たく、テメエ等ホントロクでなしだな。」

ソル　シルム　ドルク「「お前に言われたくないよ。」」

シド「ひつでえええ！もう許さん！！」

ソル「また光線か？んなもんぶった切る！！」

シドが巨大な口から横幅１００メートルに及ぶ広範囲に広がる光線を放った。ソルはダーインスレイブで光線を真つ二つに切ろうとした。

ギューイイイイイイイイイ！！！！

ソル「く！」

ソルは右手に持っているダーインスレイブでその光線を何とか防いでいた。だがソルには何時もにはない真剣な眼つきになっていた。気に食わないというのもあるがそれだけ本気なのだ。

ソル「光線はオレが防ぐからその間にお前等が野郎を攻撃しろ！！」
ドルク「持ちこたえられるのか！？」

シルム「無茶だ！」

ソル「やれ！！時間あるならやれ！これ結構しんどいんだよ！！」

ドルク「・・・ああ、分かった！エナジーバースト！！」

シルム「バーンボール！！」

シド「げええええええ！！！！」

シドは光線を放ってる間にドルクから放たれたエナジーバーストとシルムが放った炎のエネルギーの球体をぶつけた。シドが怯んだため、光線による攻撃は中止された。

ソル「隙だらけだな。弾丸の雨でも喰らえや！」

ソルが容赦なくオリハルコンの弾丸でシドにホワイトデビルとブラックエンジェルを向けてトリガーを連続で引いた。

[illegible]

シド「グゲ！グホ！」

ソル「銃創だらけになりやがれ！！」

シドは弾丸を連続で喰らって体が後ろに吹き飛ばされた。体はソルが言つてた通りに銃創だらけになっていた。

シドは霧になって再生した。

シド「いい加減にしろやああああ！」

シドが巨大な拳を振り下ろしてきた。

ドルク「クソ！避けきれねえ！」

ソル「避けられねえなら攻撃するまでだ！」

シルム「でもあんなにデカイぞ!？」

ソル「**知るか！オレを舐めんなあ！！**」

シド「潰れるああああ！」

ガアアアアアン！！

ソルがダーインスレイブでシドの巨大な拳に斬りかかった。刃と拳がぶつかって辺りにもの凄い衝撃波が広がった。

ソル「その拳なんか真っ二つにしてやる!!」

シド「死ね死ねえエエ!!」

ドルク「俺達を忘れた訳じゃねえだろうな!シルム、やるぞ!!」
シルム「おう!」

ソルがシドの拳を真っ二つにしようとしている最中にドルクは上空にエナジーボールを放ってシルムはそのエナジーボールに火炎放射を繰り出してエナジーボールがオレンジ色になった。そこからドルクがオレンジ色になったエナジーボールをタックルしてシルムが同時にパンチをしてエナジーボールをシドにぶつけた。

シルム「連携技、」

ドルク「アトミックショット!!」

シド「な!？」

ドガ「……………ン!!」

大爆発を起こしてシドが遠くに吹っ飛んだ。ソルは迎撃するために神速でシドを追いかけた。

ソル「今度こそ死ね!!!!」

シド「ぬああああああああ!!!! 舐めんな餓鬼共おおお!!!!」

20

フォック、ウラヌス、マスティマ、ギルガメスの4人は部屋で大量の悪魔と奮闘していた。

ウラヌス「全く！数だけは立派だなあ！」

フォック「そうは言ってもこのまま続くと不利だろ！」

ギルガメス「時間の管理が奴にされてる以上ここでは時間を操る技が使えない。奴が力を無くすまで倒し続けるしかない！」

マスティマ「ああもう、援軍が欲しいよ！！！」

悪魔「グゲガゴゴゴ！！！」

4人それぞれまだ疲れは無かったがこのまま進むと劣勢だ。フォックが魔法などを詠唱して悪魔を次々に倒すのはいいが魔法に耐性がある奴が多いため、あまり有効的ではなかった。マスティマとギルガメスは接近戦で敵を倒していたが数は一向に減らなかった。ウラヌスは銃剣を投げて悪魔を次々に刺していたが銃剣の数が少しずつ減ってきた。

フォック「このままやっても不利だな。青い炎！！！」

ウラヌス「何！？青い炎！？！」

フォックが口から青い炎を吐いて前方の悪魔を全て焼き払った。今のおかげで一端部屋にいた悪魔は掃討できた。しかしまだエレベーターの駆動音が聞こえる。まだ来るみたいだ。

ギルガメス「クソ、奴に時間さえ管理されてなければ！」

マステイマ「あの子達が勝つまでやるしかないか……」

ウラヌス「おい、来るぞ。」

フォック「まだまだ来るのか！」

ガゴン！ ウイーン

エレベーターが止まった音がした。ゆっくりエレベーターのドアが開いた。ドアの先にいたは……

アマテラス「嫌な感じがしていると思ったらやっぱりか。」

ウラヌス「アマテラス！？それにプリンスト！？」

プリンスト「たく、何体居やがるんだよ。ここ。」

マステイマ「ああ、援軍が来た……」

フォック「これで少しは楽になるな。」

ギルガメス「ここまでいた奴らは？」

プリンスト「全部倒した。というよりも殲滅した。」

アマテラス「まだいるぞ。」

ゴウンゴウン

エレベーターの駆動音がまた聞こえてきた。

プリンスト「どっから出てきてんだよ！さっきは殲滅したはずだぞ！」

ギルガメス「契約者を倒さない限り奴らはどこからでも出てくる。
ほら戦闘準備しろ！！」

また後掃除が再開された。エレベーターが開いて多くの悪魔が待ち構えていた。

再び異次元空間

シドは全身傷だらけだった。もう再生する力が残ってないようだ。だが悪人の悪足掻きとはホントにたちの悪いこと、この上ない。それはシドも同じだった。

シド「テメエエエエラアアア！！覚悟出来てるんだろぅなあああああ！！！！！」

シドが口に青黒いエネルギーを溜め始めた。

ソル「まだやるつか？まあいい。そろそろ決着つけるか。」
ドルク「これで終わりにするか。」

シルム「ありったけの技をぶつけてやる！」
シド「死ねやああああああ！！！！！」

シドが青黒いエネルギーボールをソル達に向けて放った。ソル達の方も技をぶつけるつもりでいた。

ソル「じゃあ決着つけるか！波導弾！！！」
ドルク「これで終わりだ！エナジーボール！！！」
シルム「止めだ！バーンボール！！！」

波導弾とエナジーボールとバーンボールが三つに重なって青黒いエネルギーボールにぶつかった。青黒いエネルギーが少しずつ押されてきた。

シド「んな、んな馬鹿な！！！！！」
ソル「的に真っ直ぐ。さあ3人であれ言おうぜ！！！」

ドルク「何をだ!？」

シルム「何を!？」

ソル「大当たりを言っただよ!」

ドルク「大当たり?・・・ああ、なるほどな!」

シルム「お、大当たりを言えばいいんだな？」

ソル「そうだ!じゃあ行くぜ!!3・・・2・・・1!!!!」

シド「ど畜生おおおおお!!!!」

青黒いエネルギーボールを3発の玉が貫通した。

そしてソル、ドルク、シルムが3人揃えて決め言葉を放った!!

ソル&ドルク&シルム「「JACKPOT!!!!!!」

ドガ-----

――――ンンンン！！！！

シドは3発の玉を喰らってこれまでにない大爆発に飲み込まれた。
シドの断末魔が空間に響いた。

シド「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」
ソル「ふふ、終わったな。」

ドルク「な、何だ？視界が白くなってきた！？」
シルム「うわ！何だこれ！？」

3人の視界がだんだん白くなってきてついには何も見えなくなった。
・・・・・・

大手商業会社ラプトル 最上階 社長室？

A M 1 0 :

4 2

ギルガメス「！時間の拘束が無くなった・・・・」
フォック「アイツ等倒したのか！ならあれが使えるな。時の停止！」

フォックが技を使った瞬間全員動かなくなった。その間に悪魔を一体ずつ切り倒して行った。全て倒し終わると時の停止を解除した。

ウラヌス「何か・・・時間を止められた感覚が・・・・」

フォック「そりゃあ時間を止めたからな。」

マステイマ「あ、おい！帰ってきたぞ！！」

突然穴が発生してそこから瀕死になったダーテングのシドとソルと

ドルクとシルムが出てきた。

「ウイルス、やっと終わったか。すげえ大変だったんだぞ！」

ソル「こっちだってきつかったわ！能力開放なしでやったんだからな！！」

ドルク「ああ久々に暴れたぜ。」

シルム「あんなデカイ奴は初めてだったけど……」

アマテラス「はあ……変わらない……」

プリンス「もうどうでもいい感じだな。」

「フォックで、そのダーテングは？」

フォックがシドを指差した。

ソル「ああ・・・そうだった・・・ロリコンジジイ、分かってるな？（狂気黒笑い）」

シド「さ、さあああ？なんだろうね……」

ドルク「そういえば散々フォックを馬鹿にしたよな？（黒怒）」

フォック「落とし前はキツチリ受けてもらうからな? (黒狂激怒)」

マスティマ「娘を切り離れた責任はとってもらうぞ……（怒怒怒怒）」

ソルとフォックとドルクとマステイマがだんだん詰め寄ってきた。

ソル「さあ！ヘル ジャツジメントだ！！」

シド「ま、待てえええ」

フオツク「聖炎爆裁斬!!」

ドルク「ダマシマシガン！」」

マスティマ「噴火！！」

シド「るげあがらばばばばぎゃ あああああああああああああああああああ！！

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ここからは大変危険なため音声だけでお楽しみください。

BGMはキューピー三分クッキング

「おら！まだまだだぞ！このクソ野郎！！」

「責任とれや！！」

「魔界開くところだったじゃねえか！！」

「勝手に呼び出しやがって！！このクソジジイ！！」

「ちょ、ま、ギャああああああああああ！！！！！！！！！！」

シルム「うわゝ（汗）」

アマテラス「苦勞するな……」

プリンス「出る幕なかったな。」

シルム「ていうか爆発音が凄く……」

アマテラス「……外はマスコミだらけか……」

プリンス「あれ、そういえばギルガメス……」

アマテラス「ん？いない……」

バリーン！

何かが割れる音がした。その少し後にギルガメスが壁の隠し扉から出てきた。

ギルガメス「魔界へのゲートは破壊した。今の音はその破壊した音だ。」

アマテラス「なるほどな。」

プリンス「何か言ってけよ。」

ギルガメス「時間が無かったんだ。……で、あっちの処刑タイムはまだ終わってないってか？」

シルム「やりすぎだよ……」

「セイント!!」

「エナジーバスター!!」

「デストロイステインガー!!」

「ブラストバーン!!」

「ルエアアアアアアアアアア!!」

このヘル ジャッジメントは1時間ほど続いたという……。その間にソルとドルクはお互い怪しい同盟を組み合った。ソルのほうが情け容赦なし同盟、ドルクのほうが腹黒同盟だ。その後ギルガメスとマステイマによって冥界に放り投げられたらしい。

7人改め9人は外に出た後、マスコミから全力で逃げたというのは言うまでもない。

そしてギガルド街の門前……

ギルガメス「これでよし。後はこの魔方陣に乗れば元の世界に帰れる。」

ドルク「本当か？」

ギルガメス「もし違ったらその時は煮るなり焼くなり好きにしてい。」

ドルク「そうか、なら信じるぜ。」

フォック「なんか長かったような短かったような……」

シルム「オイラとしてはなんか長かった気がする。」

ソル「とはいえ、もう別れる時だな。お互い帰るべき場所に帰らねえとな。」

ドルク「そうだな。」

ソル「じゃあな、ドルク。次会うときはこんなこと無ければいいな。」

ドルク「ああ、じゃあな！」

フォック「じゃあな！また会おうぜ！」

シルム「また会おう！」

ソル「じゃあなあ！！！」

フォックとドルク、シルムは魔方阵の中に入っていつて消えた。

ウラヌス「さて、別れの挨拶は済んだな？」

ソル「ああ、済んだよ。」

ギルガメス「じゃあ帰るとしようか。」

アマテラス「帰るべき場所にな。」

ソル「分かってるよ。」

マステイマ「ああ、やっとアイツに終止符を打てたか。」

プリンス「あばよ、クソジジイ。もう出てくるなよ？」

ソル「出てこねえよ。よし、帰宅！！！」

6人はまた帰るべき場所に帰っていった。ただ帰る途中、ソルには気になることがあった。

（しかし、本物の悪魔が出てきたか……いずれ何回も戦うことになるそうだな……）

そう思いながらも帰っていった。

一方ジュウユーズ・・・・・・・・

窓からゼウスは外を見ていた。

「魔界のゲートは破壊したか。だが、本物の悪魔・・・・・・・・まだ戦いは続くな。」

ミッション16コンプリート

ミッション16：バスタータイム！：テメエの魂はゴミ色だ！！（後書き）

はい、コラボ回終了。そして次回最終回。

ソル「コラアアア！！1ヶ月ちよいで完結かよ！！しかもジャックポットで！」

どうしても言いたかったんだよ！！それとシーズン2あるからいいじゃない！！次回の作品にご期待くださいよりはマシだろ！！

ソル「よくねえ！」

うつせえ！次回予告！

次回予告

???「あの戦いからほんの3日が過ぎた。アイツ等は変わらずに一日を過ごしている。それだけだ。それだけ……」

次回 f e n r i r 魂の乱獲者を喰らう者達

ミッション17エピソード：ネクストミッション・

……」

ミッション17エピソード：ネクストミッション……（前書き）

終了だ。

ソル「ついにか……」

まだ全部終わった訳じゃないぞ？言っとくがこれはまだプロローグだ。

ソル「そうだったけな。」

じゃあ最後……レッツロック！！

ミッション17エピソード：ネクストミッション……

??????????

風変わりな建物にあの情報屋、マッドハルトがいた。そして電話で何か話している。

「はい！どうも！！つてお前か……………」

マッドハルトの何時のハイテンションは一気にドスのある声に変わった。

「相変わらずお笑いが好きな奴だな、マッドハルト？」

「うつせえ、舌ちょん切るぞ……………」

「おお、怖い怖い！お笑いに命を掛けるアホ人さん！？」

「テメエ表出るや！！お笑いバカにした罪は重いぞ！！」

「ああはいはい、分かったから。それよりいいのかい？平和ボケしてて？本物の悪魔が出たのは知ってるだろ？」

「じゃあなんだ？」

「気をつけたほうがいいんじゃないの？悪魔、いや「半悪魔」と「悪魔」に『魔人』が今この世に存在しちゃってるからねえ。」

「だから何だ？そんなのf e n r i r が潰してくれる。」

「はあ？まだあのゴミ事務所生きてんの！？ゲハハ！マジウケル！我々より歴史が小さい奴らがまだ生きてるなんてな！！傑作だ！！！！」

「用件言え！！この恥知らず！！！！」

「ああはいはい分かったよ。あーマジウケル。まあこれから気をつけろってこった！じゃあなあ！！！！」

ブツ・・・・・・・・

「・・・・・・・・二度と電話してくるな!!」

マッドハルトはしばらく怒りが収まらなかった。

そのころ f e n r i r・・・・・・・・

ソル「ん？」

アマテラス「どうした？て・・・・・・・・」

エグバード「どうした？」

ソル「・・・・・・・・いや、なんか空気が変わった気が・・・・・・・・」
ベリアル「??」

エレン「うーん、あんまり分らない。」

ギルガメス「・・・・・・・・また、何か起きるのか？」

マステイマ「さあね、でもまだありそうだね。」

ソル「戦いは、まだ終わらないな。」

某所

「何故！？何故仲間がただのポケモンにつく！？」

「ポケモンじゃない……………」

一体の三本角の骸骨がルクシオを盾にして「そのルカリオ」に問い詰めた。

一匹のルクシオの少女が呆然として、目の前の青いロングコートを着て鞄が黒く、柄が白い日本刀を持った170cm近くのルカリオを見て言った。ルカリオの後ろには何体も口を開けて死んでいるポケモンの集団がいた。

「よく言われる……………」

そのルカリオは低く響く声で言った。その一言一言に重みがある。

「それと、駄作悪魔、俺がただのポケモンに仕えてるのには事情があつてな…………屑に聞かせる話などない……………」

「たった1人の生き残りだ！貴様のただのポケモンに仕えてるお人好しの奴には殺せないだろ！へーはっはっは！！なあ、仲間だろ？オレの逃走を手助けしてくれ」

「少女……………」

「はい……………」

「聞けよ！聞いてんのか！？」

「俺はこれからお前の胸ごとその屑悪魔を貫く。」

「……………」

「ちょ、ちよつと待てよ……………」

「お前は どうしたい？」

「・・・・・・・・・・」

ルクシオの少女は残酷な言葉をぶつけられても目にはまだ諦めが無かった。この時ルカリオが小さく笑った。

「・・・・・・・・・・俺と来るか？」

「な、なあ行ったりしないよな？」

「俺は強制しない。選択はお前がしろ。」

「・・・・・・・・はい・・行きます・・・・・・・・」

「なあ！？」

「・・・・・・・・フ・・」

ド

ス

!!!!

シーズン1 エンド

devils
never cry
イメージエンディングBGMデビルメイクライ3

ミッション17エピソード：ネクストミッション・・・（後書き）

次回作

フレデリック（バクフーン）

「次回、荒野の戦士達。内容は次回待て。シーズン2はタイトル名が変わる。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4810q/>

fenrir 魂の乱獲者を喰らう者達

2011年4月15日02時46分発行